版小

美妙

大月隆著

文學同志會出版

中川藏書

寿岡十勝

概意

美とは萬象の結氣襲ひ來りて吾人の情緒を動かしゝとき妙機名くべからざる愉快の感情を以て又萬象に交際する趣味を云ふ……

妙とは善惡異仝黑白醜美の間に交合的の離るべからざる雅趣ありて萬物皆調停せらるゝ處の致味を云ふ……

美とは道理の華にして物を通して流れ出るものなり……

妙とは不調を調停する生命にして……

快樂噫々たるべき思想上の淑女なり……

美妙前篇

六月隆著

目次

總論
第一章　聲音より來るの美妙
第二章　艶色より來るの美妙
第三章　情より來るの美妙
第四章　知に來るの美妙
第五章　自然に表はるゝの美妙
第六章　心靈に表はるゝの美妙
第七章　調和の美妙
結論

美なる妙なる艶なる麗なる……然れども醜なるものゝあるを知らざるなり……

科學と道誼の一致する妙理を知尋せんとせば……世界を腦中に製造せんとせば……

二十世紀文學の歸處を知尋せんとせば……

世界大文豪の思想を知尋せんとせば……

立身の大道を尋ねんとせば……

東西文學の一致する處を知尋せんとせば……

香木を支那に採り電氣を西洋より採りて日本の家を築かんとせば……

是れ本書の責を以て確實に表明する處なり……

美妙後篇

目次

文學の藪淵
文學の目的
文學の發達
文學の調停

美妙

總論

天地は無限の一大塊にして、大なる動物に似たり。人は活動せる動物にして、小なる天地の如し。天地の法則は人の生命に通じてあらわれ、天地の靈氣は人の靈氣に通じて動々たり、人は恰も物を畫す鏡の如く、天地は恰も彩せらるゝ處の實躰の如し、此鏡なければ此實躰の彩映する道理なく、此實躰の天地なくんば、鏡も亦實躰を彩せしむることなかるべし、鏡に事物を彩映する處の技量あり、實躰も亦此鏡に彩映する處の量容ありと雖も、此鏡と此實躰との間に之を彩映せしむ處の理方の媒介あるにあらずんば、鏡と、實躰とは、其關係を失して互に相會見することを止まんのみ、然らば、之を彩せしむる處の方則と

そは、天と人とを接續する天地の動々たる性命にして、人も亦此性命の包圍のうちにあるものなり、此一大性命の吾人の思想中に互ひに交際するときは、人の性命も始めて生れ出づるものなり、故に此理法の一大命脈に、人々の保持する處の理想を、絶へず、交接せしむるなり吾人は此の如き人を、稱して以て理想家と云ひ、或は詩人と云ひ、或る方面よりは、又哲學者と云ふ。此一大性命の形象をなして表はるゝときは、萬有の實躰をなし、情をなして表はるゝときは、閲然たる靈氣となりて表はるゝことあり、或は想をなして表はるゝものあり、意識をなして表はるゝ處のものあり、色を呈して表はるゝものあり想をなして表はるゝものを人情と云ひ、意識をなして表はるゝものを智慧と云ひ色を呈して表はるゝものを色彩と云ひ、音聲を發して表はるゝものを、音樂と云ふ。

音聲を發して表はるゝものは、人々の音聲機に、動搖たる感情を以て、人生の小天地に交接し、色彩を呈揚して、發揚するものは、人々の眼球の色彩機に映じて、人の腦理に來る、其他皮膚に接して來るものあり、雅味を呈して表顯するものあり、如斯天地の意想は、人生の意想に來交し、天地の情は、人生の情に通ず、遂に天識は、擧りて此媒介をかりて、人識に融合するに至りて再び元に歸するに止む。

此天地の理想、感情、色彩、音聲、等の吾人に來りて、快樂と云ふもの、始めて人生間に降誕するものなり。是等の美なるものを、無感覺のうちに送るものを、無感覺者と云ひ、或は不具者と云ひ、愚者と云ふ。其道理の吾人に來りたるときは、馬丁、勞卒と雖も、轉々、愉々然たるの餘義なきに至る、人としては如何なるものなりと雖も、此快樂を感ぜざるなく、此理法の範圍外に出づることは、又出來ざるもの

なり、若し理性に乏しき處のものならば、情性に受納して、之を感じ、情性に乏しき處のものあらば、必ず理性に於て、考察するに至る、理性も、情性にも乏しきものは、色彩の美艶に於て、之を嫉み、色彩を見るの媒介機を失ひたるものは、嬋々たる妙聲を發する處の、音樂に於て感じ、苟も、自己に其道理の美妙を導びかざるもの殆んどあらざるなり、其美妙の最も濃厚にして、愉快極りなく、吾人の覺性に於て、味ふて味ひ盡し難き處あり、心には只愉悅快樂の情を以て、余を忘れて身の措く處も知らざるに至る、余は之を名けて道理の發揚する處の美妙と云ふ。

美妙の眞想は、好味濃厚にして文字と、言語によりて知り盡し、感じ終ることを得ざること夫れ如斯く、其生命は吾人の快悅の奥にあるものなれば、吾人は之を名けて、物することと難きに至るべし、此の故に

美妙の悟覺は、必竟成し難きものなりしも、先づ天地の艶濃なる道理滴れて、吾人に來り、快愉限りなきときに起る情の發動せる快悅を名づくる一種の名稱にして、世界にある處の文字と、言語とを以ては語り盡し能はざる處の情動の生命を假唱するものなり、余れ一日野邊に、友人と杖を曳き、蜂房を捕獲し、其蜜を嘗む、傍人語りて曰く、其味如何と、余れ之に答へて曰く、甘しと、傍人重ねて又問ふて曰く、其味の甘さは如何計り甘きやと、余れ又答へて實に甘しと云へり、傍人又々重ねて余に問ふて曰く、其實に甘きは、如何計りの程量なるやと、余れ爰に至りて、余れの實際味ひし處の、蜜の甘味を、人に告白するの言語なきに至り、甚だ窮したり、故に、實に、妙に甘味なりと答へたり、友人、笑て、曰く、然らば、味も、其極に至れば只妙味ありと云ふの外、此世には、之を表白すべき言語あらざることを知ると語れ

り。美妙とは、則ち、此の如く、外にある實躰の來りて、吾人の感覺機を、快樂に動かす處の密接なる働機を云ふなり。

余れ一日、櫻花の氣節に於て、九段坂の上位、招魂社内に於て、妙艶なる一小女、櫻下の間に、戯るゝに遐逅す、其情、無垢、聖々として、油の如く、滑かに、風彩純美、高潔、態容馥郁として薔薇の花輪に似たり、眉毛新緑を呈し、月輪の影桂に似て、又之にも獲難し。思想は垢なく、雪花の霏々として降る清皚に需めて得易からず、風姿は妖艶として、天女の畫額に對するも、其眞情を彩する能はざるべく、富士の姿風も、琵琶の岸汀の雅も、松島の艶色も、又、之には幷ひて其艶容を競ひ難し、余は此小女の風姿に見戀して、回々其處を去るに忍びず、時間を餘義なく空費せり、友人も同情を表し、櫻花も亦其美を彼女に奪はれしものゝ如し、其容姿、其風彩、其情動、余の言語を以て

語り盡す能はざるに至れり、只美しき、美しきと云ふのみにして、其美さの心を感動せしめたる容量を、今も、尚ほ、言語に盡し能はざるなり。美とは如斯ときに發動する實躰と、吾人の心情に映動する眞情を云ふものなり。是も只、其一端を此に例して示すのみ、故に美と云ふも、妙と云ふも、此の如き至眞、至潔、至艶、至濃、最も微妙なる處の奥味なれば、盡く知悉する事難しと雖も先つ普通感じ得べき處の動機に接して、快々、悦々たらんことを望むなり。余は只、其美妙の一端を、本書に解説せんと欲するなり。

此美に接して、愉快を増し、此妙に接して、其眞味を識り。進んでは、天地の大情に接吻し、退ひては、人情の奥妙を悟覺し。悲境に呻吟するものは、快樂の本道に出會し、干燥せるものは、此聖潔無垢なる清情に接し、思念を快境に進むるときは人生の境遇奇轉、快樂の新天

地を迎へ、隱遁家は、事業家となり、泣くものは、笑ふものとなり。失望者は、有希望家となり、退くものは、進むものとなり。貧賤者は、化して造化の、無盡藏の、大富貴に、接し哀みは變して喜ひとなり困難は變して安樂となり諸ての谷は埋められ諸ての山岡は夷げられ屈曲たる處は直くせられ崎嶇なる處は易くせられ古人の夢みし天國は最も近き吾人の心靈上に降誕して生きながら蓮の臺に坐することを得るに至る。

第一　音聲より來るの美妙

音響は、美の眞想を、聲に發したる天地の噫氣なり。夫れ天地は大琴の如く、常に動々として、一大音響を發顯す、其大となく、少となく、人畜、木石、禽獸、苟も宇内に形象を奏して顯現するものに至りては、其音を發せざるもの、殆んど罕なり。天地の大動樂に至りては、其音聲、甚だ致濃、幽遠にして、吾人の耳觸の感覺に於ては、或は之を識別すること能はざるあり。吾人の音聲を覺觸するは、只一秒時間に、三萬八千圓以下の擺動に限りて、始めて知覺力に訴ふるものなり、是より以上の、最と最微緻密なる震動に至りては、如何なる聽神經の發達を遂けたるものと雖も、其動搖を覺知することなし。只吾人の美妙なる靈情に、何となく不思議にも快快なる感情を與へて、只妙なる愉

快あることを唱呼するに過ぎざるべし。古代の歴史上にあらはれたる、大聖の詩人、哲者等の記錄に載したる、天の聲を聽きたりと云ふの事實は、此の幽々たる天地の美妙の音響に接し、清夜、獨り天外に聲ありと云ひ、之を造化の音語なりとせられたるなるべし、此蕭々たる、寂幽の邊りに、理想を隱めて、天地の壯大、幽遠なるを感悟し、之に向ひて美なりと叫び、其名くべからざるを妙なりと云ひ、或は之を神の聲なりと云ひしもの、皆此天地の大琴の致妙なる震動に接したるときに始まると知るべし。

音樂に表はるゝ美妙につきては、既に音樂を好むものゝ好く解了する處なり。今月迄、普通の音樂と云へは、六律、六呂の樂調により、木石、紙竹、金石等の音樂器により、空氣を鼓動する處の音聲を云ふ也。是等の音樂は、固より音樂なり然し此音樂も其源は、皆人の意匠中に、

天然の音樂を、模造的に意匠して、自由に發する音聲にして、其美なる、妙なる、眞味に至りては、反て、天然の保有する處の、音聲にあることを了諾するに至るべし、人生の美妙なる性情發達して、天地の幽妙なる、實現の音動に、接融するときは、思はず、音樂會の大琴中にあるが如き、愉快なる情感を發するに至るべし。

音樂の大動するものを、風動、及び海波の音聲となす。風の動搖するや、吾人只其音聲を、無想なる、美妙的性情を離隔したる、感覺にのみ聽くときは、風も亦、無規律の音聲をなして、發動する如くなりしも、吾人能く想を靜めて、規矩ある處の美妙的、觸覺に映動するときは、又風動の搖々たるうち、規律、整然たる樂調を奏して、聽ゆるものなり。故に支那の莊子は、此を唱導して、大音樂と云へり。又古代のユダヤ人は、此音聲の内に、神の密々たる秘奥を認むると云へり。

此大音樂の發動する琴線は、山脈にして。氣候は、彈手の如く。一望際涯なきの大天地は、之が樂器の腹胴なり。

歐陽永叔曰く

聲の西南より來れるものあり悚然淅瀝として蕭颯たり忽ち奔騰して砰湃たり恰も波濤夜驚き風雨驟々至るか如し其物に觸るゝときは鏘々錚々金鐵皆鳴る恰も敵に越く兵もの枚を銜て人聲なくして疾く走るか如し吾れ童子に語らく此れ何の聲そや汝出てゝ之を視よ童子曰清月皎潔にして明河天にあり四方に人聲なく異聲は樹間にあり永叔曰く噫嘻悲哉此れ秋の聲なり胡爲そ來れるや蓋し秋の狀たるや其色慘淡煙飛ひ雲斂まる其容清明にして天高く日晶かなり其氣は慄冽として人の肌骨に砭はりて其意は蕭條として山川寂寥なり故に其聲たるや淒々切々呼號奮發す豐草綠縟として茂を爭ひ佳木葱籠として悅

ふへきなり草を搏へは色變はり木に遭へは葉脫す其摧敗零落する以所のものは乃ち一氣の餘烈なり夫れ秋は肅殺を以て心と爲す天の物に於ける春は生し秋は實のる嗚呼夫れ草木の情なきも時ありて零落す此時四壁の蟲聲唧々として余か歎息を助くるか如し

天に天情あり、流溢して美妙となる、審美は、人を感せしめて、文彩となる。天輪に光り、地獄に隱し、動物に滴し、植物にも發揚す、萬籟の噫氣、風動颯々たり、作れば則ち萬竅怒號す、山林の畏佳たる處には音樂となり、慘憺となり、悲哀となる、百圍の竅穴、或は叱し、或は叫び、或は吸ふ、氣慨閒々、暗約して、天地の法を含むが如し、地獵の鳴動は、海潮を逆本し、幽遠の勢狀は、爰に滿々たり、創天彌久にして、億門の美觀を、天外に雨らし、百嶽の嚴望は、氣肖鑠鑠たり。（文學の調和六十七ページ）

海波の波動する音響も、海岸の巉角に立ちて、只波動の號聲を聽くときは、甚だ亂雜の怒響を發するのみなりしも、暫く海岸を離隔して、耳を地に靜めて、其音響を聽くときは、規矩、整然たる音樂の調をなして響動するものなり。(余れ東海道を巡遊せしとき伊豆の國靜浦の海水浴に遊びしが彼の地の海岸に起る處の波動は「はるかにきこゆるあめのよろこび」なるメッヂストの讃美歌に同じき處の樂調を持てり。又大磯の海波は、百四十番の、樂符にかなゐ。横須賀の海波は、新撰二十二番の樂調と合同す)。風動なり、波動なり、皆地を隔てゝ聽くときは、皆其調に樂々たる、擺動を奏合するを知る、現今各國に行はるゝ、音樂師の意匠に成れる音樂は、皆其紀元を、天地の大音樂風琴より、模匠したるものたることを察知するなり。

海波の音妙を、察すれば、其波動、岸角の物躰に、隱閉する處の樂奏

と、其形角の如何によりて、其音聲を殊別にすることありと雖も、其海中に、隱れたる微聲の、尚ほ吾人を驚かすものあり、月清々、星稀れに、水面大鏡の如き、靜夜に當り、靜かに舟を、海湖に流して、默靜するときは、海中に何物かある如く、極細なる、微響を發して、音聲を發するあり、其聲、甚だ幽竅、微動、其氣塊、余をして仙境の樂地に眠に就かしむるの餘音を發す。是れ恐らくは、海底に沈める海魚の、海水に震接する音聲なるべきか。海魚の水に戲るゝ事何故に規律ある音を出すや。

地中の動物も、亦鳴動して、微聲を地上に送るあり、爰に其實歴を示すべし、或るとき、余れ富士野に旅し、夜中一人にて野邊に宿せり、半夜、目を覺せしとき、月輪は既に西山に傾むき、夜は深沈として、愈々、幽々たり、耳を、地に伏して、之に枕す、然る處、地下に、何

か微聲を發して、歌ふ、小動物ありて、余の耳に其美音を送る、余れ思を靜かにして、之と語るに、しきりに余を慰むる如し、余は其簡潔たる、響きの高調に仝化して、其夜の、寂きを思ふの、餘暇も又あらさる程なり。是れ何によりて然るか。

靜夜、深林のうちに遊はゝ、樹木亦音聲を發して、其歌ふ如き、妙震に驚くべし、勿論、樹木の發生するときは、微震を發するは、免れざる處なるが、余は、信州と、遠州との境界をなせる、青くづれ峠に、一夜を、明せしことのありしとき、妙なる、現象に接せしことあり。夜は、深沈、愈々、幽寂たりしとき、樹木さへも、或は眠るならんとの夜半、反て樹木の聲を發するをきけり。或る樹木は、キンと云ひ、或る樹木は、シユーと叫び、遠き處より、シヤーと云ふを、聽けは、アンと云ひ、又ギキンと云ふ、或は、近き處に、ミシと鳴る、其音調、

連續して、殆も、支那の、清琴の奏音の如し。余は暗中に、深山の妙なる音に接せしは、此時を始めとなす。是のみならず、樹木に包藏する處の樂符に、風の來りて動搖するときは、其音を自在ならしむることあり、暴風樹枝を折るの大震動にありては、樹木に隱包する處の音樂より、非常に、大搖をなす故に、其風調、之と合調することなきも、晩影に至り、微風、緩々、襲ひ來るときは、樹木の樂調、之と合して、美妙なる哀聲を送るなり。此の如きは、造化の大琴を樹木に合調する音にして、美妙の發現する處、又音樂の教科用書なり。

風動、波動は、音聲を奏すると雖も、他のもの〻媒介する處あらざれは、單獨に音樂となることを得ず。然れとも、動物に至りては、他のもの〻關係を待たざるも、單獨に、自由に、獨歩して、呂律ある音聲を發するに至る。詩人の常に唱導する、深山の美人、或は天音の使者

なりとせし處の、鶯の清吾に至りては、其奇韵の高調なる、之を聽くものは誰も、美妙ある音なるを疑ふものあらざるべし。

春風靉靆として寒威を葬むり、暖氣堅冰を溶して、梅花馥郁の花情を呈するとき、庭前の梅林に春鳥の美音を聽くときは、吾人の美情を鼓動することと何れの愉快か之に加かんや。笛聲は嫋々たりと雖も、フルガンは聲柔かなりと雖も、吾人の之を動彈するにあらずんば、音聲を發することなし、然れども鶯の美聲を調するは、吾人の煩ひを要せずして、然々と彈じ、吾人の入費を拂はずして、飛々として來る、造化の美妙も、爰に至りて感謝の外なきに至る。

暖雲、靉きて屏風の如く、四方の大空に懸り、暖氣は、百草を滋育して、嫩芽、日光を望んで地面に伸び始むるのとき、雲雀高く天空に囀づる、野邊の原頭に腰を下してかすかに其聲をきくときは、惡童も又

徒事を休み、利慾只走るの頑老も、亦心靈を、其美音に放任するに至るべし。至る處に鳴き、行む處に囀づるの美風至る處にありては、東京見物の戀想も、夢みるに餘情なかるべし。

時鳥片月を鳴き落し、四隣人聲なく空青く地暗き秋の夜、殺々たる、うし時滿つる寂夜、獨り離れ家の野邊に、星をながめて、野暴しのすざましき、蟲の聲を聽くときは、其鳴調の哀けなるに胸を鼓動せしめられざるもの殆んとあらざるべし。鳴々乎たるものあり、哀々乎たるものあり、悲々たるものあり、寂々たる悲鳴あり、慘憺たる沈痛の音を發するものありて、其總調、一大悲哀曲を奏するが如し、此寂しき殺々たる處にありては、人生の雜然たる行爲をなし不義の事業をなして、營々今日迄暮ひしことを注意せしむるに至る、其想感は、愈々深く襲ひ來りて、過去にありし愛子の死を追懷し、故郷の兩親を慕ひ起

し、無き妻を呼びて悲境に沈み、己れが失策を悔ひて、非行を改め放膽なる輕薄をとがめて、謹慎の境にすゝみ。思沈、愧悔、戰慄して、正義の旅行に殘れる生涯を送らんと決するに至る愈々進んでは天地の化育に同化せんことを需めて止めざるべし。愛の如き境遇に身を浸しては悲哀の何物たるを知らざりし輕操家も、同情の深き人情家となり。兩親の厚恩を感したることなき、不孝の頑者も、妻子の日々勞々として働く困難を無とん着に見過したる放蕩家も。此天地の一大悲哀の大曲に擊動せられしものは、其の本心に立ち歸らざるものなかるべし。藤原の忠房は、之を咏して。

きり〳〵すいたくな鳴そ秋の夜の
なかきおもひは尙ほまさりける

秋の夜のあくるも知らずなく蟲は

わかもの事やかなしかるらむ
やまの端のかたわれ月をなかむれは
わかふるさとの恩はるゝ哉

と最と哀けに其實妙を唱ふて、述懷を己れの過去に及ぼしたるにあらすや是れ人生より自然に湧き出つる自然の情にして吾人も共に感慨の情禁ずる能はさる處なり。

時鳥鳴きつる方をなかむれは、只有明の月そ殘れる時刻、一望靜にして四隣聲なきに至りしとき、須磨の關守をして、幾度となく、此天地の觀に接せしめしときは、眠らんと欲して尙ほ眠むることと能はざりしにあらずや、中納言の床を毎夜洗ひし、厂の聲あるにあらずや。古代の宮人に、故鄕の家庭を幾度となく、追想せしめし、鶴の巢籠りの鳴聲あるにあらすや。內侍、藤氏をして良夫を慕はしめたる、鹿の妻戀

ふ聲あるにあらずや。

秋風起分白雲飛。草木黃落分鴈南歸。蘭有レ秀分菊有レ芳。懷二佳人一分不レ能レ忘。泛二樓船一分濟二汾河一。横二中流一分揚二素波一。簫鼓鳴分發二棹歌一。歡樂極分哀情多。少壯幾時分奈老何。

奥山のもみちふみわけなく鹿の
　聲きくときそ秋はかなしき
秋の野に道もまどひしかりかねの
　こゑする方に宿やからまし
山里はあきこそ殊にわびしけれ
　鹿の鳴く聲に目をさましつゝ
つま戀ふも鹿そなくなるおみなえし
　おのかすむ野の花と知らずや

是れ其一斑を咏したる詩歌なり、蟲の聲や禽獸の聲を以てすら、其悲哀の情にせめらるゝ尚ほ此の如し、況んや吾人之を聽きて、其情の禁する能はずして、詩歌を咏ずるあらば其述懷の情のあふるゝ、如何にかなしくつれなかるらむ。

春の彌生のあけぼのに、
　四方の山邊を見渡せば、
花盛りかも白雲の、
　かゝらぬ峯こそなかりけれ、
花橘もにほふなり、
　軒のあやめもかをるなり、
夕ぐれさまの五月雨に、
　鳴ほとゝぎす名のるなり、
秋のはしめになりぬれは、
　今年もなかはゝや過きにけり、
我夜更けゆく月がけの、
　かたぶく見るこそ哀れなれ、
冬の夜さむのあさぼらけ、
　契りし山路は雪ふかし、
心のあとはつかねども、
　思ひやることそ哀れなれ、

壯快雄々なる聲に至りては、雀の鳴くあり、猫の聲あり、牛の聲あり、惰夫をして尚ほ勇氣を鼓する處の池月の聲あり、人語を眞似するおふむの聲あり、時刻を報する鷄の聲あり、猙々たる獅子の吠聲あり、百獸、百鳥、地獄、海嘯、音聲を送らざるもの、發せざる處、又なかるべし。又此音聲の發する處として、各自、殊有の規律あらざることなかるべし。

天になく、地堂になく、大空のうちに、激聲する處の、天琴とも云つべきものゝ起るに、邂逅することあるべし、彼の炎焚石を燒くの、盛夏、草木は日光に爛だれ、人獸、禽蟲の舌將に乾きて、其聲を發するに難するのときは、陰々たる、密雲、四方の嶽峰を隱くして、日光、隔かに、數條の雲底に葬られしとき、電光、鱗々として上下に起り、百雷儼然として地軸を鳴動するのとき、敖雨、沛然として風に乗して

來るあり、其怒號、爆發する處天地も將に、覆轉せんず壯觀なり、此大響動に接するときは、敖氣ある男子の心膽を發揚し、頭痛を洗ひ去り、希望を强壯ならしめて、清快、浩然、志氣、之が爲に動いて、忽轉して新天地に交るの概感あり。如此天地の大響動に至りては、百萬の音樂師を聘して、那須野の原頭に奏樂會を設くるも、決して獲て得べからざる大妙あり。

敖雨の單調は、電敖の敖聲と合して復調となり、海波の怒號は、暴風の加調によりて爰に合調し、大風動は、小風動を起し、大波動は、小波動を來し、大雷は、小雷を發し、爰に揚々として始めて、宇宙に大音曲を設調するに至る、馬は單音を發するのみなりしも、犬の遠吠へに合調するときは、既に復音となり、牛の聲の單響も、狐の鳴聲と合するときは、好調ある音聲となる。此の如く大雷、大雨、大風、大波

等の各種の單響動も、一時に起るときは、復音に、復音を生し、好調なる音樂となり、之を地に送りて、又音樂的地動を再響せしむるに至る、小聲は、大聲に同し、大動は、小震を招き、粗、細、精、微、遂に合同して、一秒時のうち能く數萬の波動を擺搖するに至る。其細極なる波動に至りては、吾人の美妙情性に靈動して、其感覺を愉快にせしむるに至るべし、是れ吾人の美妙性と、音聲の美妙と、好調交通するときにして、音妙の來りて、吾人の靈妙を叫び起すのときなることを知覺するなるべし。

風波、雷電の聲美なりと雖も、鳥獸の美聲に之かず。鳥獸の美聲、風波、雷電の響動に優ると雖も、人生の、唇舌より、咽調する音聲の、妙なるには遠く及ばざるなり。風波、雷電の音調は、只單に一種の勢力あるのみ、只外物の之に抵するによりて、其音響の波動に、多種の

異りたる響を發するのみ。鳥獸の音聲に至りては、風波の波動より起る震動よりは、少々進歩して、各自に殊別の定律ある聲を發するに至る。人生の口調に至りて、其進歩高等に化して、音曲にも美妙なる餘韻を、嫋々たらしむるに至る、加之、如何なる音曲の韻調にても、自由に發することを得るに至る、悲みの韻調を發すべく、悅びの韻調を發すべく、快々たる、壯大の韻も出すべく、怒れる音聲を發すべく、快妙なる笑悅の韻を出すべく、或は細き音をなし、或は太き音をなし、或は短調に、或は長く、點々、大々、嫋々、快々、自由、自在に發音することを得るものなり。嬰子、慈母を慕ふて泣くときは、百萬の音樂師の悲哀曲を奏するよりも、父母の心膽を奪ふの勢力あり。青年の活潑なる快談には、陸軍に於て進軍するときの壯快なる樂隊よりも、尙ほまさりて、惰老のものをして、尙ほ立たしむる勢力あるにあらず

や。妙艶なる愛子の、可憐なる笑聲には、一國の大事を左右する處の能力あり。演舌者は、此大音調をかりて、人の喜、怒、愛、樂、哀、快、慾の心を支配して、民心の氣圍に統一をなす。田舍の野郎、俗謠を歌ふときは、畜獸之か爲めに耳をひそめ、勞働者、之か爲に、其痛苦を忘るゝに至る、天に向ひて呼へは、天之が爲に答へ、地に伏して之を起せは、地獄之か爲に震動すへし。朋友に向ひて、己れが貧窮を訟ふるときは、朋友の同情、之か爲に立つ、惡を叱すれは、惡邪其後に隱れ、百獸を命令すれは、鰐魚も又退ひて、岸陰に蟄伏す、此美なる、此妙なる、勢力ある生命ある音調こそは、吾人か因て以て樂韵を意匠する處の母田にして、此美妙なる生命によりて、製調し、又此美妙なる生命に音符を映動せしめて、音樂の妙に通す。

音樂とは、木、石、紙、竹、金、石等の器に、此妙調の符を築きて、

人生の自然調を、之に映動せしむるの學なり、哀みの樂あり、笑ひの樂あり、怒りの樂あり、意氣を發するものあり、意氣を沈靜ならしむるものあり、若し人生に於て悲哀のあるときは、吾人か有する悲哀の自然調と共に、此調設したる悲哀の樂を奏す、快樂のときは快樂の自然調と共に、此快樂の樂調をなす、之によりて悲哀すべき者は、音調の悲哀曲と、吾人の悲哀情と、融合して、愈々哀しく、之によりて笑ふべく彈すれは、愈々笑かしく、之によりて志氣を立つれは、愈々吾人の志氣揚々たるべし。人生間に、若し肅靜を要するときは、此樂調を奏して、愈々爰に沈深す。愛婦、愛郎、不時の非命を以て、たもとを現世に離別し、永世、不歸の鬼と化し、同情者の最とも悲境に沈みしとき、此悲哀曲を奏して、吾人其人の同情を自由ならしむるときは、其樂曲より震動する處の感鳴如何に靈情を樂ましむるぞや。音曲の餘

韵、愈々、深く襲ひ來りては、其美聲に沈涙して、感戀餘動、立つ能はざるの哀々たる悲境に至るべし、敦盛をして、青羽の笛を、死出の遺産に殘さしめしは、彼の心に笛を殘したるにあらず、笛より出つる音曲の常に最と悲哀にして、死刑に臨んで、父母を慕ふの情戀々として來りたればなり、彼れは、此の悲哀の音曲に、自分の悲哀情を、繫きとめ、又之によりて遺族のものにも、其同情の悲哀を求めたればなり。

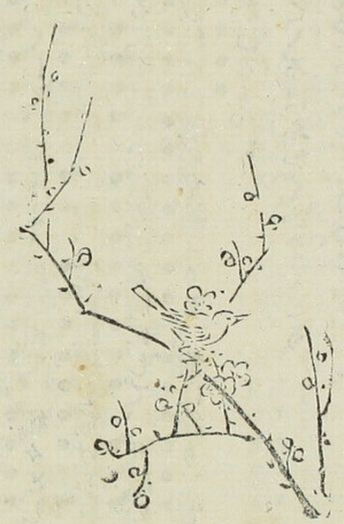
快樂、揚々たる、結婚の式上に於ては、ヲルカンに、ピヤノに、樂隊に、其奏樂を合調するときは、如何に高蹈に其快樂を極むるぞや、其時恐らくば余を忘れて、雀躍抃喜するに至るならん、又清夜、靜寂の夜半、皎月、大空に懸りたるの夕、笛聲の微風に乘して、餘韵を送るに當りては、鐵腸の男子も、又其腸を破るに至るべし、彼の信玄の、謙信と

戰ふや、河中島に於て朧夜、謙信の陣外に笛聲の細く鳴々たるあり、信玄は此聲の如何にも妙にして、耐え難きに至り、隱かに己れが身を侍臣のものにかくして、陣中より忍び出で、嫋々として來る、笛聲に沈醉せり、此のとき敵彈、一發、途に腹邊を痛けられ、病を以て、再び立ち能はざるに至れり、信玄の名將にして、此敵の危嶮を察知せざるにあらず、彼れには敵の危嶮よりも、尙ほ優りて音の笛の優りて慕はしく聽えたればなり。

ものゝ美にこゝろはふかくかまくとも
身にかえんとは思はざりけん

嗚呼美なるかな、音韵よ、汝は幾多の人生をして、汝と情死せしむるを知らざるなり。汝は油の如くなめらかに、吾人の情に來り、汝の容姿は、影をかくして、吾人の腹の奥に入る、天地の大妙も汝によりて

表はれ、人生の妙情も汝によりて活動せらる、汝形態なくして如何に、無限の力を發するや、余は汝の情に離るゝこと能はざるなり。



第二　艶色より來るの美妙

艶色は、無聲の樂にして、音樂は、有聲の妙ある艶色なり。萬物何物と雖も音聲を發せざるものなきが如く、萬物何物と雖も亦艶色を帶びざるものあることとなし、色彩は艶を生じ、艶は美を呈し、美は妙を生じ、妙は愉快なる吾人の美情を養ふて其餘情遂に思想をして又美妙簡潔とならしむ。音聲に單音あるが如く、色彩にも亦單色あり、音聲に復音あるが如く、色にも亦濃色、素色を呈するものなり、音樂に韵律あるが如く、色彩にも色彩上の呂律ありて、之が配置を自然に調停するものなり、其色彩の配置、規律に合するときは、美麗となり、艶彩となり、艶色の配置、規律の宜しきに合せざるときは、爰に始めて醜悪となる、故に彩色には醜と唱ふべきもの更になし只其色彩の配合、

合宜如何によりて、爰に亦始めて醜美は區別せらるゝものなりと知るべし。然らば所謂、醜とは、色彩自然の配置を、人意上より艶色の調停に誤りたるものにして、自然には、醜と唱ふべきもの少もなきなりと思ひて不可なきなり。音樂に至りては、天然の美音を、吾人の美情に摸型せしめ、之を吾人の知識に採用し尙進んで之を樂器に轉畫したるものなりと雖も、色彩に至りては天然の生命ある色彩の外、吾人が美妙性を全然發育することなし、人造の美色を造るは、只是を天然の眞色に假想するまでにして、吾人の靈妙ある美術生命を發育するの價格は少もなきものならん、之によりて考察するときは、艶色の天然に表はるゝ裏面には、濃艶なる美妙的生命ありて、吾人の美術的生命の情と相通し、之によりて美妙の雅味を知覺するに至るものならん、此生命は、只單に色彩上にのみ配置せられて顯現するのみならず、音樂に

も亦通ずるものなり、此無形の生命は、色彩を帶ぶる實躰の母にして、又吾人の知情意の母たるなり、故に色彩の美妙を知り盡さんと欲せば、先つ此母の情の如何に發するかを知りて後にあらざれば、其妙處に達することと至難の事なれども、此事を爰に論ずるの場合にあらざれば、結論に於て、調和の美妙を論ずるとき、細詳に解說すべければ、是よりは宇內萬象に彩刻せられたる、色彩の現象を區別して列擧すべし。

寒威春風に襲はれて北海の邊りに背ぞき、早蕨暖氣に滋養せられて、地面に伸び始むるの氣節となり、櫻花は爛熳として咲き揃ひ、金糸の美麗を呈して、吾人の久しく閉ちられたる憂鬱の心を開き、爰に轉た恍惚たらしめ、最とも快樂なる餘念に、最とも悅々たる春夢の眠りを與へしむ、柳色は黃條を長く微風に流して、燕鳥を招き、草色は青々として、嫩芽、春風に間緩、漂搖たり、百花、歷亂として鬱鬱たる花

雲となり、利花、馥郁として、愈々白く、高きを仰望すれば、高きにあり、低き處を、眺臨すれば、低き處にあり、百望、一圓、際涯を認むること難し、白き處あり、赤き處あり、青き處あり、黄濃たる處あり、萬望の風景、余をして應接に遑あらざらしむ、日光の宮殿も及び難く、ソロモンの榮華を、世界に誇りたるときの美麗も、此花の一片には如かざるなり如斯時氣に接しては、怒聲、眉毛を常に顰むる、頑老の嚴父も、赤染の手拭を冠りて、鹽吹き躍りを始むるに至るべし、老婆も笑ひ、小兒は喜び、猫は戯れ、犬は飛ぶ、朝寐坊は朝起きをなし、小僧も好く庭の掃除を怠らざるべし、悪人も悪事をやすみ、憂鬱病の女子も甦り、閉戸の隱遁家も、亦東臺の邊りに、愉々、快々、杖を曳くに至る、此の知きに至るもの、皆艶色の彩々たる花の美妙に招かれずして何ぞや。

自然に咲き競ひたる、花輪の花苞は、只艶色の美なるのみならず、花木に包有する處の生命ありて、吾人の花を樂む處の美情に通ず、花に有する處の生命は、美なる花情となりて、吾人が保有する處の美術性の情機を發動し、快と叫び、美と呼び、又妙と呼はしむ、人巧の花輪は、之と大に異りて、只奇麗なる色彩を吾人の目前に呈するのみ、爰を以て妙なる花情と云ふもの、絶てなく動々たる生命と云ふものもなければ、從て吾人の美情を發動して、愉快なる感情を與ふるの能力もなかるべし、只眼に、其彩色の、紅白とか、赤黒とかの、區別、辨別をなすのみなり爰を以て、吾人をして、美と想はしめ、妙なりと叫ぶ程なる、生命の價額も從てなきものなり、故に美妙的感想の出づるは、天然の花苞に保つ處の生命の花情より出づるものにして、外に獲て需むるを得べからざるなり。古昔世界の大知者、ソロモンの知慧を認試

せんが爲め、或る巧者ありて、天然に咲きたる花枝を折りて之を摸造し、天然の美花と少も異りたることなき花輪となし、之を天然の花樹に差し込みて、外見天然に開きたるものと少も異ることなき樣にして、ソロモンの殿下に持ち來り、處を隔りて、之が花の醜美を評定せしめしものあり、又天然の花輪も之と共に一樹持ち來り其品定を乞へり、ソロモン情動きて一方を善き花なりと思へども、同しきこと如何にも眞なれば、其班列に甚た苦めり、良々暫くありて、庭前より、花蝶飛び來りて、天然の花に坐せり、此とき風來りて此蝶を追へは、又以前の花輪に來りて止まり、決して他の花苞には行かざりしと云ふ、故にソロモンは直ちに領きて、蝶の止まりし花輪を眞の善き花なりと鑑定せしかば、果して天然に咲ける善き花なりしと云ふ、此の如く、眞の花にあらざれは、辨別なき小蟲の同情をさえ求め得るの勢力なし、

以て人造の花の美妙を送り出す能はざる確證となす餘りありと云ふべし、況んや、人生の高尚なる美情を、人工物によりて發動することに於ておや。決して能くする處にあらず。

余れ一日、友人の家に招かる、來使の曰く、朝顏の花、美麗に咲きたれば、來遊すべしと、余は此招きに應じて其家に至れは、庭は奇麗に掃除しありて、其内に大なる鉢二箇あり、此鉢に朝顏の花美麗に咲き揃ひたり、友人問ふて曰く、此の花のうち何れの方美なりやと、余は知者にあらずして、ソロモンの如き試驗にあい、殆んと、當惑せり、今に蜂か、蝶が來りて、余れの意を助くるかと待てとも、待てとも、少も來らず、余れは、少しく、近よりて之を能く見つめ居りたるとき、一方の花こそ實に眞にせまりて、余か美情を動かし始めたり、余は此花の美なる生命に招かれて、實に美なりと思ひし、一刹那、其氣を引

き動したる花を以て、善き花なりと答へたり。友人笑ひて曰く、好く鑑定せり、近よりて能く御覽あれと、余は友人と共に此鉢に近よれは、案にたがはず、其花こそは、天然に咲きたる牽牛花にして、他の鉢にある花は、友人の令妹の製したる、東京職業學校の卒業式に持へたる、人工の花なりし、是も亦前のソロモンの例と同しく、假想の花は美術性を動かし能はざる確證なり。

春色去りて、初夏來り、金鏞の風景は、濃淡なる青黑色となり、盛夏の炎熱は、木葉を燒きて薄樺色に近かしむ、陽氣は宇内をみたして、廣大なる電池を造る、陰雲幾回となく山の峰端に出てゝは、酷熱に燒き盡され、殆んと大嶽の揚々として大空に押し出し、忽ち轉して退くが如し、此時、夕陽、貌を西山に隱し、只大空に煩射の光を發するとき、陽雲は、白色に燒き變ぜられ、陰雲は濃紅色となり、或は赤となり、或は紫となり、藍となる、那邊には、點々、斑々たる黑雲ありて、紫雲の往來を隱蔽す、其山の邊りには雷雨ありて、光彩、鮮美なる虹霓を顯出し、其狀、七助の大弓を、滿肘を以て張りつめたるかと疑はしむ、紫雲は、風に運はれて、或は南し、或は北に走る、其奇觀、壯大、得て風物すへからざるなり。狩野の畫、風韵あり。文晁の畫、奇氣ありと雖も、南北に動くの生氣を畫出するの技能はなし。只此天然の雲を眞似するに過ぎざるのみ。彩色の美を畫すと雖も、其彩色は、一定にして、時間の經過すると共に變化することなし、之に反して天地の實顯せる風雲は、或は紫雲となり、或は白雲と變化す、此宇宙の大觀は、一定不變の無限なる變化をなして、今日の雲峰は、明日表はるゝ雲と異り、發活、揚々として、永世、其方則の死する如き事は又あらざるべし、此大畫は、土用干をなすを要せず、寶藏に蓄ふること

を要せず、大金を出して購ふことを要せず、田夫野郎と、王公貴人と、少も其眺めに異ることなし。是れ實に、造物主の無盡藏にして宇内の大美色彩をかりて顯はるゝ處なり。急ちにして、萬彩の光景、彩色を黒雲に變化し、虹霓散して、夜色暗憺となる、造化の大妙、實に驚動の外なきに沒す。

炎熱草樹を燒き焦して、急ちにして氣節秋風を送るに至る、燕南に歸り、雁北に向はんと歸旅の用意をなす、早霜草樹を襲ふて其色を化し、草葉の緑青爰に錦色となる、紅葉の錦繡は、萬幹萬山を纏ふて、美麗なる奇觀を呈す、秋愈々深くして、色愈々濃厚なり、朝輝、夕陽、之と觀を競ふて、奇彩、名稱すべからざるに至り、草も繡色となり、無花果も亦紅となる、草として美ならざるなく、葉として樺ならざるはなし、滿山、滿地、美妙の大觀を呈せざる處なきに至る。

秋風の吹きにし日より音羽山
　みねの梢も色つきにけり
白露の色はひとつを如何にして
　秋の木の葉をちゞにそむらん
白露もしぐれもいたくひる山は
　下葉のこらず色つきにけり

原頭には、桔梗、刈萱、女郎花、秋七草の競ひあり、河流は、又錦片を織るが如く、殆んど美を觀るの情を盡し難からしむ。

たつた河もみぢみだれてながるめり
　わたらはにしき中やたえなん
山河に風のかけたるしがらみは
　ながれもあへぬ紅葉なりけり

秋風にあえずちりぬるもみじ葉の行へさだためぬわれぞかなしきと、歌はしめたるも、此美に招かれて、無情なる世の事を思ひ起したるなり。人家、田園の間には、紅白の菊花、霜露の迫害に節操を守りて、一爰に又黄爛たり、田畔の五穀、亦黄淡色を帶びて、一望黄金彩の園をなす、稻妻は、峰涯に燃火して、月の來るを待ち、月輪霜露に乘じて、昇臨すれば、銀色亮として、地面之が爲に清皎なり、夜愈々深きときは、白露直ちに霜と變じて東方の又白きを待つ。

地球は既に獅位に至り、北風は凜烈として、皮膚に粟點を生ずるに至り、池底、凍氷して、河水之が爲に滅す、馬は寒風に嘶き、山家皆冬籠りをなす、太陽南に傾むきて、出れば又直ちに西没す、夜長くして、寒威愈々切實となり、雲は輕々して、空愈々爰に冴ゆるに至り、無數の雪花、片々として降り積り、積りて、寒木之が爲に烈折す、爰に於

てか大塊は、皆鵞毛に蔽はれたるが如く、一望皚々として、一點の黒きを見ることなし。恰もロンドンの水晶宮を銀界に築きたるが如し、此觀の美に接するときは、心目自ら清く、志節自ら俗を脱することを慕ふに至る。

大空の形象、美なりと雖も、山河の風景の勝れるに乏かず、山河の風景、碧天の光輝あるより美なりと雖も、花の美なるには加かざるなり。花如何に美なりと雖も、鳥獸の美貌あるには加かざるなり。鳥獸美貌ありと雖も、人生の美姿ある、風彩の色澤には、遠く及はざるなり。可憐の小女、顔玉の如く、笑を呈して愛情を滴たらすときは、花の美を知らざると雖も、禽獸を愛せさるものと雖も、其美貌に恍惚たらざるもの殆んとあらざるべし。被造物中、色澤の最美、至妙なるものは人生の美麗にまさるもの決して他に需むるを得べからざるなり。艶色

の上より觀察するも、美妙の大極は、人生を待ちて始めて全ふせられたるものなりと云ふて不可なきなり。

色澤と、精神とは、同比例の法則をなして表はるゝものなり精神美なれは、色彩も美に、精神賤けれは、色澤も亦醜となりて表はる、精神弱きときは、色彩青くなり、精神活潑なるときは、色彩、又艶濃なる色を帶ぶ、無生物に至りては、其質細密に至る程、其色澤にも美を呈するに至るなり。石炭の粗質には、光澤なく、金銀、及ひ金剛石の光澤ある以所。此裡に出つるならんか。木石の光澤は、禽獸の光艶に加かず、禽獸の艶色は、人生の艶色に加かず、是れ其保持する處の、各種の生命に、強弱、貴賤の別あれはなり。此觀察若し過まらずんば人生にして、艶色の美貌を慕ふものは、先づ己身の心靈の高尚至潔ならんことを勤むべし、此の理を外にして、只外貌の、美觀をのみ、附屬

物によりて買はんとするものは、恰も腐敗せる魚の腹を、縮緬の織物に包みたるか如し、遂には其腐爛せる悪臭の、縮緬を通して、外に發するに至らん。

フロックコート美なりと雖も、彼れに文想のあるにあらず、若し狼に之を着くにあるも、人を喰はざれは止まざるべし、白粉奇麗なりと雖も、反て皮膚を燒爛して、人生を増々醜悪に化す、心靈を空しくして、美を需め、精神賤しくして、風彩を需めんとするは、毒を呑んて、健康を保たんとするものに等しかるべし。吾人の心、至潔、至聖、無垢、純白なるときに至りては吾人の品位需めずして自ら加へらるゝものなり、モーセのシナイ山より降りたるとき、光澤美貌能く人をして面を見ることをはゝからしめたるは此大美の生命を心内に滿たしたればなり吾人は生の價額を只外貌によりて飾らんとするもの一考を煩はさずして可ならんや。

第三　情に來るの美妙

人生の腦頭には、天地の法則と、萬物の美情を保育す。凡そ物は皆同じき處の性情を有するものは互ひに萃合す、同じからざるものは互ひに相反撥して、分離するに至るものなり、此の故に物の分離するときは性の合はざることを證し、物の相互ひに萃合するときは、情の相同じきことを知る、(電氣磁氣は爰に論ずるの例外なりとす)鐵は鐵を以て萃まり、金は金を以て萃まり、銀は銀を以て萃まる、其間に如何なる障碍物ありと雖も必ず、金鑛は、金鑛を需めて集まるものと知るべし。吾人も此法則の内にありて、余が腦頭にある處の性質と、同種類なる性質のもの外にあるときは、吾人の心は必ず外物に向ひて、感情を發揮し、其間に如何なる障害物ありと雖も、兩者一致せざれは止ま

ざるべし。此の如く、外物と、吾人との間に起る一種の感情を、情に來るの美妙と云ふ、例令ば爰に梅干を見るときは、此梅實を食せざるに先ちて、誰にても口のうちに、梅の味と同樣なる酸き處の唾汁を出すべし、是れ外の梅にある處の酸味と、吾人の心にある處の、梅に同じき處の、性情の相萃合せんとする處の證據にして、皆人の知る處なり、然れども此梅干は、吾人の花の美妙なる色を樂むの性を引き出し得へくもあらざれば、異性のもの、來りて吾人の異性質を、發動し難きことを知るなり。

山海は、壯大なるものなり、壯大なるものを望むときは、吾人の氣節、又從て壯大となる、此の故に壯大なる大洋を望み、幽玄なる大空を眺望するときは、吾人の心にある處の、偉大なる希望心を發し、萬難に屈せざる希望、海山を呑む如き氣慨ある人を養生するなるべし。古人

曰く、大澤の下、能く豪傑を生じ、大希望家は、海岸に生長すと云はれしも、此種に出づるの外なかるべし。

百嶽屹立として、崑に大澤を生し、斷岸、千百丈、清水、岸石を洗ふて、水晶の隈をなすあり此の如き風景に接りては、吾人の清潔なる心を發動して、豪氣の素性を養はしむ。池沼、清漣を蹙め、草花、幽香を吐く處には、温和の德義家を多く出す。

花の美は眼に來り、其色は眼球に映するのみなりしも、花の生命と云はるゝ美妙なる花情は、極細微密なる情動をなして、吾人の美妙情性に來り、吾人は花の色彩を、辨別する以外に、一種之と異りたる感情を引き起し、來ることあり、是れ花の情と吾人の情と、交際するときにして、吾人の情は之によりて最とも温和に、最も美妙に發達し行くものなり、爰を以て花の多く咲き競ふたる野邊に於ては、人の心を花

の情に似せて發達し、花のことを以て其人の心を常に支配するに至るものなり、遂には己れの最愛する子女の名稱に、お花なる名を與ふるに至るなり。又秋の景色の最と美なる處に至れは、人は又此景色にうたれて秋をたしむの情を發動せられ、此處にはお秋或はお萩なる婦人の名の多きことを見るなり、其他海邊に至れは、お波或はお海等の名の多く出づるは、皆此天然の美妙來りて、吾人の情を發し、此の如き風景に似せたる人物となるに至らしむるなり、是れ東京には東京的の人起り、西京には西京的の人士出で、仙臺には仙臺的の人物の出づる所以なり、孟母三度居處を移したるも此道理を自諾したるに外なかるべし。

大美動物の情を通し動物の情を以て、世に表はるゝさまに至りては、天地の現象よりも、草花の美艶によりて發せらるゝよりも、尙ほ一層

まさりて、濃かに又著しきことを知る、清空波靜かにして、水波未だ眠より暴れざるの朝、旭日紫雲を破りて、初光の笑ひを送るの時刻、江上の淺汀に近よりて、藻草の青き間に遊べる、鳧鴨の遊ふ處、白鳥鶴々として、小魚を捕ふるのさま、文禽雄雌にて、水波を共に起すのさま是等に至りては、天よりも、地よりも、海の美よりも、河の流れよりも、甚た光澤の情を呈出して吾人の情を深く感ぜしむるあり。深山の欝々たる樹陰に眠り後れて友を呼び尋ぬるの猿の聲、秋色霜を送りて四山骨を顯はさんとせしとき妻を戀ひ慕ふたる鹿の聲、是等の動物を實見するときは、其情の實に可憐なるに感するなるべし、其他犬の主人を慕ふて低匐するのさま、如何に其情の妙なる美を表して吾人の情に奇想を與へしむるそや、鳩に三枝の禮あり、鴉に反哺の孝あり、百禽、百獸、皆子を撫育して其美妙を表白せさるものなし。

美妙の情を通して發するものは、人生の心より至潔、至皎なるはなし、其心情の發動するや、人生の境遇と、其相對する處の關係に於て、異ると雖も、其發動の源は皆人生の情より出づる處のものなり、此心情の親に對して發するときは、之を孝行の至情と云ひ、其情の子に對して發するときは之を慈情と云ひ、朋友の間に發するときは之を信義の情と云ふ、君に對しては忠と云ひ、若し夫婦の間に施すときは、之を倫理の情と云ふ、親の子を養ふは此情あるを以てなり、子親に親むは此情あるを以てなり、臣君を貴ふ此情あるを以てなり、朋友事業を共にする此情あるを以てなり、夫婦の親まし く家業に碎して苦勞を忘るゝに至るも此情にせまらるゝを以てなり、此情の動く處、喜ひをみたさるゝなく、此情の發する處、幸あらざるなし。

其子を通して表はれし處の此情の働きしことを示せは、或る家に於て

一家不和合、家産次第に滅して困難のさま愈々切なりしとき、幸夫婦の間に一子ありけり、此子肥太りて日増に成長し半語雜りに日用のことを語るに至る、父母は此子の愛情に接して日々の勞苦も忘れて働き居れり、夫は朝早く家を出で、晩は星を戴きて歸り、外にあるときは愛子のやさしき情に早く接吻せんことを望みて其日の勞苦も忘るゝに至れり、母も此子の愛により日々の働きを物憂き事とも思はず、老父老母も、皆此子の成長を望みて成る可くは怒りを發せざる樣になせり、此の如き有樣なる故に、不和合の家庭は變じて愉快樂ある勞働家となり、貧は變じて、富となり、甚だ幸福なる生活に歸り、漸々家産は富むに至る、是れ此の愛子と、父母との情の然らしむる處なり。然る處、一夜計らず、盜賊ありて此家に入り込み、老父母を始め、一家殘らずの者を縛して、金錢を奪はんとするに至れり、此時夜具の內

より肥太りたるやさしき小兒ありて、此賊を見付け這ひ出して笑ひながら叔父さんと云へり、盜賊は此愛らしき姿を見て、忽ち其愛情に氣を採られ余を忘れ戲れたり、此機を伺ひ老父は縛を破りて庭前に出で、近隣の人を呼びて遂に盜賊の害を免れしと云ふ。此子兒の無邪氣なる心情は惡しき盜賊をして、心を美に向はしむるの生命あるにあらずや。此家の不和合を和らげしものも此子の柔さしき美情にあらずや。子の親を慕ふも、此情の發する處より出つ、其事實を擧くるの要なきも、爰に其例を示べし、支那に於て孝行なる子女あり、彼れの親父山水の間に散歩せんことを欲す、子女之に供ふて到る、暫く歩して河邊の岸に至るとき、親父過ちて河中に落つ、此河は名にしおふ支那の黃河なれば水勢急湍にして、近よりて救助すべきの術を施し難し、子女は之を見て二三丁河下に岸邊を見送りて下りしか、親の命の急なる

を知り、遂に己れも河中に飛ひ込み、親のむねに抱きつき、供に死したりと云ふ。又阿波の德島には、己れか兩親の行衛を失ひしを慕ひ、巡禮となりて、日本國を巡り尋ねたる子女あり。一日幸に兩親に邂逅せしゝ、兩親は僞りて、名乘りをせず、且つさとすに、到底何年尋ぬるも、其親は知れさるべしと云ひたれは、此少女は遂に涙にむせびて遂に死を覺悟せりと云ふ。其他吾人は親の後追ひをする子兒あることを知る、吾も亦親の後を慕ふて泣きたる事あり、其情の美にして無邪氣なる愛情は、如何なる處より出つるを知らずと雖も、又至妙の至りならずや。

少女

野澤の邊り。　秋ふけて。　眺さびしゝ。　夕まぐれ。
雲間の雁の。　聲ならむ。　あはれさびしく。　つげわたる」。

をりをもひとり。　門にいで。　父を待つなる。　少女あり。」
涙に袖を。　志ぼりつゝ。　うれひかなしむ。　そのさまは。
咲かゝりたる。　ひめゆりの。　雨になやむに。　ことならず。」
父は先つ日。　かりにいで。　今猶おとづれ。　なしとかや。」
水雞のさはる。　ことあるも。　筧の水の。　ひゞきにも。
父やかへると。　うたがはれ。　夜な〳〵ねふる。　をりもなし。」
今宵は空さへ。　はれわたり。　鐘の音遠く。　きこゆなり。
鳴くなる虫の。　こゑ〳〵に。　いとゞあはれを。　そへてけり。」
かゝるさびしき。　夜半なれば。　ひとりぬもひや。　たへざらむ。
こゝろもとなく。　杖とりて。　いでゆくさまぞ。　あはれなる。」
八重の山路を。　わけゆけば。　空はいよ〳〵。　ふけわたり。
さらぬも女の。　ひとりたび。　あはれさびしさ。　まさるらむ。」

星の光は。　かゝやけど。　月のひかりは。　さしそへど。
父をおもひて。　迷ひゆく。　こゝろの闇には。　かひぞなき。
遠くあなたを。　ながむれば。　ほのかに見ゆる。　ともしあり。
いづこの里か。　わかねども。　それをたよりに。　とめてゆく。
あまたの木立。　むれならび。　あやしき寺の。　そのうちに。
經讀む聲の。　聞ゆるは。　いかなる人の。　おもはざにや。
屋根もかきねも。　やれくづれ。　あたりに人の。　あともなく。
月のかげのみ。　さえ〳〵て。　梢のあたり。　風ぞふく。
門べに立ちて。　ものとへば。　かとうか如く。　聲すなり。
まつまほどなく。　やつれたる。　山僧ひとり。　いできたり。
おもばしこなたを。　うちながめ。　あやしみ居たる。　さまなりき。
少女はそれと。　おろよりも。　すぐにまちかく。　すゝみより。

妾はあやしき。　ものならず。　親をたづねて。　きつるなり。
あはれゆくへを。　おらしなば。　いかで教へて。　たまへかし。
山僧こゝろや。　とけぬらむ。　少女をおくに。　さそひゆき。
ぬしはいつこの。　たれなるか。　つばらにかたれ。　きゝぬべし。
をりしも風の。　ふきすさび。　あたりのけしき。　ものすごく。
裏の梢に。　ふくろうの。　鳴くなる聲さへ。　きこゆなり。
少女はいよ〳〵。　たへがたく。　落つる涙を。　うちはらひ。
妾はもとは。　德島の。　ある武士の。　女なり。
はしめは家も。　富みさかえ。　こゝろゆたかに。　ありければ。
月と花とに。　身をよせて。　たのおく世をば。　おくりにき。
一とせいくさ。　はじまりて。　吹きくる風は。　なまくさく。
つるきひらめき。　たまは飛び。　砲のひゞきも。　たえまなし。

親は子をよび。　子はおやに。
にけゆくさまは。　たとふるに。
わらはゝ母と。　もろともに。
阿波の國まで。　のがれきて。
父は何處に。　おはすやら。
雲井の雁は。　かへれども。
母はおもひに。　たへかねて。
日ごと〳〵に。　おもりゆき。
父の生死も。　わかぬまに。
夢にゆめみし。　こゝちして。
いかにつれなき。　わが身ぞと。
父はひとたび。　ゆくりなく。

わかれ〳〵て。　ちり〳〵に。
あはれといふも。　あまりあり。
そこをにげたち。　ひそ〳〵と。
志ばしそこには。　すみにけり。
あけくれ思はぬ。　日とそなく。
音づれだにも。　なかりけり。
やまひの床に。　つきしより。
あのよをさして。　かえりけり。
母もかへらず。　なりぬれば。
おもへば猶も。　身にぞしむ。
思ひかこちて。　ありつるに。
妾のそはに。　かへり來し。

母のうせぬと。　聞きしより。
世のならはしと。　なぐさめて。
その後かりにと。　いでしより。
またもこゝろに。　たのみなく。
妾の姓は。　百瀬なり。
父は皎月。　母は梅。
これをきくより。　山僧は。
ものをもいはず。　墨染の。
志ばらくありて。　山僧の。
夜もはやいたく。　ふけぬれば。
すゝむる言葉に。　おのづから。
さすがに少女も。　いなみかね。

たゞになげきて。　ありければ。
この年月は。　くらしけり。」
待てどくらせど。　かへらねば。
かゝる處に。　たづねきぬ。」
名は姫百合と。　よびにけり。」
兄は故あり。　家出せり。」
俄に顔の。　けしきかへ。
袖を志ぼりて。　居たりけり。」
少女にむかひ。　いひけるは。
明くるあ志たを。　またるべし。」
ふかき情の。　見えければ。
一夜はそこに。　かりねせり。」

ねむるほどなく。　戸をあけて。　あやしく父ぞ。　いりきたる。」
枕邊ちかく。　さしよりて。　聲もあはれに。　涙ぐみ。
われあやまちて。　谷におち。　今は千尋の。　底にあり。」
谷は荊棘の。　おひたげり。　いてゝきぬべき。　道もなし。」
明日さへたらぬ。　わがいのち。　せめてこの世の。　わかれにと。
思ふおもひに。　たへかねて。　やう〳〵こゝには。たづねきぬ。」
言葉をはらぬ。　そのさきに。　裾ひきとめて。　父上と。
呼ばむとすれば。　あともなく。　窓のともし火。　影くらし。」
夢かうつゝか。　あらぬかと。　思ひみだれて。　あるほどに。
曉ちかく。　なりぬらむ。　本魚の聲も。　たゆむなり。」
夜もやう〳〵に。　明けはなれ。　心もなにか。　ありあけの。
月のひかりの。　影おちて。　そらは白くそ。　なりにけり。」

少女は寺を。　たち出てゝ。　山のたもとの。　小路をば。
たとりてゆけば。　遠かたに。　鹿の啼く音も。　きこゆなり。」
道のゆくての。　刈萱は。　おとさや〳〵に。　うちなびき。
ふきくる風の。　身にたみて。　さむしさいとゞ。　まさりけり。」
岩根こゝしき。　山坂を。　のぼりつおりつ。　ゆくほどに。
みやまの奥にや。　なりぬらむ。　見なれし鳥も。　見えぬなり。」
梢に白く。　かゝりしは。　さるのをかせの。　糸ならむ。
木陰をはしる。　けだものは。　熊のたぐひに。　あるならむ。」
高根に昇り。　見わたせば。　山また山の。　はてもなし。
父はいづこに。　おはすらむ。　かへりみすれど。　かひぞなき。」
をりしも後より。　聲たゝて。　山賊あまた。　よせきたり。
にぐる少女を。　ひきとらへ。　かたくその手を。　いましめぬ。」

あなおそろしと。　さけべども。　人なき山の。　おくなれば。
答ふるものは。　やまひこの。　外には誰も。　なかりけり。」
山のかけちを。　をれめぐり。　谷のあたりを。　ゆきかえり。
ともなはれつゝ。　ゆくほどに。　あやしき家にぞ。　いたりけり。」
内よりまれもの。　いできたり。　少女のすがたを。　見てしより。」
めでたき得物と。　おもひけむ。　ほ手うちわらふ。　さまにくし。」
頭とおぼしき。　ものひとり。　少女のもとに。　さしよりて。
鬚をなでつゝ。　いひけるは。　我はこの家の。　あるじなり。
汝のこゝに。　とらはれて。　きたるはふかき。　縁なり。
今よりわれを。　夫とたのみ。　この世のかぎり。　つかへてや。」
我家に久しく。　ひめおける。　いとも妙なる。　小琴あり。
幾千代かけて。　ちぎりせむ。　今日のむしろの。　よろこびに。

かなでゝわれに。　きかせてよ。　唄ひてわれを。　なぐさめよ。」
假にもいなまむ。　その時は。　からきうきめを。　みせやらむ。」
少女はいなと。　おもへども。　いなみがたくや。　思ひけむ。
なく〳〵小琴を。　ひきよせて。　調べいでしぞ。　あはれなる。」
風や梢を。　わたるらむ。　雁やみそらを。　ゆくならむ。
軒端を雨や。　すぎつらむ。　岸にや波の。　よせくらむ。」
いとも妙なる。　まらべには。　かしこき神も。　まひやせむ。
いともめでたき。　手ふりには。　ひそめる龍も。　をどるらむ。」
賊はをごれる。　風情にて。　酒と肴を。　とりいだし。」
のみつくらひつ。　するさまは。　にくしといふも。　おろかなり。
ひとり木蔭に。　たゞずみて。　きゝわし人や。　たれならむ。」
たつぬる人の。　つま音と。　いよゝ心に。　さとりけむ。

きらべのをはる。　をりしもあれ。　きりていりしぞ。　いさましき。」
刃のひかりに。　おそれけむ。　とみのことにや。　おぢにけむ。
きられてさけぶ。　ものもあり。　逐れてにぐる。　ものもあり。」
きりて入にし。　その人の。　すがたはそれと。　わかねども。
身に纏ひしは。　墨染の。　ころもの袖と。　きられたり。」
わなゝく少女の。　手をばとり。　月のかけさす。　まどにきて。
なおどろきそ。　おどろきそ。　われは汝の。　兄なるぞ。
いざこまやかに。　かたらはむ。　心をきづめて。　きゝねかし。」
父のいかりに。　ふれしより。　こゝろもとなく。　身をやつし。
東の都に。　のぼらむと。　ひとりたびにて。　家出せり。」
をりしも秋の。　ことなれば。　桔梗刈萱。　女郎花。
月はさえ〳〵。　さし通り。　虫の音痛く。　身にしみぬ。」

思ひ返せは。　今までの。　身のいたづらを。　くやみにき。
せめてのことに。　身をたてゝ。　父と母とに。　まみえんと。」
都につきし。　その後は。　たゞ文机に。　よりゐつゝ。
朝夕ならひし。　千々のふみ。　はしめて人の。　道きりぬ。」
父のめぐみを。　きるごとに。　母のなさけを。　きるたびに。
悔ききことのみ。　おほかれば。　なきてその日を。　おくりけり。」
こゝろをあらため。仕へむと。　ふる里さして。　かへりしに。
いくさのありし。　あとなれば。　そのさびしさぞ。　たゞならぬ。」
見渡すかぎりは。　野となりて。　むかしのかげも。　あらしふく。
尾花の袖も。　うちやつれ。　露の玉のみ。　ちりみたる。」
こゝや我家の。　あとならむ。　そや父母の。　死骸ならむ。
てらす夕日の。　かげうすく。　ちまたの柳に。　鳥なく。」

たのみすくなき。　我身そと。　思ひわぶれば。　わぶるほど。
浮世のことの。　いとはれて。　かの山寺に。　のがれけり。」
朝夕いのりを。　するごとに。　はかなきことのみ。かこたれて。
よみゆく文字の。　數よりも。　まげきは袖の。　なみだなり。」
忽ちそなたの。　たづねきて。　ことのよしをば。　聞きしとき。
そのうれしさや。　いかなりし。　そのかなしさや。　いかなりし。」
たゞにわが名を。　名のらむと。　おもひしかども。　まかすがに。
名のりかねたる。　身のつらさ。　名のるよりなほ。　つらかりき。」
あかつきふかく。　別れしを。　道にてこともや。　ありなむと。
あとを追ひきて。　今こゝに。　汝をかくは。　たすけたり。」
少女はきくより。　むねせまり。　兄のたもとに。　すがりつゝ。
兄上樣にて。　ありしかと。　うれし涙に。　むせびけり。」

いたくさけべる。　虫の音も。　哀れよわると。　きくほどに。」
ありあけ月夜。　かげきえて。　峯のよこ雲。　わかれゆく。」
まづかにそこを。　たち出でゝ。　あたりのさまを。　ながむれば。
峯の松風。　聲かれて。　虫の聲落て。　霜まろし。」
手をばとられつ。　とりつして。　かたみに山路を。　すぎゆけば。
夕の賊の。　むれならむ。　あとよりあまた。　追ひてきつ。」
兄はそれぞと。　知りしかば。　早くも少女を。　遁しやり。
ひとりそこには。　とゞまりて。　きりつきられつ。　たゝかへり。」
少女はからく。　にげしかど。　あとに心や。　のとるらむ。」
はるかに高ねを。　うちながめ。　まのぶ心ぞ。　あはれなる。」
道のかたへに。　うちふして。　乳房はなれし。　うぶすなを。
涙なからに。　ぬかづきて。　いのる心を。　神やまる。」

いつくの寺の。　鐘ならむ。
夜は白々と。　あけ渡り。
そこに柴かる。　翁あり。
いかにあやしと。　おもひけむ。
ことのよしをは。　たづねしに。
翁は少女を。　なぐさめて。
木の葉は庭に。　ちりみだれ。
時雨あはれを。　さそひきて。
父のゆくへに。　兄の身に。
深きなさけに。　ほだされて。
ひまゆく駒の。　あしはやみ。
はかなくすぎて。　またさらに。

望むひゞきを。　送りけり。
鳥も塒を。　離れたり。
なくなる少女を。　見てしより。
こなたに近く。　よりてきぬ。」
まことかなしき。　ことなれば。
我家にともなひ。　かへりけり。」
まがきの菊の。　色もなく。
虫のなく音も。　いとさむし。」
朝夕こゝろに。　かゝれども。
暫しそこには。　とゞまりぬ。」
一とせいつしか。　夢の間に。
のどけき春は。　めぐりきぬ。」

み山の里の。　ならひにて。
その名におへる。　姫百合の。
里の長なる。　なにがしも。
媒人ひとり。　たのみきて。
翁はいたく。　かしこみて。
少女はかくと。　きゝしとき。
袖もて涙を。　おさへつゝ。
思ひまはせば。　母上の。
妾をちかく。　めしたまひ。
そなたはたえて。　去らねども。
汝の兄とも。　たのむべく。
はやく家出を。　なしてより。

髪もすがたも。　みだせども。
色香はいかでか。　うせぬべき。」
ほのかにそれと。　きゝつらむ。
長きちぎりを。　もとめけり。」
こへるまに〳〵。　ゆるしたり。」
其おどろきや。　いかならむ。
たゞになきてぞ。　居たりける。」
此世をさらむ。　そのをりに。
いひのこされし。　ことぞある。」
ある年秋の。　すえつかた。
夫といふべき。　人こそあれ。」
今にゆくへは。　わかねども。

老いたる父も。　ましませば。
母のいまはの。　言の葉は。
いかでか敎を。　そむくべき。
さはいへこゝに。　來てしより。
とやせむかくと。　人去れず。
かれを思ひて。　なき志づみ。
思ふおもひは。　千々なれど。
をりしも媒人。　いりきたり。
にしきの衣。　あやの袖。
少女の心の。　かなしさを。
見つゝ翁の。　よろこべば。
時雨ふりきて。　てる月の。

かならずかへり。　くべきなり。」
今なほ耳に。　のこるなり。
いかでか敎に。　そむかれむ。」
翁のめぐみは。　いとふかし。
思ひまとふも。　あはれなり。」
これを思ひて。　うちなげき。
死ぬるひとつに。　さだめてむ。」
少女に贈りし。　そのものは。
實にも眩ゆく。　見えにけり。」
あたりの人は。　志らざらむ。
あたりの人も。　來て祝ふ。」
かげもをぐらき。　さ夜中に。

いつこをさして。　ゆくならむ。
村里とほく。　はなれきて。
死を急ぎつゝ。　ゆきゆけば。
雲井をかへる。　かりがねも。
にぐる少女の。　こゝろには。
おりしも小笹は。　ゆれ出てゝ。
少女はそれと。　見るよりも。
あやしきものは。　いやちかく。
さやかにそれと。　わかねども。
少女のうれしさ。　やるせなく。
夢かうつゝか。　まほろしか。
とひつとはれつ。　來し方を。

少女は忍びて。　家出しぬ。」
川風さむき。　小笹原。
水音すごく。　むせぶなり。」
小笹をわたる。　風の音も。
追手とのみや。　聞ゆらむ。」
あやしきものゝ。　あらはれし。
ふるひをのゝき。　ひそみけり。
川邊にそうて。　くだりけり。
兄上とこそ。　志りにけり。
おそれを兄に。　渡しにき。
思ひみだるゝ。　さ夜中に。
聞きつきかれつ。　ゆくすゑを。

一夜かたりて。　あかせども。　猶言の葉や。　のこるらむ。」
わがふる里の。　こひしさに。　道をいそぎて。　かへらむと。
野こえ山こえ。　ゆきゆけば。　その日もいつか。　くれにけり。」
日數もいくか。　ふる雨に。　ぬれてやつるゝ。　たび衣。
家にかへりし。　そのをりは。　五月ごろにや。　ありつらむ。」
山ほとゝぎす。　なきさきり。　かどの立花。　かをるなり。」
さげる夏草。　ふみわけて。　軒端をちかく。　立ちよれば。
あやしく父は。　歸りきて。　庭のかなたに。　たゝすめり。」
となたのおどろき。いかならむ。　かなたの嬉しさ。　またいかに。」
父上さきくと。　音なへば。　子等もさきくと。　ことふなり。」
ことをこまかに。　聞きてより。　父もあはれと。　おもひけむ。
兄のいましめ。　ゆるしやり。　妹のみさを、。　ほめにけり。」

親子の三人。

うちつどひ。　すぎにし事ども。　語りあひ。
千代に八千代を。　祈りつゝ。　ともにたのしく。　暮しけり。
親の子を愛するの情の起る事、子の親を慕ふ心よりも深く濃かに至るものなり。子を持ちて知る親の恩と云ひしことわざを見ても證することを得るなり。親は子を愛するの情に招かれては、最とも穢きものも穢しと思はずして善く養育の勞をなす、之れ其穢きを思はさるにあらず、小兒の穢き處よりも、優りて信愛の深ければなり。子の爲めを思ふては、己れの慾する食も子女に與ふるあり。己れ粗なる衣服を纏ふて、子女に美服を與ふるあり。子女の教育費を得んが爲めに、耻を忍んで人の奴隷となるものあり。熊谷の如きは一の谷に敵の大將を殺さんとするに當り、其敵の年齢の己れの子と、同年頃なるを思ひ起し之を許さんとせしにあらずや。常盤御前は己れの子の身命を助けんが爲

には、己れの清操なる身を、敵の清盛に許したるにあらずや。慷慨家高山彦九郎は一國の改命を己れか身に引請けしとき、妻は病床に伏し子は餓に泣くなる歌を作りて、己れか心膽戀々として、家を出つるに忍ひず、涙に袖を滋ほしたるにあらずや、楠正成は君王の大命を帶ひて、湊河に出陣するとき、愛子、正行に別れをおしみて、身を隱くしてひそかに泣きたるにあらずや。實に子故に思ふ處の親の焦慮の深きこと、吾人も實に同感する處にあらずや、此情あるか故に、子をそだて、此情あるか故に家の萬苦を忘るゝにあらずや、此情流れて家庭にあまねくあらば、一家の喜び、良久までも繫かるべし家庭にして此情なくんば一日も鼓腹の樂を買ふ事能はざるべし、吾人此の情の發する心地を考ふるときは油の如く、吾人の間に滋ひを與ふることを見るなり。

親の子を愛する情の支配は、只是のみに止まらず其情動の信愛最極に至るときは、吾人の知力の遠く及ばざる處の奇蹟力を以て加動する勢力あるものなり。獨乙の或る豪家に小兒の重き病氣を煩ひて、將に死に瀕せんとするあり、其母深く之を悲み、醫學博士を招きて之が診察をなさしむ、此症は甚だ重き病氣にして、其病源の何れの處にあるや察知することを得ず、醫師も殆んと當惑せり、病は愈々急にして其命旦夕の間に迫り、母の憂ひ一方ならず、母は焦心小兒を抱きて、之を心配煩痛せり、其時母の心情次第に動きて、其病源の胸間にあることを切に思ひ、醫師に向ひて己れか信する處を以てす、醫師も半信、半疑、容易に之に任せて投藥せざりしが、其子の病の急なると、母の需めの切なるに任せて、此母の意見に從ひて、投藥せり、然る處豈計らんや、病氣忽ちに去りて、嬰子の煩悶は立ところに消失し遂に眠につ

けり。其後二三日を過て、此兒は全く全快せりと云ふ。見よ此母の親愛の情は、專門なる醫學博士の診察し難き病源を發見したるにあらずや。情の働きも爰に至りて妙なりと云はざるべけんや。

情の最も濃厚なる發動をなすは、男女の間に於て然りとなす、其發情の勢力、最も甚しきときは、白刃をも蹈むべく、爵祿をも辭すべく、饑餓に臨むも、其情の働きを止むることを好まざるべし。其勢力の强き理由は本書の論評にあらざるも、蓋し人は皆人情を形造せんとして、幼きときより其情の働きをなすものなるべし。人情とは、男女の情を合したる處の情にして、男の情にもあらず、女の有する處の單情にもあらざるべし、爰に獨身の男あらんか、此人の心より出づるの情は男の單情なり、爰に一人の女子あらんか、此女子の心より發動する處の情は、女の單情なるべし。此の男の有する處の、男の單情と、此の女

の有する處の、女の單情とが互ひに戀愛を以て、發動をなし、遂に相一致するときは、前の單獨なる處の男の單情にもあらず、女の單情にもあらざる、男情女情合躰なる處の、人情なるもの始めて相生するに至るべし。此の心を以て、人生の中庸なる心となす。苟も人生は、男にまれ、女にまれ、此の完全なる人情を營造せんとする處の希望は、貴賤上下の別なく、如何なる處に於ても、發動するものなり。故に此同情の起るときには、君命を以て之を禁ずるも、尙ほ及び難く、父母の命尙ほ之に敵し難き處の勢力あるものなり。恰も陽性の電氣と、陰性の電氣と、合一せんとするとき。其樹木を倒し、火光を發し、人畜を殺して以て、合同するか如し、春風靉靆として、花情の充つるとき、令孃の姿風を袖の下に隱くして、此の情を發動するさまの、如何に可憐にして、又無罪なるや、其同情を需むるあらば、如何程之を密にす

ると雖も、其同情を加動せられし、人の心には知力の外に最とも緻密なる勢力となりて、情動を受け、戀愛者の美性を送發し、兩者の情動、愈々緻密となり、無罪に働く處の戀愛の情は如何に至美至妙の大美妙なるか讀者諸君の既に經驗せる處にあらずや。

婦人泣けは男子之が爲に泣き、男子怒れは婦人之が爲に怒る。男女共に泣くときは、天下之が爲に泣く。吾人は此情の發したるとき、不義なる發動をなして、身を過ちに陷れたるもの迄の心情を、美なり、又妙なりと云ふにあらず。只其義によりて、自然に發したる情の、最と愛すべく、可憐なる處、美妙なる處ありと、稱唱するものなり。若し理性の强くして、此情の發動を同行するにあらずんば、亂雜なる働きを爲して、吾人を深き過失に陷らしむることあり、爰を以て吾人に此情の發するときは、必ず理性ある義の門戸を出てざるべからず、此情

を受くるものも亦此義ある理性の門を通して納れざるべからず。

人生の情は、萬物の情と異りたる情を有し、萬有の萬情を受納する處の容量あるあり、皆之を心内に藏す、只之を心内に藏するのみならず、再び之を外に向ひて發するものなり。花に接しては、花の情を受納し、又花を製造するなり。山水に接しては、其美をたしみ、又能く山水の畫を寫すものなり。此の如く、萬象を己れに吸ひて、又之を再ひ外に向ひて吐き出す、此の如く、幾回となく、復習するときは、愈々情の發達をなして、美妙の最極に達するに至るべし、然れども此情も、只一方の美のみに變發するときは、遂には其美は反て吾人の害となることあり、信玄の如きは音曲に戀醉して、之が爲に情死したる人なり、浦島太郎は山水の美に情死したる人なり、北村逸谷は月の美と、情死したる人なり、吾人は如斯き人を惡人なり、罪人なりと、酷評するも

のにあらず、只人生の全々的自然の本性の發達を害したることを信ずるものなり。此の如きは、只目前の單情の爲めに醉死したるものなれは、其度量の最も狹少なるを氣の毒に思ふものなり。

情の愈々發達して、至貴高尚に至るときは、道理と、正義とに向ひて、自在に發動するに至る、即ち義の爲に泣き、不義の爲に怒り、憐恤のものを恤むの情となり、社會救濟の大勢力となり、國家の將に覆ちんとするときは、公靈なる慷慨の氣焔となり、萬難の局に當り、萬害を廢除して、改革を決行するに至る、愈々進みては、宇内の神靈にまぢはり、己れが心志の正義に、適はざる處を斷然、改悔するに至る、其情動、天地に神通して、一大動力となり、社會の人心を改造するに至り。今宇宙の大美は人心の大美と合同し天地余れの如く余れ天地の如く貧賤にも樂み困苦にも樂み白刃をも踏むべく猛火をも辭せざるべし

常に樂み常に喜び心靈若し肉塊を離るゝときは直ちに高騰して宇宙の大美に融合す是を人生の限りなき生命と云ふ。

第四　知性上に表れ來る美妙

知識とは、客觀的なる天地、外象の發顯して、吾人の主觀的、心内にある諸能力に、感覺を來し、其感覺によりて、考察の意を發し、爰に知識の初芽を生ず、此考察力は知性と共に、前に經驗したる事實を再び、外象の客觀物に封して試み、吾人が經驗せし事實と異ることなきときは、知性は之を正眞なる道理なりと確定するものなり。此の故に世に、知識を多く有するものは、此外象と、此の内感との間に起る感覺の經驗を多く重ねたるもの程、又知識も發達するものなり。眞理とは、此客觀的なる、外象の法則と、此の主觀的なる内感の、方則とか、相一致して結婚したるときに初めて生ずるものなり。人生を離れては天地を知るものなく、人生によらざれば、天地の眞價も失はるべし、勿

論此人生も、天地の方則中に發顯して、發育せられたるものなれば、天地の存在は、人生の存在よりも至高にして、其道も亦至高なり、余の爰に云ふ處の道は、天地自身の道にあらずして、天地と人生との間に起る、人生の必需の眞理を云ふなり。此眞理も天地の方則のうちより生れ出づるものなれば、天地より別たれたる人生の眞理と云ふなり。是れ則ち、吾人が天地より別たれたる知性を以て、天地の方則を知りたる處のものにして、吾人の支配權ある處の知識なり。

此知識を形造するに當りては、多端なりと雖も、吾人が有する、先天的理性の、最も驚くべきものありて存す、吾人の感覺性は、之を知性と考察に傳へ、考察は之を推理に傳ふ、此動機に至りては吾人外物を知ると雖も、尙ほ容易に知盡することを得ざるものあり、詳く云へば吾人は外物の道理を、吾人の知情意によりて知ることを得るとするも、

吾人の知情意を以て、吾人の知の働きと、情の働きと、意の働きを知り盡すこと能はずとの意なり。此吾人に保有する處の、先天的諸能力の動機の、最も靈妙ある働きを以て、吾人の知識を構成する、此狀動を余は爰に知性より來る美妙と假定せり。之は文學上よりの觀察にして、心理學上よりの推定にはあらざるなり。

天文學者は太陽の法則を研究して、余が地球以外に尙ほ余等が住する處の地球と同等なる處の地球あることを知り、銀河の運行を見て余が太陽系以外に尙ほ至大なる太陽系あることを信じ、此太陽系の外圍に又一大至大なる太陽系あることを推理せり。コロンブスは海岸に出で、一葉の樹葉の漂蕩たるを見て、新世界の、際涯なき大洋中にあることを推定し、萬難を嘗めて遂に一大州を發見す。則ち皆人の知る處の今の米國是なり。地質學者は、地中に埋沒せる處の、獸骨の大なる

を見て、幾億萬年以前にありし、前世界の氣候、風俗等を見前の意中に嘉象す。余れの此の書を書するも筆と、墨とを、未だ購はざるの前にありて、既に心意のうちに此多冊を出版せり。余は心中に先に出版せしものを、只爰に復書するに過ぎざるのみ。是等の知性の動作する處を考ふれば、其推理力なるものは、造化の大動せる一大生命の意識に通して交動し、造化の大靈命を知り盡す迄は、其推理の能力は、發達するものなるべし、此先天的知性の動作する機能の至大なるには、驚くの外なきなり、爰に博士リー氏曰く。

コロンブスは、僅少の木片が、終古澎湃たる、蒼波に漂ひ來るを見たり、然れども此等の僅少の木片は、彼れの知性を動かして、新世界のあるを認識し、斧斤の未だ入らざる、大林千里に彌漫する、平野天に參はり、雲を凌ぎ、千山萬嶽を載せたる處迄を、認識せしめたり。アチシズはメーン洲の岩に、犬牙の狀あるを見たりしが、之を端緒として、彼は大古に氷塊、及氷田が南に其路を押し開しことを察知せり、科學者は一塊の白堊を、見るや

之を端緒として、遂に電線を海底に載けろ、白堊の泥ドウヴエルの海岸が形造られし間に大海に戯れし鱗介を察知したり。地質學者は、今日の世界に棲息する何れの動物の齒よりも巨大なる齒を發見して、遂に其齒を有したる、前世界の巨獸を知れり。人類は此理性を發達して、衣食の要素を發見し、知力の眞理を發見し、其意志に匹偶する正義を發見し、其審美的性質を能く應調する處の美妙を發見す。

感覺と情に至りては、動物の皆保有する處なりしが、知識に至りては、獨り人間の殊有する處に係はる、樹木は春來りては花咲かさるを得ず、冬來りては葉を落さゝるを得ず、禽獸は時を撰んで孳尾せざるを得ず、然れども人生のみは甚た、自由に、生活することを得るなり、情の美は禽獸にも表はるゝことありと雖も、知識の動作せる能力は、人生の外又あらざるべし、鴉に反哺の孝あり、鳩に三枝の禮あり、犬の主人を慕ふ、知識あるか如く見るも皆天然に與へられたるものにして、其

天然の與へられし、法則の外、少も動作をなさゞるものなり。人生の知識に至りては、之と異りて、各自の欲する處のものを知盡し、考察し、推理し、其發達に無限の範圍を持つものなり。猿猴の知識は何年を經過するも、常に同一なる方法によりて生活し、少も進歩することなし、然れとも人生の穴居時代は變して、高樓を築造するの知識となり、殺戮同朋相爭ふの時代は、四海兄弟の道德界と化し。强食弱肉は、變して、倫道ある同情的の階級に昇進せんとす。詩人の所謂黃金世界を築かざれば其進歩も止まざるべし。

情は知を離れて發動することを得ず、意識も知識を離れては又生活することを得ず、知を離れたる情は亂雜に動作き、知識を離れたる意識は無用なる空想なるべし、泣くべきに泣き、笑ふべきに笑ひ、進むべきに進み、退くべきに退く、怒るべきに怒り、怨すべきに怨す、是れ

皆知識によれる情なり。笑うべきに泣き、泣くべきに笑ひ、怒るべきを怨す、是れ皆知識を離れたるの情なり。此の故に知を離れたる情は愚情となり。知に交りたる情は人情となる。立つべきに立ち、坐すべきに坐し、始むべきに始め、止るべきに止む、是れ知識を通りたる意識の命令なり。起つべきに坐し、坐すべきに起ち、始むべきに止め、止むべきに始むる、是れ亦此知識を離れたる意識なり。此の故に人情を苟も欲するものは、此知識によらざるべからず。身を立て、道を行ひ、美名を後世に垂れ、人生の歩むべき事業をなす亦是知識によらざるべからず。

人は天地より後れて生れ出て、又此吾人を生みたる天地に先ちて死別するものなり。然らは天地は吾人が生れ出てたる故郷にして又吾人の歸るべき故郷なり。

父母に呼はれてかりの客にきて

こゝろ殘さす歸るふるさと

と一休をして感せしめたるも、此道程なり、然らは人生の裏面は、一大至誠なる大知の存するありて、此大知識は人間と云ふ、器械を以て此大知識を送るものなるべし。吾人人生の知識も、此源知識より別れたるものなるべし、恰も時計の進動するを見て、此器械の構造を知り、此器械の構造を見て、其時計を製造したる時計師の精神を表はすか如く、吾人の知識の妙なる動作きあることを見て、吾人の裏面にある、一の勢力ある道程の知識を發見するの最と容易なるなり。此道程は此道程を以て人生を製し、此製したる人生の器械によりて、又己れの能知を表はず、其構造と、設計との美妙なるに感する又此知識を以てす。

第五　自然に表はるゝの美妙

清夜仰ぎて大空を望めば、藍青際涯なきの大空、玄奥に渡り、點々たる星辰輝々として此青空に刻印し、銀河蕭條として南北に横斷し、其壯觀、幽遠にして、宇宙の構造の遠大なるに驚かざるなし。彼の光線の速力は、一秒時の間能く、一萬以上の里數を來るものにして、銀河の遠き處よりは余が地球に一震動せる光線の達する迄は、五千年以上の時間を經過して、始めて來ると云ふ、遠距離の星あり、其玄奥幽遠なること吾人の想像の能力にも餘る程なる鴻大を有せり。此の如き眞遠なる星球も、吾人の大觀中に加はるに至りては、實に美觀至極の至りならずや、只外觀の大空を望むすら尚ほ不可思議的美妙性を發育し吾人の理想を大空の外に遊はしむ。

皎月大空に懸るの夕、舟を清見潟に浮ぶるあり。金波月光に映して遠く光り、彩鱗波上に跳躍して、月光を見舞ふか如し。岸街の點燈は、輝耀、點々、連々たり、遠山は中空に紫を呈し、愈々遠きものは灰色を帶ぶ、夜深く、月小に、星稀に、烏雀南に飛ぶ、岸街の燈火、次第に滅燼して、夜色寂殺たるに至る、玉露舟舳に來りて、月光を招くは星の降りたるが如し。四邊に人聲なく、夜愈々深く、愈々、深沈、此觀に身を任ずる感慨夫れ如何そや。

江風有レ聲斷岸千尺山高月小水落石出曾日月之幾何而江山不可復識矣。

此の如き暗慘たる夜色は吾人の氣精を幽ならしむる處の美情あり。此の如き清簡なる風月は吾人を俗界より脱せしむる處の生命あり。之の觀に接して之を樂むものは、此風景に同妙なる處の美性あることを證

す。之あるが故に之を招き、之あるが故に之を招く、此美は、此美に通し、此妙は、此妙に通ず。

美の妙ある處は、單一の狀態によりて發するにあらす、萬態、復雜の間より出づるものなり。即ち萬象の浩氣、襲ひ來りて、交合的に吾人の情緒を動かし、吾人が心頭に有する處の諸情に、交々其情動を來し、始めて美妙なる觀念の最ともおもしろく形造するものなり。

單一なる光線、或は色彩、或は音響のみにては、吾人の心にも、只單一なる、一種の感動を與ふるに過ぎざるものなり。吾人の眼機は、紫、紺、藍、綠、樺、紅、赤なる七色の色素を、別々に見分け得る處の各機能官ありて、外物の紫色を見るは眼球中の紫色を見別する處の機能によらざるべからず。赤色を見るも、又同一にして眼中にある赤色を見る處の機能によらざるべからず、爰を以て藍を見るの目は、決して

黑色を見ること能はざるなり、此の故に吾人若し數時間永續して、只單一なる赤色のみを見るときは、吾人の眼球中にある赤色を見る部分の機能のみ發達して敏動し、急に方向を變じて他のものを見るときは、忽ち其色の何たるを問はず赤色となりて尙ほ見ゆるものなり。是れ前に見つめたる處の赤色の爲に赤色を見る部分の機能の發動しあればなり、又吾人の耳中にある聽感も之と同しく、ヒーなる音を聽く處の聽感器を以て、フーなる音聲を聽くことを得ず、ミーなる音聲を聽く處の聽感を持ちて、ヨーなる音聲を亦聽くことを得ず、故に毎日同一なる音響を聽ける處の人にして、急に六律、六呂ある音樂をきくと雖も、其音曲の細少、微動の美なる處を辨別することを得ず、是れ其妙處を聽くべき音聲機の達せざれはなり、只其聽感機の單一なる部分のみの發達を遂けたれはなり。

色彩にまれ、音曲にまれ、只單一なるものゝみにては、如何に其色彩の深濃なりと雖も、如何に其音曲の大なりと雖も、甚た不風流、不風音なるものにして、雅致もなく、風韻もなく、只耳に音のするをきゝ、只眼に色あるを見るのみなり、而して此習慣に、愈々長く、時を移すときは、其色も、其音も、習慣の久しきになれて、色あるに氣付かず、音あるも耳にせざるに至るものなり。

吾人花を見て美なりと考ふるは、單一なる一種の色あるによりて、然るにあらず、其種々なる色を以て、彩色を交雜し、吾人の感覺機を殘る處なく、一時に發動せしむべけれはなり。音聲を聞きて快悅の情を發するも、之と同しく、只單音のみを聽きては、少も愉快と云ふものなく、只動々たる音のするを知覺するのみなり、其美と感し、妙なりと叫ぶに至りては、未だしなり六律六呂の美聲、互ひに順序を以て發

動するとき、始めて此愉快觀は發するものなり、然らば色彩の美は色と、色との間にある關係より起る處の感動の一種にして、音樂の美は音と音との間に擺動する細微なる音聲の情動を發するによりて、知らるゝものと知るべし。

色彩なり、音響なり、各色、各音の比例を失ふたるときは、又其美妙ある彩色なり、音曲なりを發せざるべし、彼の森林中に暴風の來るときは樹木にある處の音呂と、其音調に於て大なる比例を欠く、故に樹木に包まれたる處の微聲は、暴風の暴音に破られて、此音に併呑せられ、只風音の響くを聞くのみ。然れとも晩景に至り、微風おもむろに來りて、樹木を見舞ふときに至れは、松林の内に包藏せる處の微聲と其音節を合調し、爰に始めて天然の音樂を奏するに至る。色彩に於ても、又是と同しく其色彩の比例も配合の宜しからさるときは、濃厚な

る色素に勢力を占められ、其甚た微なる處の素色は、光彩の仲間入りを人に注視せられざるに至る。然れども自然の形動に於ても、亦此の如し、自然の形動、及び其現象、若し只單趣味、單現象のみを呈して、永遠少も改象することあらずんば、吾人の愉快なる心の興味を、何れの處にか求めんや、四時は好く變化し、風色之と共に轉々として、彷彿なるにあらずんば。風趣の快悅を何れの處にか汲み取らんや。永劫夜間のみなれ、萬望に渡る山野の景色も觀るに由なく、永劫晝間のみなれは、皎月の銀色も又眺むるに由なかるべし。月如何に美なりと雖も、滿空、只皎月の實躰ならは、其美觀も亦失はるべし。星如何に輝々たる彩色ありと雖も、綠青なる大空の内より、點々、斑々たるにあらずんば、又甚た無風景なるべし。太陽光と熱を送りて吾人の喜びを增すと雖も、若し滿天太陽を以て充すときは、恐らくは地上の人畜、

艸花、皆溶解せらるべし。海に波なけれは、海の觀なく、常に波動の暴々たるのみならば、天色も亦映ぜざるべし、海に波ある故に、海の靜夜は愈々美なり、靜夜の海ある故に、波濤の海洋も愈々美を呈すべし。波の動搖することなけれは、海洋之か爲に腐敗し、常に波動のみならば、岸汀の彩禽、魚鱗何れの處にか生活を任せんや。水なければ魚鱗なく、風なけれは波濤も出るに由なかるべし、魚鱗は水により、波は風によりて、相交の友を得べし、大空の景色も、海洋の大鏡を待ちて始めて美觀となり。海洋は大空を呑んて、爰に愈々其壯大なる大觀をなし、大空と、海洋と、交接して以て、其風景の美妙を現象するに至るべし。

花如何に美なりと雖も、萬地一望、同一の花ならば水平の海面を眺むるか如けん。清水如何に冷々たりと雖も、盛夏の炎熱、吾人か咽を焦

がすにあらずんば、其味も亦失はるべし。火熱は寒天にありて愈々其効を奏し。電雷も干燥せるときに其愉快愈々表はるべし。富士山如何に美麗なりと雖も、全國富士山のみならは甚た迷惑を感ずべし。

梅花開けば、鶯來り、微風來れは、馥郁たる香氣出づ。微風來らされは、善き香氣も、梅花の輪中に空しく死せんとす。鶯幽谷より出でざれば、花の風趣も亦空しからんとす。花散れは、新緑青々として來り、青々たる新緑は、果實を養ふ。青緑茂りて、日陰を生し、盛夏高けれは、葉愈々茂る、赤き花咲けば、白彩の梨花其側にありて赤色を愈々赤からしむ。赤愈々赤くなれは、白色の梨花も愈々其白彩を誇ふ、黄條の細柳風に漂蕩たる處には、嚴然たる老松あり、松の嚴然たる風彩は、柳の柔順なる風景によりて、愈々嚴格となる。老松愈々嚴格となれば、柳又愈々柔順となる、高く雲をつくの喬木あれは、螢を友に滿足した

る處の低く匍匐したる水草あり。草の低き風貌は、高き樹木を愈々高からしめて、爰に愈々低く、草は樹陰を好むの風あり、樹木は風に抵抗するの概力あり、此概力は風を招きて、松籟を發せしめ、松籟は、枝の岬々たるによりて音樂を調す。樹木、草花、愈々繁ければ、林をなし、林にあらざれは鳥に宿をかす事なく、鳥も森によらざれは難を免かるゝの處なし、森は鳥の來るによりて繁華を增し。鳥は又此樹木をかりて子を養育す。皆鳥ならんには、巣ふの處なく、皆樹木ならんには謠ふものなかるべし、森地愈々高ければ、山をなし、山愈々深けれは、猛獸を出す、樹木も亦山にあらざれは己れが傲をよするの處なく、生活に傲なくんば、自由の成長なく、自由の成長なければ、樹木の雅致もなし、山も亦此樹木によらざれは、雨露を蓄ふるの容器なく、雨露も樹木によらざれば止まる處もなかるべし雨露の清水となるは、

山の巖石によらざるべからず、水も亦巖角の下より湧出せざれは、其冷味を失はるべし。樹は此山によりて、本然の成長をなし、雨露は又山によりて、清水冷々たるべし、鳥も山によりて遠きを見るべし、山は樹木と雨露によりて茸を發生するに至るべし、樹の最後は茸となりて甦り、草の最後は地に入て樹木を養ふべし、草にあらざれは蟲住まず、蟲にあらざれは卿の友はなし、草は變化して蟲となり、蟲は草を喰ふて爰に殖繁す、猛鳥山の巖岸に巣ひ、猛獸は山の幽谷に蟄伏す、山は風を抱き、又風を吹く、嘯谷に其意氣を吹て、谷に雲を宿す、雲は山に隱れて、電雷を送り、猛獸は大蛇を嚙みて吹聲四嶽に震動す。彼は地中に金鑛を隱し、彼は谿間に山菽魚を養ふ、彼は春日花の幷をさして笑ひ、夏は巖谷に氷を隱して寒し、秋は紅葉の綿衣を纏ひ、高く萬地を眺望して雲峰に屹立たり。冬は松柏と樅に雪を戴て裝ふたるは美人の白帽子を冠りて梨花

園に蹈舞するを疑はしむ、白雪凱々として積りたる、千丈の岸角を望めば神意、清皎、白雲に飛乘して彼の帝京に至るが如し。暴風雪團を卷きて、谷低を埋むるときは、造化の噫氣發して、宇宙の塵垢を一掃するが如く、聖潔なる新天地の改造に着手せしかの概觀あり。

暖氣次第に巡遊して、春雨風に乘して南方より見舞ふときは、數丈の氷雪立ところに溶解して、滿山の汚物を一掃して谿流に送り屆け、獨沾地下より伸ひ出でゝ、滿望の風色黃色と變化す、盛夏石を焦かすのとき、泉源の清水に至りて顏を洗ひ、樹陰に高醉して仙境を夢みるに至るべし、秋に至れば茸を狩り、又山女を食す、黃覆盆子澤邊に滿ちて、葡萄天然の藪に熟したり、栗實樹下に點々、圓々として、水の爲めに轉下せり。樹上には口を開きて將に落ちんとするが如し、此變々、轉々たる萬態、萬狀の間を一望せば、其大妙の自然觀に醉せざるもの

あらざるべし。

審美の自然に於て發表せらるゝ大妙は、醜美混合併列せる處に反て表はるゝこと多し、巖穴に毒蛇居らざれば、寂幽の美なかるべく、沼澤に蝦蟇蟄居するにあらざれば、豬澤の風色何れの處にか求めん、深谷に獰猛なる虎豹住まずんば、寒山の枯風友を失ふに至るべし。余れ東海道に遊び富士河の河岸に至る、此時夕陽西山に傾むき將に紫山を表はさんとするとき、富士山倒まに河中に映して榮々たり、汽車は無風流に黑焔を吐きて鐵橋を通り、猛犬河岸より走りて汽車に吠號す、田舍の頑固老父は、薪木を背ひて又河の邊りを歩む、此老父富士の風景になれて富士山のあることだに氣付つかざるも、反て醜なる彼の容貌は、天然の妙景中に加はりて、此處の風景を美にしたり、汽車と、犬は、又無風流なりと雖も、他より之を一見するときは之れも亦風景中

に加はりて、美觀を添へ居れり、河岸には洪水の爲に倒されし根の大空に向ひたる河柳あり、家の破壞せられて尙ほ半分を礫中に殘したるものあり、此等のものを別々に觀て、以て、柳として、或は、破れたる家屋としては、甚だ醜なりと雖も、自然の大觀中に加はりては、繁茂せる處の河柳よりも、ロンドンの水晶宮よりも、甚だ雅致を表して、居るものなり。岸汀に鴨遊はずんば、水の風景なく。富士河流れずんば、富士山も地に書せらるゝことなし。此の如く轉次、變々、醜美、混合、交雜して列するにあらずんば、其奇觀妙々の出つる量なかるべし。世人の所謂醜の醜とすることころは、只一物の醜を見て之を醜とするのみ、美と云ふは、又一物に艶色あるによりて、此艶色ある一物を見て以て美なりとなすのみ。宇宙の大觀を以て、其奥妙のある處を察すれば、醜と名つくべきものは一物もあることなし。

人は萬物の靈にして靈氣ある動物なり、恐らくは被造物中人生より成効ある、完全なる、多能なる、被造物はなかるべし。造化の技術も、人間の製造によりて、其極巧に達せるを滿足するなるべし。其容貌は甚だ美妙を極め、道理を辨別する處の心を備へ、靈は見えざる天地に動々し、知識は萬物の裏面にまで透徹す、進んては萬物の道理と相通し、退ひては自身より道理を吐出す、天地美ありと雖も、人生の靈に彩せざれは、其美妙も唱導せらるゝことなし。萬物は此極巧せる人間の知情、靈妙を待ちて、始めて其觀客を得たるなるべし。萬物は常に人間を見舞ふて、其知情に通し、愈々其用を爲さんことを欲す、人生は亦萬物を己れが所有として、之を樂まんことを勤む、人萬物と緣を絶斷するときは、人の心死し、人生にして心死せは、樂みも死し、其知情、心靈も、又死するに至るべし、萬物と、人生の情交、緻密なる

ときは、愈々人生の知情、心靈は、發達し、心靈發達すれは、快樂も、千倍し、萬物を己れか心に同化せざれは、以て知情、心靈の發動を靜めざるべし、萬物に律あるも、人によりて知らるべく、天地に法則あるも、人によりて知盡せらるべし、萬物に妙あるも、人生の美妙に畫かざれは、其妙も唱導せられざるべし。天地の靈動も、人間の靈に來らざれは甚だ不風流なるべし。

第六　心靈上に表はれたるの美妙

人生の高貴なる處は、肉眼を以て萬物を觀察するのみならず、尙ほ心靈を以て、之を觀察するを得るにあり、肉眼を以て彩色を見るのみならず心眼に之を畫して快樂を持つにあり、肉眼の目を以て、萬物の形象を觀察し、心靈を以ては、形象の裏面に伏沒せる觀念の世界を觀察す、肉眼を通して見る處の事實と形象も、一度心靈に通して見るときは高尙に靈化して理想の新世界となる。此心靈の觀察に於て、表面の外象一たび理想の新世界となるときは、萬有の形象に表顯する處の、色彩、風景は、又理想的新世界の裝色となる。爰に於て表裏の、世界相合して統一せらるゝに至る。肉眼を以て觀察する萬物にして、事實ならば、心靈に於て、觀察する處の理想世界も又確實なる眞理なることを證す。表面の外觀も、吾人が心靈に來りて合し、裏面の理想境も、吾人の心靈に來りて合す。爰に於て、兩者のものは、吾人が心靈の名鏡に映して以て、純正なる眞理、正義、及び公道とか、道理とか云ふもの、始めて確認するに至るものなり。此心靈より愈々妙奧に至るものは、宗敎、及ひ哲學となり、此處に止まりて、實際界に再び歸るものは、學術、及び理學となる、余は此處に宗敎を論ずるの本旨にあらざれば、表象の方向にあるものを觀すべし。扨此心靈の觀念、若し天躰の運行に應用せられたるときは。天文學となり。物質に應用せられたるときは。理學となり。化學となり。或は地質學となる。草木を研究すれは、植物學となり。音響に施されたるときは、音樂となり。色彩の研究に應用せられたるときは、飽色、彩々たる美妙となる。此の如く、心靈の一度觀念となりて、之を萬物に應用せられたるときは、

同一の進路を採りて、有形の世界を分拆するに至る。此理を分拆して、或は蒸氣機械となり、或は電氣燈となる、陸には氣車となり、海には氣船となり、暗夜は化して白晝となり、ロンドンの紡綿製造場となり、十二連發の短銃となる、或は化して鋼鐵艦となり、水雷艇となり、海底電線となりて、萬里の音信を秒時の間に報ず、或は醫學となり、ハチリスの發見となり、黑死病探見となり、癩病の治療となる、或は化して法律となり、或は化して政治となり、或は化して治財となる。

此觀念の妙與の進路を採りて進むときは、宗教となり、エルサレムの禮拜となり、日光の宮殿となり、奈良の大佛となり、宣教師の派遣となる、或は化して、アキサンダーの大會議となり、ウエストミニステルの心仰箇條となり、義人を出し、聖人を出し、預言者を出し、宗教の迫害となり、惡は變して善となり、貧民學校となり、赤十字の病院

となり、或は進んで慈善的事業となり、社會救濟となり、人心改造となり、祈禱となり、斷食となる、愈々進んでは、武器を化して農具を製造せんとするまでに至る。

人生は肉眼と、心眼とを有するが故に、二種の世界を通觀することを得るなり。禽獸は只肉眼のみなれば、只一種形象ある世界を見るに止まるのみ。猿猴も電光の燦々たるを見、其敖然たる聲を聽くことは人間と異ることなけれとも、其電氣の行動の理由を推知するの心眼なし。人生は之と異りて、肉眼に彩する處の電光は、之を靈眼に畫して、以て吾人か實用に供す、肉眼のみを以て見る處の世界は、其範圍甚た狹隘にして、且其資も甚た貧弱なり、肉眼を以て見るのみにては、此世界に只草木あるのみ、海を眺んでは只水の動々たるのみ、市街を望んでは只家屋あるのみ、天を望んでは只星辰日月あるのみ、社會を望んては

只人畜の動くを見るのみ、靈眼に映する處の天地は之と異り、社會の行動の裏面には、善惡あるを知り、繪草紙屋の店頭にある彩畫を見て、社會の傾向する處の人氣を察知し、雲の運行を見て、大空に風あるを知り、人の面姿を見て、其人の品性を觀る、肉眼を通しては天地の形象の彩々たるを見るのみ、心靈の眼を通して、其裏面にある、眞理を觀、美妙を觀、愛情を見、愈々進んで生命なる清水の流るゝ、無量無極の絶對なる、理想境あるを觀通す。肉眼を以て、林檎の落つを見る人は、只之を食するのみ。心眼を以て之を見る、ニウトンは之により て重力の法則あるを見たり。爰を以て肉眼のみを用ゆる人は、卑野となり、心眼を以て通觀する人は高貴となる、ゲーテーのイタリーに漫遊せしとき、歸りて曰、余れの此回の漫遊中余の心情を喜はしたるものは、イタリーの王公にあらず、ローマの美味にあらず、彼の國の一望

涯りなき、紅紫の花葩、海岸に光彩煥爾として余を招く處の白雨に映ずる虹霓、天來の妙韵ある音樂のうちにあり。と彼れ若し肉眼をのみ賴んで以て遊ばゝ、イタリーの美味、ローマの美女こそ、反て彼れを喜ばしめたるならむ。然し此觀此に出でざるは彼れは心眼を多く用ひたる人なればなり。

余は肉眼を用ゆるの不用なるを認むるものにあらず、此高尚なる心靈の發達を助長するものは、先つ肉眼の觀察を經過したる後ならざるべからず、此肉觀の導化なきときは、心靈の働きも又爲すに歸任する處を失ふべし。只精神に屬する新天地は、肉眼のみにて、決して通觀することの不充分なるを示すのみ。

天地萬物は此吾人の心靈を通じて、後は、人生の用を爲さんことを勤め居るものなり。故に吾人知識を要せんと欲する者に對しては、眞理

となりて來り、風雅なることを好む人の前には、風景の趣味となりて表はれ。高尚なる審美を愛する人の前には、美妙と變じて來り。飢餓に迫まりたる人の前には、食量を製造する處の方法として來會す。故に天地の道理は、其人各自の境遇と、各自の資質の如何によりて、異狀をなして來るものなり。食味を愛する人には、食味となり。風景を愛する人には、風景となり。名譽を愛する人には、勢力となり。政治家には、法律となり。板垣退助には、自由となり。ルーテルには、宗教となり、ナポレオンには、權勢となり、セキスピヤには、戲曲となり。クーテーには、ファウストとなり。團十郎には、芝居となりて表はれ。其人、各自の有する處の、資質の好みと天性の示す處によりて發表せらるゝものなり。

客觀的の天地は、此の如く人生の心靈を叫び起して、其人の資性に應

して迫まり來り、吾人は從手、傍觀して、此世に接息することを得ざるに至る。是れ吾人、全力全勢を出して、各自の性質に應じたる事業をなさしめんとするの命約なるべし。天地萬物、一物として吾人の用をなさゞるものなく。天地萬物一事として、吾人に關係せざる處のもの亦あることなし。天を眺んで、天文學者となり得べく。地を掘りて、地質學を發見すべく。植物を研究して、植物學者となるべく。ハヂリスを究學して、コレラ病を治するの醫者となるへく、微分子を分拆して、化學者となり得へく。驚くへき電氣を利用して、郵便の用を便すへく。風を用ひて、舟を馳すべく。鐵を以て、器械を製すへく。萬里の波濤を渡りて、商業を營むべく。薪木を以て、煖を採るべく、毒藥を以て、反て人生の病氣を治療することを得るなるべし。山として、河として、陸として、海として、天として、地として、悉く吾人の資

財ならざるはなし。是等のもの、吾人に集りて、人生をなし、社會をなし、衣食を給し、知識を給し、遂に萬物の靈長たる、至高、至貴たる人生を形ち造るに至るものなり。

人生世渡りの奥義は道理を採りて己れの心に調和し之を社會に應用するにあり此の故に若し音信を速かならしめんとせは、電氣を應用すべし、若し海を渡らんとせは、舟を考ふへし、魚を知らんと欲せは、海を見るべし、鳥の飛行の如何を知らんと欲せば、空氣の性質を知るべし。

若し社會を知らんと欲せば、此等の社會に行はるゝ、風俗、習慣、勢力、法律、食物、衣服、宗教、教育を察知すべし。此觀を過またざるものは、事業家となり。此觀を過つものは、失敗者となる。

上來の解說、果して眞理ならは、天文學とは、星辰の眞相を吾人の心

靈に寫して、再ひ之を吐出したるの眞理なり。植物學とは、植物の眞相を、吾人の心靈に通して、再ひ其順序を編みたるものなり。地質學の眞理は、地球の構造を轉出し、……審美なり、音樂なり、繪畫なり、電氣なれ、磁氣なれ、皆天地、萬物、森羅、萬象ありて吾人の心靈に現象したるものを再ひ發表したるものなり。爰を以て天門學によりて、吾人の心靈の動作を知るへく、地質學によりても、心靈の動作を知るへく。植物學によりても、心靈の動作を知るへく。理學に於ても、哲學に於ても、醫學に於ても、吾人心靈の如何に、萬物、萬理を彩映するの、靈妙なるかを察知することを得るなり。彫刻上にも、之を見るへく、繪畫上にも、之を見るへく、音樂上にも、之を見るへく、千差、萬別、社會、萬態の事實と、實現によりて、吾人、心靈に、保有する動作の靈妙なるを見ることを

得るなり。

此の如く、萬物の來りて、吾人が靈妙なる審美の心觀を敲くときは、地球上の萬物に、潛藏する處の、眞理は、吾人の心靈中に潛伏する處の審美と合し、爰に於て人類は理想上に尙ほ一つの新世界を見るに至りて人類の理想は此有無兩界に旅行を始むるに至る。人類は、光を見るのみならず、之を見て、再び之を吐き之を利用して彩影術を發明す。人類は、眞理を知るのみならず、再び之を反復して、己れの好む處に應用す、正義を知るのみならず、又能く之に從ふて己れの品位を作る。只美妙を賞唱するのみならず、又能く之を再び表出して美術を製す。之を以て、人生は、眞、善、美の本原なるものと。親しき親戚なることを確實に表明するものなり。

斯の如く萬象は、吾人の靈妙なる心靈を纏て、實際界の、實物に化す

るものなり。審美的なる、方面を出ていは、美妙となりて實際界に下り、音樂、及び色彩の、和調は、耳と、目に入りて心靈の聖地に參詣し、口と、技術とを通して、再び實際界に下る。道德的、觀念の那處に起るときは、此觀念は、人類の靈地に至り、再び出でゝ、公愛の事業となりて、實際界の、不調和を調停す。或は公靈なる、聖靈の感情となり、身を殺して仁をなすの事業となり、敵も尙ほ愛する處の道德となる、要するに、人類は己れの心靈を以て、萬物、表象の裏面に潛匿して居る新世界を、此實現界に吸ひ來りて、實際界を築造するの天使なり。此點より觀するときは、造物者の代理人の如し。人生は、心靈の精神を以て、理想上に、百芥の花木を繁培す、是れ心外の現象に、百芥の生長の如何に生長するかを見たればなり。人生は心靈の精神を以て、勢力を利用す、是れ身外の觀覺は、熱力の生產力と、其實力の

存する處を見たればなり。其他眞理を吸ひ下し、法則を吸ひ下し、美を吸ひ下し、靈を呼ひ下し、生命を呼ひ下す、吾人心靈の、狀態、其靈なること、造化の心靈に似たる處あるにあらずば、何ぞ此の如き靈妙。不可思議なる、大事業をなす事を得んや。

此心靈に、現象する處の、審美は何を目的とするや。其目的は、最も高貴なるものにして、現實の世界に行はるゝ、不完全なるものゝ改造にあり、他なし、是れ萬物が創造せられし、設計の目的を助長發達せしむるにあり。此目的は只に音樂を和調するのみならず、海王星を發見するのみならず、前世界の巨獸の骨を掘り出すのみならず、其の極効の目的とする處は。純美、純正、純聖、純潔、圓滿、無量なる完全なる人生の發達を計るにあり。地質學を、講成するも、此目的を助けんが爲なり。植物學を研究するも、此目的を助長せんが爲なり。醫術

を發達するも、此目的を助けんが爲めなり。法律を發布するも、此目的を助けんが爲めなり。家屋を建設するも、衣服を調製するも亦此目的の發達を助けんが爲めなり。諸學校に於て是等のものを教ゆるは、只單に此の凡ての大目的に一日も早く近よらんことを圖りてなり。人生は道理を己れに受くるのみならず、又之を出して人に傳ゆるものなり。人に傳ゆるのみならず、己れも亦、己れの發明に關る、道理に養生せらるゝものなり。一度、之を人世界に呼ひ下したるときは、己れも、又其理に伏從せざるを得ざるなり。電氣を、吾人の間に下した る後は、發明者と雖も、之に不規則に觸るゝときは、己れを害するに至る、蒸氣車を發明したるものも、之れに抵抗せば、直ちに粉碎せらるゝに至る、眞理を發明したるものも、又眞理に從はざるべからず、美を發明したるものも、美妙の法に從はさるべからず。然らは人生以

上に大勢力あることを知るなり。此勢力に從て、此勢力を受け、此勢力に從て、此美を受け、此勢力に從て、法律を施し。此勢力に從て、事業を起し。此勢力に從て、文學技術を修む。是れ造化の設計を助長する進路なり。

吾人の念は、此の如く造化の勢力ある眞理を食となせる者にして、之なきときは人世の快樂なきに至る、吾人が、心靈は好んで之を能く研究し、好んで又能く人に傳ふ、研究せざるも、窮屈にして。社會を益せざるも、窮屈なり。餘義なく、道に從ひ、餘義なく、道を露出す、而して一旦發表したる理想の既に達せらるゝや。早くも又一層高尚なる理想の必要を生ず。此必要の、事實は、又吾人の心靈を鼓動して、尚ほ一歩進んだる理想の實際界に降誕するに至る。此の如く、轉々、發々、進歩の長程を吾人の前に開きて、遂に其大理に達す。

此の勢力の來りて吾人の心靈を通り。進歩に進歩を生じ、心靈に隱潛せる、道德的、靈火に發火するときは、從前の進路は、其歩を急轉し、爰に至りて、大成効の大期に近きしことを證す。理學は、聖義の塲所のみを撰はず、然れども道德は正義を好む、美術音樂は、惡人にも好まる。然れども惡人は、道德を好まず。滊車や、滊船は、惡人をきらはず。然れども、道德は惡人を、其儘に乘せしめず。學術、文藝は、尚ほ惡人も之を善くす。道德は、惡人の善く理解する處にあらず。道德家は、是等の萬理、萬藝を知らざるにあらず。之を知りたる上に、尚ほ道德を有するなり（今の道德家然りと云ふにあらず）學文、技術は、理想に對する眞理なり。道德正義は眞理に對する生命なり。生命に對する眞理は、勢力を生じ、勇氣を生じ、勝利を生ず。勝利者の手には、支配權も歸し、支配權の下には、命令權を生ず、勇氣も、道德

家より出で、支配權も、道德家より出で、命令權も、道德家より出づ、道德の勢力、天下に敵なきに至る。道德は公平を生み、公平は、正義を生み、正義は平民主義を生む。爰に於てか、文學も、政治も、理學も、藝術も、器械も、皆公平なる平民主義に向ひて、行動を始むるに至る。只王公や、神鬼のみを歌ひし文學者は、一般人民の、遭遇せることを歌ふに至り。海濱の漁り家にも、僻陬の田舍にも、裏店の茅屋にも、其理想は讀まれるに至る。高尚の文字は、平かなとなりて、如何なる卑賤の家までも天地と、人道を解說するに至る。今日まで一隅にありて、勢力を極めし、音樂は、大道のあめ賣りの應用する處となり。王公貴人の病氣を癒し、醫學は、慈惠病院に普く應用せられて、貧者の病氣も、共に治療するに至る。富者を保護する處の法律は、貧者を助くるの訓命となり、壓制事業は、變じて慈善事業となり。箇人

主義は、變じて團隊主義となり。獨專政治は進步して、平民政治となり。萬事、萬物、道德的制裁の下に、其運動を共にするに至る。

其感念、愈々進步するときは、吾人が學術、技藝、心內、心外の諸情、諸感を試練して、造化の高遠、聖潔なる、生活と、一致、契合せしむるを以て、目的となす。此靈火は、人をして、白刃を蹈ましむべく、殉教者をして猛火を輕ぜしむべく、豪傑をして事業に獻身せしむべく、萬害を除却して、正義を決行せしむるに至る、世には人心にて希望すと雖も論理的理解を以てしては到底其處に達するを得ざる如き、高尚至遠なる處ありて存す、此の如く論理的知識のみにて或は其了解せる眞理のみにて力の及ばざるときには、此靈力入り來りて、人心を助け、吾人をして、煩悶、衝突の境遇を脫せしむ。

眞理と、論理は、外部の必要を以て人間を命令す。心靈は、內部の必

要を以て、人心を鼓舞し、之をして、其人の志節の強弱に應じて、其中心より奮發せしむ。此勢力を愈々進歩せしめて、理想界の最高處に遊ばしめ、之を實際界に呼び下しては、實際界を化して、快樂ある仙境と思はしむ、此觀に遊ぶときは、實際界を見るも、理想界を見るも、其眼界、甚だ快樂なる廣大の美園にして、人生最終の高望と、相一致するに至る、此處に至りて人生の全躰は、萬般の爭論を消し、萬般の衝突を絶し、始めて、圓滿無垢なる、樂園に進入す、此處には模糊なる、虛妄なく、怒りなく、恐れなく、涙も、心配も、拭ひ去られ、榮光、赫灼、只快樂の美妙境あるのみ。

第七　調和の美妙

化學者曰く、萬有は千差、別離、萬狀、萬態なりと雖も、其元質は、只六十七源素の、極細微分子より、搆成し、配置し、其他には、何等の原質、原狀態なしと、余は此原質の、性質の如何なるものなるやを知る、是れ只、無生命、無勢力、無意識のものにして、彼れのうちには、何の意識もあることなし。此物質自己に、其精神なきときは、其他何か勢力の加はりて、其元素の配置、離合、聚散等を調停するにあらずんは、如何ぞ、此自然界、天地の大動なる奇觀を、詳說し盡すことを得るや。此等の元素は、其保有する處の、量容に於ても、其比重に於ても、其質に於ても、其化合に於ても、其萃合に於ても、各々相殊別の存する處あり、其數に於ても、異同を生し。其化合に於ても、

異動を生し。其比重に於ても、異同を生し。定量、定數は、何萬年以前も、今日も、只六十餘種と定まり、是よりも多からず、又少なからず、是等のもの、何故に或る者は、少く、或る者は多く、或る物と或は合し、或る者と或る者とは合せざるや。此の間、一定の法、整然少も異る處なきを見れは、若し他より此分子、以外に、尙ほ一種の之を配合せる處の、勢力あることを受諾するにあらずんば、是等の六十餘種の原質は、相ひ互に自ら、決定して、之か配置をなしたりと云はざるへからず。然らは則ち是等の物は未た現世に存在せざる前に、既に開議を開きて、其配置、形狀、運動、合離、分散等に就きて、如何に爲さんとするかを前以て論議、決定したりと云はざるへからず。此物質に、若し此會議なしとせは、自己以外の勢力に配合せられて、其配合の命に從て、物質各自の運動をなすなりと云はざるべからず。吾人

は探道者の役目として是非とも此兩者の內何れとも、決定せざるべからず。酸素や、水素や、金や、鐵にして、若し自己本來の力によりて現今の如きものとなりしとせは。諸元素は、自ら活動して之を配置し、各々會議の上自ら決定したるの證據にして、決して物質は、無生命なる死物にあらざることを證するなり。確乎たる意匠、意識を存する、人生以上の靈動物たるの正確なる明證あるなり。

物質は意識、靈能を存せざる處は、科學者の證明にして、亦吾人も確信する處なり。然らば此無活、無生靈なる、物質を何程多量に集むると雖も、整然たる、一定、不變なる規律の生し來ることは又論理の許さゝる處なり。爰に數字を天に達する迄、積み重ねたりとせよ。何程廣く重ねると雖も、代數學の道理や、幾何學の道理の生れ出づることなからん、又いろはの四十八字を何程多く重ねたりとも、百人一首の

名歌や、古今集の歌調の如く、人を泣かしめ、人を笑はしめ、慰め、或は人を喜ばしむる處の文韵掬すべきの詩想浮み出づることなけん。此等のいろはの百人一首となり、古今集となりしは、人麻呂、貫之等の名詩人の詩想を、只此のいろはに轉畫したるに過ぎざるは、誰も人の知る處なり。況や天地の伊呂波たる此物質に於てをや。大なれは大なる程、灰壊、裂折たらずんは止まざるべし。長久、相亂雜して混雜せずんは止まざるべし。然るに此いろはなる物質は計此に出でずして、諸元素、空氣、相交り、異質、亦相交り、大局の上より琴瑟の如く相調和し、同供し、同誓し、金石、草木、鳥獸より、人生に至る迄、互ひに共同集合して、理法と和合の天地を現象するに至りては、百人一首と、古今集の裏面に、人麻呂貫之のありて、名歌をなし、如く、此宇宙の裏面には又一大能力を有したる、大勢力者ありて、此天地の伊

呂波を、彼れの精神に從ふて、配合調和したることを推知することを得るなり。

漢字の類を堆積して、地球に存する處の種々なる分子の數と等しきものを集め、之に電氣や滋氣の勢力を以て震挑したればとて、四書五經の如き大乘經の如き、名作の出づることあらんや、之れ只孔夫子、釋加の靈精の能く爰に至りたるは、三尺の童も、又能く理解する處ならん、況んや、確乎たる萬有の存在秩然として保つに至りては他に靈妙なる、燮理者のありて存する事の確實なるを疑ふものあらんや。然りと雖なくして斯の如く能く調和する事を得んや。

尚ほ一の解説を認識すべし、此宇宙に精神若し先にして、之が根元たらば、宇宙には、心匠、趣向ありて、其目的の存するや、疑を容れざる處なり。然し之に反して物質若し先にして、之が元因たらば、此内

には、心匠、配置、目的と云ふか如き者の絶へて存ぜざるや、言を待たず、人類は精神的、受造物なり、禽獸は、物質的、動物なり、精神若し果して宇宙の根元ならば、人類は是れ創造の目的たる開闢の意匠せる極巧なりと云ふて大に可なり。之に反して、物質若し首先にして宇宙の根元ならば、果して然らば此天地は、人を害する豺狼の爲に存する事、人類の爲に存すると同等なりとなさざるべからず。然らば人類の權利は、蚯蚓の權と少も異ることなし。此の故に物質若し、根本ならば、人間とならんよりは、寧ろ鰐魚や、木石とならんこと、恐らくはるかに愈れりと云はざるべからず。如何となれば此等の動物には宇宙の物質的、根本質を、其躰中に最も多く蓄へたればなり。又宇宙を解釋するの必要もなく。義を愛するの要もなく。甚だ氣樂なるものなればなり。此の如き事事實ならば、正成とならんよりは、尊氏となり、道德家とならんよりは、悪人となる方甚だ好都合なるものなり。良心と、正義の領分内にありて、四角四面に、世を渡らんよりは、男女氣隨の飯食場裏に於て、快樂を、酒地肉林の間に極むるを遙かにまされりとなす。天下豈に如斯條理あらんや。宇宙の組織如斯不正整理のものならんや。

天地間の物質力、及び滋氣力は、天地に精神の存在することを證す、只に勢力自身の外に存在するのみならず、又熱力自身の内にも、自身を經ても、共に存在するなり。之等の事に對しては光を見るよりも明なる明證を呈す。宇宙には、重力と稱するものあり、此力あるの爲に、物躰は其團塊、大小、粗密に從ひて、互ひに相牽引す、而して其牽引力は、その距離を自乘するたけ逆減す。他語を以て之を云へば、是れ物躰と、物躰とが、或る他の反對なる生質の力に碍けらるゝにあらざれば、互ひに相吸引するの力を云ふ也。空に垂れたる物躰は、引力の爲に地球の方に引かる、一塊の砂糖を茶碗の上に載すれば、其茶碗の内なる水を吸引す、之を世に細孔吸水力と呼ぶ。一片の鐵を露出し置けば、空氣中に籠れる酸素の分子を吸收す。之れ化學的親和力の然らしむものとす。何故に其物躰は其團塊の、大小、粗密に從ひて互ひに相牽引し、之が距離を、自乘するだけ、其牽引力を逆減

するや、何故に一塊の砂糖を、茶碗の上に載せて、其下面を水に接せしむれば、能く其水を吸ひ上くるや、何故に一片の鐵を空氣中に曝せば、能く酸素を吸收するや。人は云ふ是れ物躰の引力細孔、吸水力、及び化學的、親和力の然らしむるによると、但し是等の勢力は如何にして斯く引力、吸水力、親和力てふ作用を有するに至りしや、或は之等の勢力自ら斯の如き作用法を有せんと決定し、且つ自ら從ひて働かんと決定したるならんか、或は他の集力ありて、是等の作用の爲に、此の如き勢力を決定したるならん……

……然るに、其實は引力と云ひ、吸水力と云ひ、親和力と云ふも、只是れ精神の行動を表する稱呼たるのみ、抑も勢力に名を命ず、且つ是か作用法を發明するは、其勢力の根本を極むるものにあらず、吾人は觀察と、實見とによりて、精神の活動法を看破したりとても、之が爲に精神の物たるや、此に竭くとは云ふべからず。是れ名稱を、源因と誤認するものにして。例へは或る勢力の如何に行動するかを、學ふや直ちに其自然か行動するものゝ、本躰及び實相を學び得たりと云ふと、同日の論のみ、其皮想の見解たるや一目に瞭然たるなり。

熱氣、電氣、滋氣、光明、及び勢力は、又是れ精神の表面者ならざるべからず。其理は則ち物質か精神の表面者たりと同しとす。是等のものを自ら其行動を決定すと信するは、即ち之を理性あり知能あるものと信するなり。然れとも是の如きは、古來未た嘗て之を主張せしものあらず茲に於てか、吾人か是等のものゝ存在を領會するの道は、只是れを精神てふ者の決

定せる處の一あるのみと見なすのみ、吾人は是等の者か日々に人類の思想の使用に供し工夫に資するを見る、其思想の表明者たるや必せり。

然らは電氣、滋氣、親和力、化合力、細孔引力、皆精神の噫呼なる、或る目的の行動に過きざるなり。各目の物質に配合せられたる、隱潛力に過きざるなり。只此大神精の表象者たるに過きざるなり。

宇宙には、物質以外に、大調和力ありて存す、物質は各自の殊有する性質に從ひて、各々單獨の動をなすものなり。只其己れか容量に施されたる勢力に從ひて、其本分をなすに過ぎざるなり。恰も氣車の役員の如し、或る物は氣械を掌り、或る者は氣笛を吹き、或る者は切符を剪り、或る者は乘客に注意す。如斯、數狀態、數勢動、相集まり一箇の瀛車は此轉すべし。然れとも、其元は、瀛車、組織者の心匠の發表に過ぎざるべし。此設計せる意匠の組織に反するものは瀛車に粉碎せ

らるゝに至るべし。機關師の動く處は驛長の事業と反し、レールドメの器械は、進行の勢力に反し、切符を賣るものゝ、意志は、切符を買ふものゝ意向に反す、然れとも小部分の反する處の性態は、大部分に向ひては、萬狀、萬態に向ひて、萬般の滿足を滿すものなり。

宇宙の大行動せる、大機關も、殆んと之に類す、火熱の性質と水勢の性質とは、全く其行動を反對にす、火は水に敵し、水は火に敵す、然れとも此大敵は、各自の小部分の反對せる行動は、大部分に至りては、反て敵の繁殖力を助くるものなり、況んや其他のものに與ふる處の利益に於ておや。若し地下に火脈のなかりせは、水の行動は止まるべし若し地下に水脈なかりせは、火脈は今日に絶滅したるならん。太陽なかりせは、海之か爲に死し、海洋なかりせは、太陽至理の運行は、停止せらるべし。太陽至運行を失せば、地上の木石、禽獸人靈何れの處

にか復た生活を保たんや。

火は何そや炭素、酸素の異性質の相合同する力にあらずや。電は何そや。陽性、陰性の隱潛力の發して、合同する力にあらずや。而して此炭酸、素相合したる處の火勢は、其勢力を以て、又炭素を製し、酸素の發達を助製するにあらずや。又陽性、陰性相合して發する處の電雷は。又其勢力を以て、一方に陽性の電氣を養ひ。陰性の電氣の發する原素を養ふにあらずや。彼等電氣、滋氣、火力、水分子は此動作より起るの調停を知れりや恐らくは知らざるべし。只是れを知れるは地下にありては、人間の靈知、靈能あるのみ。然らは之か靈能の、大元因たる大靈能者ありて、先に之を設計し、意匠し、其行動を配合し、其勢力を調停するにあらずんは、何ぞ此の如く異質暗々に同盟して宇宙の大行動を助くるの處作することあらんや。

水若し水の本分を盡さずんは、彼れが任する處を失ふべし。太陽火の分を盡さずんは、太陽は太陽として、中空に居られざるべし。恐らくは地軸、壞け、宇宙、混沌たるに至るべし。彼等は己れの行動を停むることを得す。又其行動を改むることも得す。只今日迄の法則のなり行きに從ふのみ。若し彼等に意識あるものならは、其行動にも變動を起すならん。彼等には法則あるにあらず。只大靈妙の法則の目的をなすあるのみ。大設計者の指定に從ふのみ。彼等は餘事をなさゞるにあらず。爲す事を得るの能力、自身に保有せざればなり。

草木の上に施されたる、意匠者の靈妙ある心匠に至りては、吾人の意識の知り盡す能はざる處ありて存す、彼の喬木の大空の上に衝く處のものは、太く生長して、風の來るに遇ふて、損害せらるゝことなき樣にし、樹蔭にある處の、雜草に至りては、風に逢ひて、抵抗するの要

なき故に、其躰至て柔かなり、彼等は意識ありて、如斯ことの用意ある生長ありや。決して然らざるなり、彼等は只無意識に、道理の己れに配合せられたる儘に生長するに過ぎざるなり。草の枯れたる後は、樹の食餌となり、樹の腐敗したる後は、茸の食餌となる、草も餌を要めずして需應せられ。茸も求めずして喰を需給せられ。樹も要めずして餌を需給せらる。

植物は實を結ふに先ちて、雌雄の花蕋にある處の、黃粉相互ひに合することなし、植物は動物にあらざれは、るにあらずんは、果實の成熟することを得す。然るに爰に蝶、或は、動物の如く、雄蕋、雌蕋、相合することを得す。

蜂の來りて、花葩に坐し、花より、花へと、轉々飛移す。此とき、此小動物の足や、羽に雄蕋の、黃粉を附着して、又雌蕋に至り、雌蕋より、又轉して、雄蕋に至り、此黃粉を、相媒介して、遂に植物の花蕋

を果實に生成せしむ。余は爰に借問す、此深切なる蝶や、蜂は、植物に、依頼せられて、彼等の夫婦たる媒介者と撰まれしにあらず。然らば何故に此の如く深切を植物に對して送るや、蝶や、蜂は、少も此事を知らざるなり。只彼れは、已れの自己の生命を保護せんが爲に、己れの口腹を粉する食餌なる蜜を得んが爲に、徘徊するに止まるのみ。顧みよ、此蜂、蝶の自然の生活を營むことは。他の蜜を奪ふ處の花に向て、如斯生長に大至要なる媒介の事業をなすことを、然らば蝶や、蜂の知らざる植物も、亦知らざる是等のもの、生成の裏面に、一大法則の相互ひに成長をなさしむる處の法規を、設計、意匠せられたるにあらずんは、何を以てか、此如ことあらんや、此設計、意匠の能く、萬物を、調製、停和することの靈妙なる現象を、調和の美妙と云ふなり。」動物は植物によりて生長し、又植物の成長を助く、植物は動物によりて

發達せられ、又動物の用をなす、彼等意志ありて斯くするにあらず、斯の如くせざるを得ざるなり。

マルクスなる獨乙人、或るとき、彼れの愛子を引き連れ、晩景に臨んで、己れが畜養せる處の羊の群の草を喰ふを見たり、然る處他國人の大なる犬を連れて來るあり、此時早くも犬は此羊を目がけ、走れり、羊は己れの危險を避けんが爲めに、荊棘の叢林中に逃げ込めり。此時荊棘は、羊の毛を引きぬけり。童子は此狀態を見て、父に不平を訟へて曰く、此無罪なる羊を害する處の、荊棘は、必ず之を殺伐して後顧の憂なからしめん。童子の父は、暫く默して、汝は爰に此を伐る處の道具あらば、之を伐り除かんと欲するや。子答へて曰く、若し余れ之あらは直ちに伐り去るべし、子の父は默して遂に家に歸れり。

他日父子相伴ふて斧を採り、再ひ此場所に至れり、小子は荊棘を伐らんと、意氣、揚々、甚だ喜べり、然れども父は、容易に斧を之に加へずして、丘に坐して、小子に向ひて、語れり、汝は、林中に美音を發して活潑なる遊ひをなす處の鳥の聲を聞くや、何如に愛嬌にして美音なるや、汝は之を好まずや、小子之に答へて曰く、實に父の語の如く、美嬌にして余も動物中之を好むこと甚た切なり。然る處此語の終る、一刹那、一の小鳥此荊棘の叢林中に飛ひ來り、羊の毛を彼れの嘴にて、空洞の樹幹に擔へり。父之を見て、小子に指して曰く、此羊毛は小鳥の巣に於て、赤裸なる雛鳥を軟く暖めて、之か生長を助くるなり。若し是れなければ、此小鳥の雛は、生長することなし。此如く汝の喜むものに利益あるに關らず、余は是より此荊棘を剪り去りて可なるや。小子爰に至りて識る處あり、否々決し

て然らず、願くは之を伐ることを止むべしと、父爰に於て訓へて曰く、汝は何事にても、善く理解せざる前には、之を非難すること勿れ。吾人の知識には限りありて、只目前に見る處のものゝみを知るのみ。然れとも神は大知にして、萬事を萬物に關係して、萬物に少も不必要なるものなき樣に、意匠、整理し置けり。

鳥の生活するも、彼れの考察觀覺の外に之を助くるものなくんば、生活すること難し、犬の無意なる戲れは、羊の恐れによりて鳥の赤裸子を養育するの働きとなれり、鳥の巣より落つる處のふんは荊棘を養ふて彼れ生成を愈々繁茂せしむ。羊此荊棘の、嫩芽を喰ふて愈々彼れの背毛に光澤あらしむ。造化の大秘奥なる道理によりて之を調和するにあらずんば、解するの餘地を發見せざるなり。

「ゆづりは」の實は鳥の腹中を一度過りたる後にあらざれば生成すること

となし、種芽は外皮を脱し得せざるなり、是れ其種子の厚ければなり、鳥は無意識に此實を食し、只己れの空腹の餌とするのみ、然れとも「ゆづりは」の生長することは、鳥なかるべからず、鳥も「ゆづりは」の實を食せざれは、其腹干乾して死するものあり。「ゆづりは」なければ鳥死し、此鳥なければ、「ゆづりは」も生長を絶せらるべし。

樹の高きに至れは、其實少さく樹低くなるに從ふて、實果愈々大となる、蔓草に至りて（地に這ひ曳）其太を極め、南瓜、西瓜、夕顔の大さに至る。若し此大なる果實の、高き處にありて、風來るときは、直ちに落つるに至るべし、而して落つるときは、必ず破壞するに至るべし、若し人禽の頭上に落つるあらば、死するに至たるべし、然るに高き樹程、其果實、少細となるは、何故の理なるや是れ決して科學や理學の領分内にて論結し得る處の道理にあらざるべし。寒帶に住む處の

鳥の羽翼は、多し、是れ寒を防くの爲なり、熱帶に住する處の鳥獸の毛は又多し、之れ熱を防がんが爲めなり。一は寒を防くの用に耐ゆに生成し、一は熱を防くに好便利の樣に生長す。温帶の鳥の毛は薄くして、寒帶の鳥の毛よりも、熱帶の鳥の毛よりも、乏く、猛獸、猛蛇は、深山に隱れて、犬猫、牛馬は、人家に近く生育す。大風、大雨、大空に傲動して、人家には害なし、草木より酸素を吐きて、動物より、炭素を吐く。動物は、植物の好まざる且つ不用なる酸素を滋養となして、植物は動物の好まざる且つ、不用なる炭素を彼れか食物となす。動物は、植物に賴まれてなさず、植物は又動物に賴まれてなさず、地面沼澤にして、清水に乏しき處には、天然夜間に露を毎夜木葉に袋をなして之に飯用水を蓄ふる處の樹木ありて。之を人に給す。海邊に遠隔して、鹽分を海中より採ることと能はざる處には、山鹽ありて之を給

す、島にありて木材に乏しき處には、海岸に漂着したる木材ありて之に給す。田地多き處には、畑に菜種を繁殖し。之か實を以て油を製し。之を以て光明を採る、此田畑なき處には、地中より石炭油ありて、光明の用をなす。海岸にありて、菜種も、石炭油もなき處には、海中より、魚油を取りて、之を照す、ロンドンの大都中に於ては、是等のものゝ不便を以て虛空の無盡藏なる大空より、電光を採りて、之か分望の市街を、不夜城と化せしむ。勞働をなす處の、田舍人は、粗食、尙ほ美味ありて、東京人の、八百膳の料理より、美味なり。美味容易く得る處には酸素少く、粗衣粗食の山家には大空より新鮮なる酸素を多く送りて、勞力者の攝生を維持す。資產多きものは靈性上に不幸を來し、苦痛を來し、病を來して、其資產の歡ひと、平均し、資產少きものは、安樂と、健康を來して、其資產なき不幸を、調和す。子弟多く

あるものは喜び多くある故に、之を養育する處の勞苦を增して平均す。子兒なきものは、慰むるものなきにより、又勞苦も少し、宗敎家は不幸なる處あれば、又幸なる處あり。粗食のうち、安心立命の位置を獨有す、一家放蕩家あるときは、其家に道德家起り。一國惡に傾むくときは、聖人大聖のもの起る。

造化の靈妙なる設計は、不平均のうちに平均を來し。貧弱のうちに大富を來し。不調和のうちに調停を來し。不關係の內に、關係を生み出し、喜びを以て、哀みを買はしめ。哀みを以て、喜びに進ましめ。不幸を以て、幸福を與へ。社會、萬有、森羅、萬象、苟も形躰あるものとして、世に害あるものなく。凡そ世に存するものとして、不用なるものあることなし。社會の裏面には、一大公平を行ひて、人生をして幸、不幸の別あらざらしむ。只に人類のみならず、萬物をして、平等

に其幸福を別與つものなり。此方則の萬物を通して發することの、信切なるに喜ばざるものなく、美妙なるに驚かざるものあらんや。

人心の愈々墮落するに至るや。義人聖者の心靈を動かし、或は天より大聖者を送り、之が救濟の大任を負はしむ。之等のもの千差、萬別に其事業を採る。或は學者として之の任に當り、或は事業家として此任に命じ。或は歌人として、音樂者として、教育家として、或は文學者として、之を命ず。時期愈々滅亡の時に至れば、言行一致天地神通、天靈に接したる大聖者來り、吾人死中に惰葬せられし、良心を呼び起して、再び人間界に旅立をなさしめ、吾人の知情を發達し、俗人を化して、靈人となさんとし。惡を化して善となし、苦めるものを化して、快樂者となし、不義を化して、聖謙者となし。憶病者を化して、活潑なるものとなし。病者を癒して、康快のものとなし。萬人、心靈に天

の聖靈を降誕せしめ。快樂を來し、喜びを來し、勇氣を來し、正義、公道、天眞、完美の人生を形造するに至る。

人間は天地を解說することを得、然しなから己れを解說することを得ざるなり。人生は風景を改造す、然し己れの心を改造することを得ざるなり。人間は、人を教ゆ、然し自己を教ゆることを得さるなり。人生は、人を責む、然し己れを責むることを能はざるなり。人生は人の過ちを見る然し己れの過ちを見ること甚た難きなり。人生は花を見て樂む、然し己れを見て樂むもの少きなり。人生は批評を好む、己れを批評し得るもの天下一人もあらざるなり。爰を以て人生は己れに對しては、如何とも其改良に窮したるを證す。此人生を改良するは、人と人との間に起る風波が人と物との間より敎らるゝ無言の敎育か己が失策より起さるを得ざる自識か、人生以上のものならさるべからず、然

り此人生を改良したるものは、此天地に調和均定を與へたる、至高至貴なる造物主の大興氣より湧出したる浩氣なり。聖靈なり、美なり、妙なり、調和者なり。吾人は此論を結ふに當りて、此大靈能者に謝すること幾重か然り。

結論

天地は人類を以て、目的の極巧となし、人類を以て己れが解釋者となす。人類は又天地を以て、親となし、萬物を以て己れが資用となす。人類の最も深く感ずる處は、世界は余が家にして、元より余が爲に造られたりと思念するにあり。此觀察は知識の發達して世界に對する關係の愈々增加するに從ひて、又其念も日々に增加するに至る。此世の元素、氣候等の吾人の幸福と、世の進歩に助となるものなることは、戸障子、衣服等の家人の保護と安樂に資すべき者なると、少も異る事なし。山も、空も、深林も、野田も、過去も、現在も、一として人類の、生存上必用の資財を引き出す寶庫として其感念の充されざるはなし。野となく、貴となく、老となく、少となく、一度此萬物に向ひて、

知識の號令を發するときは、宇宙の萬物は欣然として之が命を奉し、其用となすに至るべし、草樹は風景を作りて吾人を悅はしめ、又能く其質を以て吾人の病氣を癒す、岩石、材木、金銀、銅鐵は、人類の爲に便用を致して家屋となり。又萬般の器械となる、夜中茅屋を輝さんとせば、松脂ありて之が光を與へ、若し松なき原野には、牛ありて蠟燭を造るべき脂肪を給す。牛も居らず、松もあらざる、海邊に居らば、魚鯨ありて、萬斛の油を彼れが腹胴より出して之を給す若し之等のものを暗しとせば、山岳には千層の石炭ありて、其蓄藏せる、日光を漸々に發射せんと勤む、若し夜を變して晝の如くなし、明月をして市街に輝かすが如くならしめんとせば、大空より電氣走り出て、之を永遠の不夜城たらしむ。若し海を渡らんとせば、東西南北の風ありて、舟を大陸の對向に馳らしむ。若し之を遲しとせば、蒸氣ありて、萬里の

遠陸を比隣の如く近からしむ。若し郵便を遲しとせば、不可思議の電氣、一瞬の間に能く萬里の飛脚をなさんとす。如斯自然界の萬物は、人類の各便益を奉行せんと力め、各自に向ひて其慾を滿足せんと欲す、又其志望に和調せんと用意す。自然界には、無盡藏の富を以て、人類の身邊を圍繞し。人類をして自由に之を採用せしめんと欲す。

又自然界は人類に因て、己れが解說を得んことを欲す。人類も之を試驗せんことを欲す、今日に至る迄の世界の書籍は、皆此自然界の奧妙、形態、及ひ性質を彩したるものとす。地質學の書は、此自然界の巖石、炭狀、土礫等の、由來變狀、轉化を記したるものなり。化學の書は、微分子の、化合、離散を論したるなり、天文學は、天躰の、軌道と、運行を記したるなり、動物學は、動物の構造、性質を記したるなり、宗教書は、此造化の奧妙なる、靈知を吾人の心靈に移したることを記

載せしものなり。天下の書籍館は、此自然界を只文學に轉寫せる異名のみ。

吾人が住居すべき國家として、之を觀するときは此世界は人類の爲に造られたるものとす、勿論動物も各々其用を自然界より取ると雖も植物は、土や水を採り、蟲や鳥は、植物を採り、獸は禽鳥、植物を採り、人間は此萬種萬般の物を捕獲して其用を給す。其飢を充さんには海陸に於ける食品及ひ果實ありて之を要し、其渴を醫さんとせば千齡に流るゝ清水ありて之を要し、身命を護せんとせば金石樹木之れが用をなす、其思想を要するときは天下の秩序を盡く配列して理想の教科用書たり、其疾を醫さんには草木盡く來會して化學者の腦に映彩す、要するに人間の精神は世界の全態と關係する性質あるなり故に、世界の全態を己れが用に供せずんば其行爲働きを停止めざるべし。又人生に供

せらるゝ樣配置せらるゝなり。

練習の場として考るときも、世界は人類の爲めに構造せられたるものなりとす。練習により、進歩發達するものは、人類のみなれはなり。學者如何に辨すると雖も人類の外に進歩を見るものはなし、海狸は木を折りて己れが家を造る、然し昔時の海狸も、今日の海狸も其家の構造方は少も異ることなし。猿は、尾と、尾を互ひに組みて、猿の身を以て橋となし、能く河を渉るときく、然れども終古單一なる方を以て行動し未た嘗つて他の架橋法を發見したるを聽かす、何年の行動も知識の進歩することなくして、又技術に長することもあらざるなり。

人類は生活の要領として、事業をなす、然し此事業は、人生をして知らず識らず發達せしむるの方法となる、其技術日に進み、日々月々に新にして、諸の思考を實際に活用す、樹を斬るに斧を製し、舟を以て

海を渡るに至る、是の如く其幼稚の行動をなすに當り、學ひ得たる思案を次第に好良なる方法に化し、好良なる器械になすに至る、小舟より進んで蒸氣船となり、弓矢より進んで二十連發銃となり、松脂の光は進んで、電氣燈となる、萬物の質中に隱潛せる萬種の聲は、化して美韵ある音樂となり、天地の象彩は、席上の繪畫となる。

又人類は、己れに反抗する處の、諸勢力を用ひて余が婢僕とならしむ、河海を利用して舟を浮ぶ、波は舟を覆す、然し波と風に乘して反て舟を速かならしむ、毒を以て反て病を癒し、鴕鳥の皮を着て、鴕鳥を捕ふ。此如き人類は自然界を克服せんとするに始まり、自然界を全く征服して後其行動を停止すべし。人類の意志は自然界を知らんとするに始まり。心靈と一致して安心の境に至りて止むべし。

抑も斯の如く造化の秘巧が、極めて能く人類の性に應ひ需用に應ひ希

望に應ひ目的と合す其靈は極めて能く吾人の靈に通じ。其の美は極めて、能く吾人の美と合し、愉快も合し希望も合し宇宙を悉く余が處有となし、造化をして、吾人の親戚の如く親子の如くなりて止るべし。

是れ文學最終の目的にして造化の極巧亦目的とする處なり。

美妙前編 終

美妙後編

文學の藪淵

天地

森々たる萬有の形象、其道理なくんばあらず、羅々たる天地の配列、其調理なくんばあらず、既に道理あり、既に攝理あり、神出奇沒、誠に妙絲、花笑ひ、鳥答へ、藪森鬱叢、海嶽冥幽にして朱產を吐き、群嶽雲峰に鼎殊たり、温氣種芽を滋育して凉風炎熱を相調す、其出つる因なきにあらず、其持する和なきにあらず、因あり果あり、奇出妙調、仰げば星辰となり、伏せは地獄となる、地厚ふして萬物を載し、天之に應して四時調停、晝夜序を誤らず、光暗表裏、走獸野に群りて群翼

天空に翔ふ、呼吸に空氣ありて動植を調和し、水ありて呑むべく、翅鰭ありて泳くべし、聽くに耳あり、知るに知覺あり、視るに眼睛ありて、思ふに心あり、嗅くに息氣あれは鼻ありて之に應ず、翼あれは空あり、水あれは海ある、魚心あれば水心あり、風物に抗すれば物激して鳴る、能く動けば靜となり、深沈遂に動搖を生む、生るれば死あり、死すれば生あり、蒸氣天空に昇り熱を失へば降る、春夏秋冬、寒暑凉冷、火あれば水あり、有あれば爰に無あり、有無黑白相櫟歷す、物則あれば物あり、物あれば則顯れて之を官す、形なきものを道理と云ひ、形に携ふて配するを人と云ふ、喜怒哀樂憂悪慾、泳ぐに鰭翅なく、飛ふに翼なし、其躰量は馬に及かず、其勇氣は猛獸に劣る、劣るを以て勝るに對すれば鳥獸に及かず、勝りたる思慮は眞に是れ萬物の靈、冥幽に足を臺して理想は萬有に透曉す、情意發して幽谷に鰐魚を泣かし

め、知識は飛んで霹靂を叱咤す、腦に天地の法則を携ひ道理を寫して態妙幽玄、吾ありて天地を知り、天地目的して余を生む、天地余なるか、余れ天地を知りたるか、兎に角理想は神人融合、樂みあれば苦みあり、苦みあれば樂み來る、今日の榮華明日の墳土、前半世の安樂は後半世の辛苦、惡邪全盛を得て聖善溝谿に呻吟す、鳳凰籠にありて雲雀高翔す、豪賊白中に横行して呑むべき者を尋ぬ、演劇あり、役者あり、教會あり、僧侶あり、法律あり、官衙あり、學校あり、學者あり、文人あり、雅客あり、罪人あり、善人あり、小說あり、巡査あり、農あり、士あり、工あり、商あり、貴賤貧富ある、是誠に宇宙の大觀なり。

美情

天地美情を滴して吾人の情緒を濕す、人靈は天情に接して理情愈々濃

厚なり、情致揚々餘情を生じ、快透於皇身を置くの處を知らざるに至る、噫嘻透逸なる哉天地、於戲美逸なる哉情靈、山嶽氣骨を吐けば之を含んで勇氣となり、海洋潮嘯を吹けば之に望んで濶大となる、深谷を跡んで幽逸となり、蒼天望遠期せずして遠大となる、花に對し笑わさることを得ず、鶯を聽き喜はざるを得ず、峨眉山月半輪の秋、獨り孤燈に坐して情交爰に愈々切なり、天音の妙調情底を挑抉して仙境に遊はしむ、或は哀むべく、笑ふべく、喜ぶべく、蹈るべく、餘音嫋々情呼を絶極するに至る、螢あり、涼風あり、雷雨あり、雷光あり、虹霓あり、千狀萬態吾人が知情を自然に接合せしめざることなし、聖靈雨そゝぎ、浩然の氣集り、慨世の偉大なる人塊を築き、審美、純善、純正、純潔、純眞なる天眞の道理を人間を通して爆發するに至る、人之によりて進み、之によりて退き、之が爲に書し、之が爲に詠じ、之

によりて照り、之によりて躓かざるに至る、人生最終の目的に架するきざはしも又他に覓むるを得べからざるなり。

美とは何ぞや、美とは萬象の浩氣襲ひ來りて吾人の情性を動かし妙機名づくべからざる快愉の感情にして只情に於て之れを掬するを得るのみ、天地審美を吐き、人之に應するの美性を供ふ、天地情交融緣の機動文學的交合の快味を云ふ。此快味は動物に發し、植物に流し、山海空玄に至る處に發揚す、故に見る者として美ならざるなく、聞く者として美ならざるなく、接する者として美を極めざるなし。世に醜惡と唱ふへきものは此情緒の接合配置を誤りたるものにして、客觀的に存在するものにあらず、薔薇棘げを持つと雖も芳香の花輪を護せんが爲なり、之を名けて醜と云はゝ花を手折らんとするものゝ私言のみ、泣くべきに泣き、恐るべきに恐れ、怒るべきに怒り、撲つべきに撲ち、

破るべきに破らば、泣くことも、恐るゝことも、怒ることも、撲つことも、破ることも皆美なり、誠に美なる哉、美なる哉、美は美にして美なり、故に美は美なり、人之が爲に生れ、之が爲に死し、之が爲に夫妻として偕老の契を終る者幾人なるを知らざるなり、クリストの如きは此美を妻となしたる者なり、ションソン婦人の如きは此美を夫となしたる者なり。ゲーテー曰く、余れ世の所謂美人に交はらんよりは天眞の道理を抱くことは余の樂み實に深しと。

ゲーテー前半世は全く美を以て妻とせり、彼れ始めてイタリーに登り友人に遇ふ、友人問て曰く汝妻ありや、彼れ答て曰く、余が妻は至る處にありと、其後或豪家の招きに應せり、此家は妙艶なる令嬢ありて常に文學に志望厚く、別室に坐して文書を樂しみとせり、常にゲーテーの名望を聽く、ゲーテーも又此婦人の文學者たることを

知る、ゲーテー此處に宿し半夜臥を起きて家外に出づ、一條の光線別莊の内より輝く、ゲーテー怪んで之を伺へば妙齢なる一婦人の文學に醉して終寢を忘れたるなり、ゲーテー聲を潜めて之を呼へば婦人靜かに戸を開き、四方山の雜話の末、婦人ゲーテーの良友ありや否やを以てす、ゲーテー曰く余が愛友は天眞の美にして文學の母なり、余れ是れと共に進退苦樂を供にすと、婦人胸を撲て驚て曰く貴殿は余が終身宿約の良夫を奪へりと、ゲーテー心中大に喜んで曰く、余れ今日迄天下に妻とすべき者を知らざりしが、此婦人こそは肉の肉なる余が思望を得たるものなりと、遂に約成り夫婦となれり。

文學の苑内に備へられたる樂園

美しきかな山水のかため、泉涓々として流る、嫩芽花に對して笑み、鳥は樹梢に跳りて又枝に移る、池水銀鏡、白鳥鶴々たり、微風馨を送

りて桃花馥郁、草色青々として雅致自ら滴る、庭前に虎石ありて老松の間に眠る、家睦欒團一室のうち坐なから風致を生む、天女別室に妙音を送りて鰐魚之が爲に泣く、友あり遠方より來りて余を慰め、犬猫伍を共にして主人になつく、妻子愛情に濃厚にして快情風姿に滴る、婢僕聲に應して動き、四濱波靜にして門戸又閉すの要なし、四隣相和し。妻子情話のうちに眠る。

あゝなんぢ美しきかな吾住鶴よ、あゝなんぢうるはしきかなんぢの目は面帕のうしろにありて鴿の如し、汝の髪はギレアデ山の腰に伏したる山羊の群に似たり、なんぢの齒は毛を剪りたる牝羊の浴場より出たるが如し、各双子を生みて一も子なきものはなし、汝の唇は紅色の總紐のごとくその口は美し、汝の頰は面帕のうしろにありて石榴の半片に似たり、なんぢの頸項は武器庫にて建てたるダビデの戍樓の如し、その上には一千の盾を懸けつらぬ、みな勇士の大楯なり、なんぢの兩乳房は牝獐の雙子なる二箇の小鹿が百合花の中に草はみ居るに似たり、日の涼しくなるまで、影のきゆる迄、われ沒藥の山また乳香の岡に行くべし、わが住鶴よ、なんぢは盡くうるはしくして少のきづもなし、新婦よレバ

――レバノンより余にともなへ、レバノンより余と共に來れ、せるものんの巓より望み、獅子の穴、又た豹の山より望め、わが妹、わが新婦よ、なんぢの愛は樂しきかな、汝の愛は酒よりも遙かにすぐれ、汝の香油の馨は一切の香物よりもすぐれたり、新郎よ、汝の唇は蜜を滴たらす、汝の舌の底には蜜と乳とあり、なんぢの衣裳の香氣は、レバノンの香氣の如し、余が妹、余が新婦よ、なんぢは閉たる園、閉たる水源、封したる泉の如し、汝の園の中に生び出づるものは柘榴及びもろ〳〵の佳果、又コペル及びナルタの草、ナルタ番紅花、菖蒲、桂枝さまざまの乳香の木、沒藥、蘆薈、一切の貴き香物なり、なんぢの園の泉水、活ける水の井、レバノンより出づる流なり、北風よ起れ、南風よ來れ、わが園を吹きて其香氣を揚げよ、われがわくは余が愛するものゝ園に來りて、その佳き果を食はんことを。

人生の狀態

智者は智にして益々道理を覓む、茲に益々賢なり、愚者は愚にして道を輕んず故に益々愚なり、賢愚の差神獸も啻ならざるに至る、茲に於てか遂に道理の衝突起る、富者は財餘りて茲に勢利を壟斷す、故に益々富み、貧者は目前の活路に苦んで事業に難し、故に益々貧、貧富の

差人獸も啻ならざるに至る、遂に反目凌駕社會黨の氣焰を裏面に築つく、貴き者は地位に居りて愈々貴顯、賤しき者は墮落して愈々賤、人情の勢態下を虐し上を侮るに至る、神獸人犬一堂に反目呑噬し、不調和の極死生を目前の苦痛に供するに至る、天地動々是れか爲に泣き、神聖之か爲に恐る、或は預言者を通して滅亡の預言となり、或は義人を感せしめて國難の犧牲となり、或は文章となり、詩歌となり、演說となり、演劇となる、或は苦み、或は泣き、慷慨悲憤、活文學の叢圖となる。

文學の目的

完美なる文學は理性と情性とを交合的に發達して圓滿なる思想を形造するを要す、思想若し理性にのみ偏して發達するあらは人事を

拋ち、獨り仙境に隱れて社會を酷評する狂人となり、若し社會に事業を採るものあらば只己れの爲利の爲にのみ働き、己れの連帶して立つ處の團隊を害し、遂に己れも又た滅亡を餘義なくせらるゝに至る、要するに修養したる學術、及び理想は情と調和を失ひ、甚だ淡白に只機械的の働をなし、或る時は藝術あるが爲に反て身を苦め、産を敗り甚たしきに至りては己れの思想に己れを擒にせられて呻吟煩悶進退是れ谷る所に至るものなり、不愉快不幸の感是より大なるもの又あることなし、如斯に至らば文藝を知らざるものこそ反て幸福なるものなり、隱遁者、無責任の批評家、偏理哲學者。不道德なる法律家等は皆此境遇を通りたる者なり、之に反して情性のみ發達する時は、俗情に迷はされ、進むべきに退き、退くべきに進み。始むべきに謹みて人に先せられ、緩くすべきに勇んで衝突し、泣くべ

きに笑ひて人に笑われ。笑ふべきに泣きて擯斥せられ、恐るべきに怒り、喜ふべきに笑裏面に萠し始るを知らずして反て哀み、或は目前の小利に大利を誤り、始終浮雲の如く、根なく、骨なく、輕躁なる愚物として、困難と辛苦とを擔ひたる長物を製造するに過ざるのみ、世の學者、及小說家巧に筆を用ひて俗情に呈媚し、只婦女子の好奇心を買ひ、收入と、喝采とを目的として人身の節義を亂するものゝ如きは文學の方針として採る可らざるは勿論、文學者と云ひて反て文學を害する者なり、如斯過失に陷るものは小說家に尤多きを見る、夫れ小說は氣骨と目的を文背に隱して讀む者をして愉快の中に善に浸潤せしめ、淫事を畫きて淫を厭はしめ、盜賊を出して盜賊の忌むべきを隱然に自諾せしむるに至るを要とす、若し此伎能あらずして小說を艸するものは文學の假面を蒙むりて人身を害する大賊

なり、馬琴の夢想兵衛に於ける、小山金五郎に於ける、夢物語に於ける、ダビデソロモンの文藻に於ける如きは淫行を書して讀者心膽を寒からしめ、怠慢者を畵きて憤然蹴起するの心を養ひ、失策者をして尙ほ節義を守しむ、是等は文學上其責任を全ふしたる者にして如斯創作を以て世に顯われんことを望むものなり。

散文、詩文の如きも、餘りに高尙に失し讀者に解し難き隱語等を用ゆる者多く、漢學者及ひ和學者のうちに見る、是等は文學の目的を誤り文藻を玩弄視して遊戲に供するものなれば其効果至つて少し、散文の如きに至りても歷史的述記の餘りに冗長に失し理想的記述の意外に少きは文學界の餘程紛雜なるを證するに足る、吾人文學界に意を盡すもの無責任の言論をなさず、俗情を猥りに弄ひて人心を賊せず、戲に文藻を玩弄して文學を賊めず、理想に偏走せしめず、情

性に流落せしめず、慇懃勉勵し、以て其に議し、其に練り、思想を簡潔して以て其責任を完ふせんとは熱望に堪へさる處なり。

文學の定義

文學とは知情意を以て宇內を觀察し、人生をして快樂の地に進めんか爲に善美なる目的を以て美術的に發表する圓滿なる思想の記錄なり。文學とは善美なる思想によりて發表せられたる記錄にして、文章、詩歌、演藝、小說、經文等を云ふ。

文學とは聰明なる男女の思想、並に感情を記錄して讀者を樂しましへきやうに排置したるものをいふ。

散文は文致と特質とを具へたる上に精緻なる注意をもてものしたるものにあらされば文學にあらず。

文學は其の最も廣き意味にては總ての筆記、若くは印刷したる著作に

して觀察、思想若くは想像の結果を保存するものを含む、確實科學の諸著は之を除くを通例とす、さはあれ時としては文學の區域を美文即ち雅趣の作、幷に情感の作にのみ限ることあり、例へは詩歌、能辯史傳等是なり、抽象的論文、及び純粹の學問文は之を除く。

文學は社會の發達人心の改良を目的として圓滿なる思想より流れ出つる種々なる文藻にして、其源は天眞の道理より溢れ出つるものなり、詩文は愉快の餘り困難の餘り道理を感するの餘り知らずして文藻を草するものなり。

文學とは種々なる社會に各々適合する完全なる思想より出つる文詞の記述にして人生本能の發表なり。

文學とは特殊の派をなしたる人々にのみ訴へたる者にもあらず、又偏へに事物の符號としてのみ言葉を用ひたるものにもあらずして、なべ

ての人心に旨味あるべき題を取りて思想を傳へ、且表せんが爲めに言葉を用ひてなべての人の智と情とに訴ふる諸著作の集合躰をいふ。

文學とは律語と散文とを問はず、考察の作といはんよりは寧ろ想像の作といふへきものなり、教化と實効とを助くるよりは寧ろ最多數の國人を樂ません事を期するもの也、特別の智識に訴ふるよりは寧ろ全般の智識に訴ふるものなり。

詩文

詩の要は實際に人を感動するを以て殊効とす、其人心に入り難く感動する價値なきものは詩歌の本領を欠きたるものなり、隱れたるより表はるゝはなく、其内心潔ければ聲も貌も風姿も又清かならむ、己れ先つ感動して而して俗人を感動し得へきものなり、眞實の詩人たらんとするものは先つ第一に心の心術思想如何を觀るを要とす、心平かなれ

ば吐く處も平かに、心美なれば又表呼する處も亦美なり、喜怒哀樂の天妙に接しては言はさるを得すして創作することそ至要なれ、要言すれは自然を意の儘に發表するものなり、或は人事を詠して天地の幽妙なる秘密を闡明し、天地を詠して人事の復雜なる事理を圓滑に指道するの妙機を備ふるを本職とず、今自然と人情と調合的に詠したる例を揚く。

瀧の音はたえて久しくなりぬれと
なこそ流れてなをきこえける

散　文

散文と韻文とは區別し難し、余は假りに律あるものを韻文とし、律なきものを散文とす、其書方は成るべく自然を財料として高尚なる意味を容易く摘指するを要す、假令へば相助くるの情を言はんとするには、

魚心あれば水心ありと云へるか如し、喜びを表するに花を以てし、哀みを表するに冬を以てし、淋しきを表するに秋を以てし、壯大なるに海洋を喩へ、靜逸なるに山谷を以てす、卑に流れず、冗長に失せず、高尚なる道理を閑雅平易のうちに識らしむるを要とす、狂文、戲曲文、比喩文、俳文、擬文、譯文等異なる處あれとも次回の文章論に讓る。

諧

諧諧は只十七文字の短句を以て理想を秀逸のうちに寫すを妙とす、滑稽諧謔能く自由に理想を摘抉するものなり、我か國平民的文學の先鞭にして德川氏の配下に起る、下等社會に文學的逸美の理想を容易く識らしめたるものは又と他にあらざるべし、其調態閑雅なるか如く、卑俗なるか如く、秀逸なるか如く、奇妙なるか如く、萬國に類なき通俗的文詩、無學の者をして文學の雅致を味はしむるを妙とす、今二三句を

擧くれば、

天地の壯大を詠して

荒海や佐渡に横ふ天の川

慘憺粟慄たる古戰場の亡靈を詠して

むざんやな鎧の下のきりぐす

忍耐と柔順を詠して

氣にいらぬ風もあろふに柳かな

人生の目的を比喩的に詠して

身のはてを錦にのこすかいこ哉

近江八景を十七字に畫して

七景はきりにかくれて三井の鐘

世の人の餘りに輕卒なるを誡めて

白露や無分別なるをき處

沈重謙遜を敎へて

みのる程頭のたるゝ稻穗かな

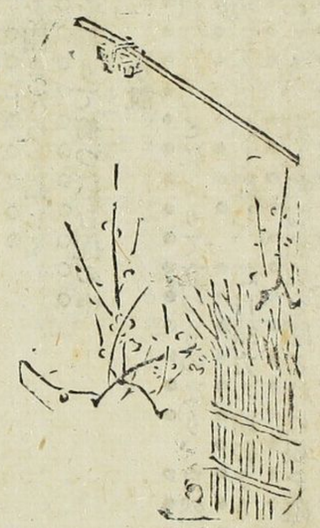
佛敎のさとりを開きたるを畫して

田の艸を採りて衝つ込む泥の中

小說

人は自然力と超然自力とによりて立つものなり、自然力は自身の勢力によりて其能力を全ふ爲し難し、超自然力の助によりて始めて其發動を誤らざるものなり、若し超自然力を離るれは根を離れたる草木の如一時は其諸能力を發動すると雖も漸々生脈を失ひて遂に諸能の發動を誤り、次第に思想に汚穢を生し、遂に枯死墮落するに至る、故に小說の要は最能力ある超自然力の情性に氣骨を繫ぎ、自然力を弄ひて慣發

克己愉快を以て諸情の運轉を自在ならしむるを妙とす。



文學の發達

天に天情あり流溢して美となる、審美人を感せしめて文となる、天輪に光り、地嶽に隱し、動物に滴し、植物に顯はす、萬籟の噫氣風動颯々たり、作れは則ち萬竅怒號、山林の畏佳、音樂となり、慘憺となり、悲哀となる、百圍の竅穴、或は叱し、或は叫ひ、或は吸ふ、氣慨間間暗約して天地の法則を含む、地嶽鳴動海潮を逆し、幽遠の勢狀爰に滿々たり、創天彌久億門の美觀を天外に雨らし、百嶽の嚴望氣骨鑊鑠たり、鳩に三枝の禮あり、烏に反哺の孝あり、下等動物能く親子順殖の道理を與へらる、春陽百草を發揚して小鳥花に對して歌ふ、秋夜の月は銀色空に凝り、冬日の雪は水晶地に碎く、凡そ千狀萬態文學の生命を懷胎せさるとなし、花木滿山に笑ひて四隣祝情に醉し、秋夜蟲聲を聽

けば片月悲哀を生む、山谿幽谷を陷んで閑雅の思想起り、市街の雜踏に接れば思自ら思々たり、大澤の下能く豪傑を生し、戰國の世迫まりて英傑を生す、天地人に映して文理を流し、人生は其境遇に親しく迫られて文學を生む。

人天地に後れて生れ天地に先ちて死す、天地の道理によりて來り又天地の道理に歸す、余ありて天地あるにあらず天地ありて余あるものなり、余あるが故に天地を知りたりと云ふは吾人に保持する處の理性が天地の道理性に擬せられたればなり、理想ありて理想を知ることを得べく、人間に理想あるが故に天地の道理始て流れ來るものなり、天地人生に此理想を與へ之に命して天地を知覺することを官せしむ、山水の明媚は能く人の美性を發達せしめて美術的文學を創記せしめ、荒野寂寞の平原に於ては自ら淡白なる情を發動せしめて茲に人生を失望に導ひ

き孤獨的の感を發せしむ、人生は此處に滿足を需むることを得ずして愈々克己慣勵し遂に天情を天外より呼ひ下し或は腦中に井堀りて其の滋情に濕されんことを望む、其忍耐弱くして此情を汲み出さゝるものは中途にして不愉快の死を終り、茲に至りたるものは忍耐に忍耐を生し、希望を生し、練達を生し、理性に熟し、滿足に熟し、豪强氣骨ある悲慘辛吟のうちに人生の安愉を覓むるに至る、於茲か堅忍なる理情は天命の餘義なくせらるゝ處にほゞばしりて、遂に不撓なる文學の發達を押し出すに至る、國情と風致との異るに從ひて又各々異りたる文學を發達するに至る夫れ如斯、是れ則ち支邦に支那文學を來し、歐洲に歐洲文學あり、日本には富士山の養生したる美文學ある所以なり。

社會益々墜落するに至り義人聖者の心膽を感動せしめ、身を忘れて改良の任に當らんことを決す、天も亦聖者に命して之が救濟の任に當ら

しむ、宗教家として命じ、學者として任じ、或は實業的慈善家として命ず、國家主義を起し、公愛論起り、安心立命の生命を流し、救世の事業爰に全地を風動するに至る、其完からざるものは次第に廢れ、完全に近きものは暗世を輝す、其事理と神情を普く盡したるものは經典となり、詩歌となり、生命となり、泉流となり、鹽となり、燈火となりて世を救ふ、其國家主義なるものは其國に終り、宇宙主義なるものは全宇宙に流る、干燥せる人物此生命によりて新生命を受け、義烈憤慨なる達觀者を出すに至る、遂に其思想流れて生命ある文學となり、無數の細流文學之と合し、生命となり、靈光となり、宇内に確乎不拔なる文學の軌軸を完成するに至る。

日本文學

社會は大學校なり、名山は良師友なり、萬有を教科書として進むは天

眞を愛する文學者の入校すべき學校なり。夫れ名山巍峨として蒼空を衝くの邊、雄偉氣慨なる文人を出す、池沼清漣を蹙め、草花幽香を吐く處に温柔の德義家多し、以て我國文學の靈發せし處を伺ふに足る、我國の地たるや山あり奇にして秀、水ありて清く流れて快、草樹赤額隱見覆沒禽鳥喈々として茅扇に相接す、富嶽の白峯、琵琶の百景、變幻妙を盡して文人を養ひ、松島の婉麗、明石の青草は數億の詩客足跡を印す、東州の新月は歌人の幽懷を引き出し物に生糸あり、竹あり、百巧に便すべく、儒佛老莊其間に隱見し、梅花幽谷より天音を招きて理情を結調す。爰を以て我國の文學理想は天然の美性を人情に混和し人情を以て吸み出したる感情的美術文學なり、儒佛老莊の傳來を經てより、文學理想は碩に理想的文學となれり、儒にあるものは儒の胃中に國學を消化し、佛老にあるものは哲學的に國學を混化して之を觀察

し、各其意見を異にし既に親鸞法師をして日本の天照大神は釋迦の再來せるなりとまでに極叫せしめたり、然りと雖も釋迦は彼か云ひし如く土より出てゝ土に歸れり、孔子は天命を奉して天に歸れり、老莊百家各〻行くべき處に行たれは再來の要なき事は彼等の法敎の示す處なり、只彼の思想のみ余か國に來り、余か國天然の美なる思想と合し、爰に新なる化合的文學者を形造し、此發達したる理想は又能く再び日本の天然を吸ひ下して、又前代の國文學と伍を共にし、經歷ある混合的文學理想を以て玆に又斬新なる文學を發達するに至れり、釋迦生れず、孔子來らず、老莊働かずと雖も、釋迦をして釋迦たらしめ、儒をして儒たらしめ、老莊をして老莊たらしめし處の天眞の道理は、美麗婉艶なる風色となりて東西南北に羅列奔走し、此美術的天然的逸美なる理想を以て釋迦を消化し、孔子を招き、老莊を兇して、日本の富士山琵

琶湖的文學を起すに至れり。

今爰に老佛の本邦文學と合して發達せし文學の理想を掲く。

行く河の流は絶へずしてしかも本の水にあらずよどみに浮ふうたかたはかつ消かつ結びて久しくとゞまることなし世の中にある人と住家もまたかくの如し玉敷の都の中に棟を並べ甍を爭へる尊き卑しき人の住居は代々を經て盡せぬものなれどこれを誠かと尋ぬれば昔ありし家は稀なり或は去年破れて今年は造り或は大家亡びて小家となる住む人も之に仝し處もかわらず人も多かれどいにしへ見しは二三十人か中に僅に一人二人なり朝に死し夕に生るゝ習ひ唯水の泡にそ似たりける知らず生れ死ぬる人何方より來りて何方へか去る又知らずかりの宿り誰か爲に心を惱し何によりてか目を悅ばしむるこの主人と住家と無常を爭ひ去るさまいはゞ朝顏の露に異ならず或は露をちて花殘り殘るとは雖も朝日に枯れ又或は花は萎みて露なほ消ぬず消ぬずと雖も夕をまつとなし……それ人の友たる者は富めるか貴み想なるか先とす必すしも情あると直なるとを愛せず只花と月を友とせんには之か……衣食のたくひ又仝下藤の衣麻のふすま得るに從ひて肌をかくし野邊の茅花峯の木の實、僅に命をつくばかりなり人にましわらされは姿を恥つる悔もなし糧乏しけれはなろそかなれとも猶あドをあまくすすべて斯樣のこと樂しく富める人に對して言ふにはあらずたゞ余身一つに取りて昔と今とをたくらふる計りなり大かた世を遁れ身をすてしよ

り恨もなく恐もなし命は天運にまかせてなしまゝいとはず身をは浮雲になそらへてたのまずまだしとせず一期のたのしみはうたゝねの枕の上に止まり生涯の望はなり〳〵の美景に殘れりそれ三界は只心一なり心若し安からずば牛馬七珍もよしなく宮殿樓閣も望なし今さびしき住居一間の庵みつから之を愛す自ら都に出てゝは乞食となれることを恥ずと雖もかゝりて爰に居るときは他の俗塵に著することをあわれぶもし人此の云へることを疑はゝ魚鳥のありさまを見よ魚は水にあらず魚にあかざれば其心を知らず鳥は林を顧ふ鳥にあらざれば其心をしらず閑居の氣味も又かくの如し住まずして誰かさとらん云々

月かげは入る山の端もつらかりき
たにぬ光はみるよしもかな

近代に至り活動せる新文學潮流をなして歐洲より流れ來り在來の舊文學を呑み盡して己れの滋食となさんとせり此文學の源は義憤公靈なる宇宙的公愛の血滴よりほとばしり困難と辛酸のうちに人生の最大快境を築かんと勤め其生命甚だ強健今此理想を通して押し出したる文學の詩を掲ぐ

「なやみにのぞみて　おそれもなく　あだはせめくとも　みきにたよらん
こゝろみにあふとも　つぶやきなく　かなしきときにも　きみにたよらん
やみぢをあゆむも　うたがひなく　あらしのときにも　きみにたよらん
かみのまさみちを　ふみまよわず　よをさるときまで　みくにのぞまん」
きみのみちかちを　うけてしのび　つきせぬめぐみの　きにぬまに
「いとものいそしめ　みちのときも　をけるしらつゆ　いそしめよ
まつまさへなく　よはきたれば　あさひてるまに　かゝやくま
いとものいそしめ　みちのときも　のほるひかげの　いそしめよ」
すぎゆくときは　やよりもはやく　よのまさなれば　ゆうひかげの
いとものいそしめ　みちのときも　にしにしづめる　いそしめよ」
かすかにのころ　ひかりのまに　わざなしをにて　ひをおくれ
「つみのゆろしを　にしともは　かくこそやすく　やすきあり
うきのなみかぜ　たちくるも　こゝろにあめの　みたみらは
ときはにきにぬ　たのしみの　こゝろにみてる　しづかなる
のぼるあさひと　はれやかに　ゆふべのみそらと　まつともは
あまつみくにの　ときわぎの　すゝしきかげを　みにけるかな
かたりにがたき　たのしみは　そのをもてにぞ

こがねしろがね　なべてよの　たからはものゝ　かずさぜね
きみがみたみは　あまつよの　たのしみをこそ　ひゞにまで」
「あめなるわがやを　あふきみれば　なみだもかそれも　さりてすゝまん
はげしきこのよの　あだのうちに　をちくるひやをは　ふせぎてたゝん
かなしみわがみに　あめとふれど　たゞあふきみつゝ　のほるわがや
つゆのうさもなき　あまつみくにゝ　つかれしわがたまは　ながくやすまん」
「かなしみのあらし　うきのなみたつも　のがるゝところは　いのりのいへなり
われらにめくみを　そゞぐ主のまへは　いとよろこばしき　いのりのいへなり
いのるべきところ　このよにあらずば　あだをさるちから　いづこにかもとめん
つみのをもひなき　いのりのいへにて　こゝろにみつるは　あめなよろこび」
「はなにおける　つゆのたまは　あさひにてり　かゞやくま
とくおきいで　いとたのしく　かみのみなを　たゞゆべし
あめつちの　ものみなと　たゝにまつれ　ながかみを
なつのあさけ　すゞしきまに　もゝちどりの　こゑをきけ
よのものみな　わがこゝろも　かゞやけるま　たゝゆべし
あめつちの　ものみなと　たゝにまつれ　ながかみを」
「ふせぎまもれ　こゝろみを　しのぶことに　つよめらる

おのれにかち　たゝかひて　きみによらば　救はるべし
あしきともを　たゆまずさり　きみのみなと　なげかして
まことをもて　いとはげみ　きみによらは　救はるべし」
ひのもとなる　このみくにを　かゝりみ　なみかぜなく
いとやすらかに　まもりたまへ　わがかみ
このみくにを　よゝにたかく　たゝせて　きよきすがた
よものうみに　うつしたまへ　わがかみ
あめつちをも　しろしめせる　わがかみ　みちからもて
なをみくにを　まもりたまへ　よゝまで

是をクリスト教文學となす保守舊文學派のものは眉を顰めてしきりに國に害ありとなす吾人の信する處によれは反て日本の害を除くものなりとなす勿論歐洲の風俗政治を咀嚼せすして猥りに施すときは或は害の生するなきにあらず然れとも釋迦を招き歐陽明を容したる日本の風景は日本のクリスト教新文學を生まざるの理あらんや今國民子の示し

たる處を載して余の不文に換ふ

一週日の間に三府を瞥見せる外人動もすれば即ち我國を評して曰く日本は如何なる健脚を有すれば三十年の歳月を以て歐米數百年の開化を追はんとするかと彼等は日本を以て開國以來僅かに三十年を經過せしものとなす彼等は日本の歴史既に國民の資額を造り居を知らざるなり我國は文明の大勢力を同化せしめて、我用を爲さしむるを知らざるなり……

……如何んぞ歐西の文明を吸取して不消化病に倒るゝことあらんや……吾人は根本的變革の性質に富みたる宗教の上に於てすら余が國民の同化力を示し得たり佛教の余が國に來る欽明の朝にあり蘇我守屋等宗教の戰爭を爲したるは……是より以往列世の天皇宣教使を發して佛教を天下に講説せしめ刑賞百端宗教の手段一として施されざるはなかりき然とも遂に公卿宮廷の宗教にして國民の宗教たる能はず一時は人をして佛教の宣布に斷念せしめし程なり是れ何の故ぞ是れ其國民的觀察に投する能さるか故なり詳く言へは國民に同化せざりしが故なり余は已に神を有す我神の外何の要ありて蕃神を拜せさるべからざるか是れ推理力ありとなきことを問はず國民の心中に於ける必然の疑なり故に佛教が本邦垂跡の説によりて日本の神は佛の權化せるものとなし此疑問を解するまでは渡來一百五十年間至大の勢力を揮ふ能はざりき彼の蘇我氏か守屋に勝つや必ず佛教傳ふべしと思ひしならむ然れとも躊躇進止の間に一百五十年を費して本地垂跡の説によりて日本の神と佛

したる後に於て始めて國民の間に入るを得たるを見ては以て余か國民同化力の至大至剛なるを證すべきなり此時に當りて余か宗教は果して如何なるものなりしか人の死魂を祭り千萬人野に叫ふの宗教のみ高尚なる佛教を同化せしむること如斯米國に一怪樹あり動物の之に觸るゝあるや其枝葉合して動物を卷縮し其血肉を吸ひ枯骨となして後止むと其犬猫たると獅子たるとを問はざるなり同化力を有するの國民は殆んと此怪樹の如し諸民諸音諸族を問はず之を一切同化せしめて己れの腹を肥さすんば止さるなり云々（國民の友二百五號）

支那文學

支那の文學は二派に區れて互に反目す一派は佛老莊を始とし若くは之と主義を同ふする諸家の説にして、主觀的に道理を觀察し、己と天地とを同一物となし、人生の喜樂辛酸は天地に春夏秋冬あるが如く、隨輪相循少も區別なきものとなす。

性相空寂、無性無滅、非往非動、不進不退、猶如虚空、無大無少、無一法、而諸衆生、虚妄横計、是此是彼、是得是失起不善愈造衆惡業一轉廻六趣云云、

故に困難も苦みとするの理なく、喜樂も喜とするの理なしとなす、如此く達觀して確信と滿足とを與ふるに至りたるを佛者覺識と唱へて其奥義を得たるものとなす。華嚴に敎ゆる處即ち是なり、其法性の動機變幻妙致なる　到底深く味ひ難く、永劫無量なるを無量敎に於て之を指揮す、他の二派は客觀的に之を導き主觀的に之を察す、天地を道理の本源となし萬物は之によりて成り、人間を以て萬物の靈となし、法命の示す處に從ふを人間の道となす。禹陶文武周公孔子孟子等の說き し處にして、之を王道又は天道の道となす、此文學の示す處は萬事軌模を天則に則り、天の命するを物の性と云ひ、性に從ふを以て之を道と云ひ、此道を修むるを以て人間の敎となす、此道は萬物と人間と尤密接にして須臾も離るべからざるを要となす、此說は前派よりは平易にして致味又濃厚なれは俗人に學ひ易くして又人を化するの力强し。

前者は萬事を理性に訴へて萬事を無に歸し、後者は情性を通して理性を發せしむる實理的文學なり。佛者は其說の人を化するに欠けたるを識り後に至り方便說を設けて性情を引き出し、假定的安心を與ふるに至れり、是によりて或は靈性を危逸なる誤りに發動せしめ比喩を以て實在物なるか如く認識せしむるに至れり、此の文學に妙機ある處は無量なる哲理を至つて誇大なる比喩を以て示し人生の美性を快抉して理性に繫ぎ想像力を發育して華美なる美術的文學を方便のうちに發達するに至れり、今普觀敎に表はれたる一例を揭く、讀者の便を思り日本文に譯す、

普觀菩薩は身邊無量、音聲無邊、色像又無邊なり、此の國に來らんと欲して自在に神通に入り、身を促めて小さならしめ、知慧力を以て化して白象に乘れり、其象六牙あり、七支地を跏へて七蓮花を生せり、其色鮮白白中に上昇するものなり、頗梨雪山も化を爲すを得す、身の長け四百五十有旬、高さ四百有旬なり。六牙の端に於て六浴池あり、各浴池の中

に十四の蓮花を生ず、池と正等なり、其華開敷せること天樹の王の如し、各花の上輪に一王女あり、顏色紅の如くして天女に過ぎて暉る、手の內自然に五箜篌を化せり、一一の箜に五百の樂器ありて眷屬たり、五百の鳥鳧鴛鴦皆衆寶の色にして華葉の間に生せり、象の鼻に華あり、其色赤眞朱の如く金色にして含んで未だ敷かず、……至心諦觀して大乘を思惟すると休廢せざれば華則ち敷き、金色に金光輝く、其蓮花臺は是れ甄叔迦寶妙梵摩尼にして以て華臺となし金剛寶を華鬚となせり、化佛蓮華臺に坐し衆多の菩薩蓮華鬚に坐せり化佛の眉間より又金光を出して象の鼻中に入る、紅蓮華鼻中より出て〻象の眼中に入り、眼中より出て〻耳中に入る、象の耳より出て〻象の項上を照して化して金臺となる、象の頭上にありて三化人あり、一は金輪を採り、一は金剛杵を把る、杵を擧げて象を擬するに象則ち能く歩行す、脚地を履まず虛を蹈りて遊ふ、地を離るゝこと七尺、地に印文あり、印文中に於て千輻の輪相悉く足を具せり、一一の輪間に一大蓮花を生ず、此蓮華の上に一の化象を生せり、亦七支ありて大象に從從せり、象の鼻は蓮華の色なる上に化佛有して眉間の光を放つ、其光金色にして前の如く、象の鼻中に入り出て〻象の眼中に入り、象眼より還りて象耳に入り、象耳より出て〻項上に至る、漸漸上りて象背に至る、化して金鞍となりて七寶の柱あり、鞍の四面に於て七寶の柱あり、衆寶校飾して以て寶臺をなせり、臺中に七寶の蓮華鬚ありて百寶を以て共に成れり、其蓮花臺は是れ大摩尼なり、一りの菩薩ありて結跏趺坐す、名けて普賢と曰ふ、身は白玉の色にして五十種

の光あり、光りに五十種の色あり以て項光となし、身の諸の毛孔より金色を流出す、其金光の端に無量の化佛有まして諸化の菩薩を以て眷屬となせり、云々……

又隨輪相循說の一斑を示せは無量經に於て

大なるかな大悟大聖主、垢なく、染なく、所著なき天人……、意滅し、識亡して心亦寂なり、其身は有にあらず、無にあらず、因にあらず緣にあらず、自他にあらず方にあらず、圓にあらず長短にあらず、出にあらず沒にあらず、生滅にあらず非造非起爲作にあらず、非坐非臥行住にあらず、動にあらず轉にあらず、閑靜にあらず、進にあらず退にあらず、安危にあらず、是にあらず非にあらず、得失にあらず、非彼非此、去來にあらず、非青非黃、赤白にあらず……三昧六通道品より發し、衆生善業因緣より起る、……實には相非相色なし、無相の相にして有相の身なり、衆生身相の相も亦然なり、又曰く諸法四相の義は苦の義、空の義無常無我無大無小、無生無滅、一相に相なく、法性法相、本來空寂、來らず去らず、出でず沒せず云々。

老莊の說は心無なれは衆妙の道理宿り、之を有相とするときは道理に離るゝと說けり、故に大德は德ならず、最善は善ならずと云ひ、之を例解するに家室の人間を住せしむるは坐敷の空なる處にして柱及ひ戶

障子は人の躰を容れずと云へり、莊子の說は有性と無相とは互に同じき故に衆理虛を理の相となせり、(齊物篇)如斯き文學に甘んずるものは情を淡味ならしめて社會の雜務に厭滯し、己れを全ふするのみにして其他を顧みざるに至る、意の向ふ處遂に佛の敎理と合し、厭世的文學を出するに至る、儒敎の流れは明德を明にするを以て事務となし、道を遠に覓めずして之を經驗と希望とのうちに求め、天によりて人生の雜事を處便することを務む、佛敎の方便の調によりて情の除命を全ふしたるもの之と或は合し社會に活動的文學の一流を出すに至れり。

歐洲文學

歐洲の文學は其源を二泉源より發す、一派はギリシヤ、ラテンの古典より起し、一はユダヤ文學の系統に發達す、英佛の美術的文學はローマ、ギリシヤ、ラテン、の流れに發達せる處多し、其熱力はユダヤ文

學の流動に劣る、米國に至りては全くユダヤ文學の情熱にのみ心醉し之を名けて正理派となし其他のものを邪說派となす、獨乙國は此兩派を兼ね至りて自由にして加ふるに支那文學を混合せり、歐洲文界の叢淵にして文美婉艶四表に流動す、カントの如きヘーゲルの如きはラテンの流れを表はし、シルレル、ゲーテーの如きはギリシヤ、ユダヤ、の系統を多く流す、レッシング、シエベルハウェルの如きは暗約して東洋の哲學に類す、近代に至りシユライヘルマヅヘル、プフライデレル等の學者起り眼光を宇內に放ち達觀せる新說を起し其論鋒隱見覆沒詳知し難しと雖も宇宙的歸一說にかたむき歐洲の固息文學を切倒せんとせり、文界の潮流如斯なるか故に自ら爰に保守派自由派を生じ、互に櫟櫪して以て又文界に化合的新生命を生じ二十世紀に命約せる文學の芳芽を萠すに至れり。

歐洲の文學思想の大班を示せば

眠る心はみくになり、　見ゆる形はおほろなり。　あすはあすなれ今日ばかり、
あわれはかなきものぞかし、なぞとあはれに云はあし。　我が生命こそまことなれ、
肉はちりえと別るれど。　是はからだのうへのこと、　人の願はのみ嗔か。
人の願は是ならず、　只怠らず働きて。　喜びむれにたくわえて、
たのしく暮すことにあり、　此身をよせて先がけに、　なりて益々すゝむべし、
用なきものとなる勿れ、　如何に未來はたのしくも、　此の世のたのしみ通ふらでは、
とてもゆかまトそのみくに、神を忘れすわれを知り、　はたらくべきは今日ばかり、
たのしむべきこと世に多し、喜ぶべきこと又多し、　勉め勵めば得るならむ、
赤心あらば見るならむ、　海より荒き世の中に、　波間に漂ふ捨小舟、
波に浮ばゝ渡るらむ、　波に向はゞ沈むらめ、　さすれば錨を用意して、
心靈して機を知りて、　神にたよりて祈りして、　如何なる運もこゝ〻せず、
高きに至れいそしめよ、　たのしみあるぞいそしめよ、

ユダヤ文學とギリシヤ文學と調和せられて發達せし文學理想の流れし淵源の一班を示せば、

大初に道あり道は神と偕にあり道は則ち神なりこの道は大初に神と偕に在りき萬物これに由て造らる造られたる者に一として之に由らで造られしはなし之に生あり此生は人の光なり光は暗に照り暗は之を曉らざりき

ユダヤ文學思想の淵源の一斑を示せば

心に謀るところは人にあり舌の答へはエホバより出づ人の途はおのれの目にことゝ〻く潔しと見ゆ惟エホバ靈魂をはかりたまふなんぢの作爲をエホバに託せよさらば汝の謀るところ必ず成るべしエホバはすべての物をおの〻その用のために造り惡人をも惡き日の爲に造りたまへりすべて心たかふる者はエホバに惡まれ手に手をあはするとも罪をまぬかれず憐憫と眞實とによりて愆は贖はるエホバを畏るゝことによりて人惡を離るエホバもし人の途を喜ばゝその人の敵をも之と和がしむべし義によりて得たるところの僅少なる物は不義によりて得たる多くの資財にまさる人は心におのれの途を考へはかるされどその歩履を導くものはエホバなり智慧を得るは金をうるよりも更に善らずや聰明を得るは銀を得るよりも望ましき悪を離るゝは直き人の道なりおのれの道を守るは靈魂を守るなり驕傲は滅亡にさきだち誇る心は傾跌にさきたつ卑き者に交りて謙るは驕ふる者と偕にありて獲物を分つにまさるエホバに倚頼むものは福なり心に智慧あれば哲學と稱へらるくちびる甘ければ人の智識をます明哲はこれを持つものに生命の泉となる愚なる者をいましむる者はおのれの

愚是なり智慧ある者の心はおのれの口をなしへ又おのれの口唇に知識をますこゝろよき言は蜂蜜の如くにして靈魂に甘く骨に良藥となる人の自ら見て正しとする途にして終はつひに死に至る途となるものあり勞する者は飲食のために骨をる是その口已れに迫ればなり邪曲なる人は惡を堀るその口唇には烈しき火の如きものあり僞る者はあらそひを起しつげくちする者は朋友と離れしむ强暴人はその隣をいさなひ之を善からざる途にみちびくその目を閉ぢて惡を謀りその口唇を蹙めて惡事を成遂く白髮は榮の冠弁なり正義しき道にて之を見ん怒を遲くする者は勇士に愈りおのれの心を治むる者は城を攻取る者に愈る人は禍をひくされと事を定むるは全くエホバにあり

ラテン文學理想の歐洲へ流れ來りし淵源の一斑を譯出すれば

宇宙のことは彼是の、別を論せず諸共に、理法のなきはあらぬかし、天に光れる星月や、地に生ひ出つる動植や、是等を樂む人間も、皆諸共に一串の、道を通して出つるなり、心靈してなかむれは、人も草木も獸類も、空かけりゆく鳥類も、こゝろを持たぬものはなし、其又心に强弱の、別はあれども皆共に、仝し理法の生き死にぞ、先はあるやらあらぬやら、元きし道に歸るやら、其又道は如何樣の、ものであるやら知られども、兎に角物は理に出てゝ、又此理にぞ歸るらめ、……

文學の調停

文學ありて社會あるにあらず、社會ありて文學あるものなり、社會ありて人間あるにあらず、人間ありて社會あるものなり、社會は人によりて成り、人は文學によりて其責任を全ふす。人文學を離れて思想なり難き如く、文學も亦人間を離れては、花蕾綻びさるものなり、人の文學に於るは恰も魚の鰭に於けるが如し、人文學の叢淵に泳ぎ、文學は人の思想を通して浮び出つるものなり。魚能く鰭を持つと雖も水を離れては鰭を用ひ難し、水と魚に於けるは文學と天地に於けるが如し、天地あり、社會あり。此間に人ありて始て文學を草す、此天地人の三遇は實に是眞實なる文學の父母なり、眞實の文學によりて眞實の人起り、眞實の人を通して眞實の文學生る、人天地より離れ難く、文學亦

人より離れて社會の外に立つの用なし、合循連帶其關係の密なると恰も叉輪の相關係するが如し。

知性ありて本性あるにあらず、本性の命によりて知識は發達するものなり、本性を經ざるの知識は不完全なる感覺にして社會に油するの良知にあらず、情性ありて本性あるにあらず、本性ありて情性あるものなり、本性の命を經さるの情動は亂雜なる發動をなして知識を油するの良情にあらず、良知なくして良情起る術なく、良知なくして知識機に働くの敏なし、良情の起る術なく良知機に働くの敏なくして完全なる思想起るの所以なし、完全なる思想起らすして天地を解したるものなく、人を知りたるものなく、社會を識りたるものなし、天地を解せず、人を知らず、社會を識らざるものは、完全なる文學を起すとなし、啻に起すとなきのみならず、文學の何たるを知るとをも了識するとを

得ざるものなり。

文學人と調和を失ひ獨り一隅に隱れて光明なく、人も亦文學を味ふの生命なく、獨り呻吟して中夜に泣く、文仙天地に羅列し人を招くと雖も人之に應して門戸を開かざれば强て來らず、人之に應すると雖も其應ずべき資格なきものは應するのみにして益なし、啻に益なきのみならず反て其身を害するに至るものなり、文學者は偏理を玩弄び純正の道理を以て指導せじ、若し導くとすれは高尚に失して只一隅の人に適するのみ、社會は罪惡に沈論して目前の活路に苦み、道を忘れて愈々道を識るに至る、之に應するの資格なきは資格なきものゝ怠りなり、道理を忘れて道理を識るは識るものゝ罪なり、猥りに偏理に甘醉し或は高尚に失するは偏理に失し高尚に失したるものゝ不注意なり、不注意の起るは信實なきを以てなり、高尚に失するは社會を愛せざるなり、

論理に意張り立つるは普通の文識を畜へざればなり、譏りて罪を招くは道を愛せざるの天刑なり、怠りて資格なきものとなるは自ら招く馬鹿なり、馬鹿となり、天刑を招き、普通の文識を備へず、信實なく、社會を愛せざる皆人生の本性にあらざるなり、人生の本性を欠きたるものは天則に則らざるものなり、天則に則らずして社會を知り、己を知り、境遇を知り、物の接合を知り、人情を知り、知性を知り、人生に適合せる文學を草することを得んや。

彼等は天則を愛せざるにあらず、天地を嗜好するの本性を失へばなり、彼等は本性の完からんとを欲せざるにあらず、然れども如何にして完からんか術數殆んど盡果たり、彼等は謹慎家となり、普通の博識を得し、卓觀せる觀察を具備するとを好まざるにあらず、然れども如何にして博識に觀察し、如何にして不正義より離るべきか思術殆んど枯れ

盡くせり、若し爰に不正義をして正義家となし、偏理家をして達觀となし、本性を道理に接合せしめて博識となし、達觀となし、天則に到らしむる術てありとせば、是れ萬障を除却して考究せざるべからざる急務なり。

天地の顯象は知識的の性を多く發揚し、義人君子の血涙は惰者をして勇奮せしめて道德的情性を感發せしむ、天地道德性を發揚すへき神氣なきにあらず、只墮落せる人生は天地の顯象に親しく接吻するを得ざれはなり、山水の明媚、知情を流さざるにあらず、然れとも人間の知情より遙に劣るものなり、啻に劣るのみならず道德的の生命は全くなきものなり、獨り人間に至りては天地の法則を充し、靈を有し、知を有し、愛を有し、正義公道の靈命を有す。法則を充したるものは不法の改良せられん爲に身を盡し、雜事を明察し神氣慄然人を畏服し正義公

道を有するものなり、愛を有するものは人の爲に寛忍をなし、人のために益をなし、妬まず、誇らず、驕らず、非禮を行はず、利私のみに進まず、輕々しく怒らず、不義を喜ばず、凡そ事包容み、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事忍び、憐恤者の爲に涙を流し、不正の爲に血を灑ぎ、不義者を救ふ爲に献身し、社會の不調和を悲み、人の道より離れしを歎き、人生の本性を甦發し、博識を與へ、觀察を與へ、勇氣を與へ、忍耐を與へ、雅量を與へ、歡を與へ、正義公道天眞の生命を與へて、達觀家となし、博識家となし、本性を有する神人となし、圓滿無量の樂園に救ひ出さんとして勇奮して不義の爲に九嶽の苦極を永續せらるゝも其氣節を掘かざるものなり、其義節は奮漲して四境に猛溢し、其仁愛は萬難を解溶きて快情の東天に近つかしむ、靈泉となりて干燥界を濕し、靈光となりて暗界を輝し、新生命となりて陰雲たる死塊を

活動せしむ、茲に於てか惰者は奮勵し、不義者は義あるを知り、姦佞其處に安んせずして義界に旅立を始むるに至る、久しく俗塵に葬られし知情は靈泉に濕はされ、靈光に照され思々懺悔茲に始めて人生の大問題を識得し、社會を覺り、天地を知り、己れの如何なるものなるかを氷解するに至る、人生を識りたる眼光を以て人生を察せば人生の過失を生ずるとなし、己れの如何なるを知りて社會に立たば其接合を失策に過つとなし、天地の如何なるものなるを達得したるものは天地の法則を嗜まざらんと欲するも得べからざるなり、天地を達觀して天地を達觀したる人の文藻を讀み、人生を覺りて人生の活る問題を解說す感する處、思ふ處、進む處、退く處、爲す處、止む處、百情三知、其軌に則らざるなし、百情三知公義公道に依りて進まば爲すものとして成らざるなく、思ふ處として正ならざるなく、感ずる處として愉快な

らざるはなし、則ち是れ天地を知らしめ、本性を識らしめ、博識となし、卓觀家となし、天則に則らしむる處の生命なり、吾人如斯き義聖者の起らんことを望む者なり、若し起らざるならば如斯大聖の靈命を干藻せる社會に繫がんことを渴望して置かざるなり是れ文學と人生と調和せしむるの秘機吾人は他に求むるを得べからざるなり、之に仍りて文學家たらば眞正の文學者たらん、之に仍りて文學を味はゝ其趣味腦裡に溢れざるなし、求道者も、勤役者も、義に勇み、道に進み、己れを知り、人生を識り、社會を覺し、天地を觀察し、其適合を誤らざれば何んぞ文學と人間と調和せざるの理あらんや。

自然の文學に關る調和

完成せるものは完美なる外觀を與ふ、不完全なるものは完全なるものを需む、天地の法則は完全なるものたり、山海動植は法則を完滿して

出つるものなり、故に天地の外觀は審美を示す、蒼天の星辰、深山の泉、涎々たる群鳥、牝獐の子を愛するのさま、婉艶なる嬰兒の笑顏、俗人と雖も之に對して喜悅の情を促かさゞるものなし、既に喜悅の情を起す是れ美に應化したるの時なり、喜の爲には困難も意とせず、朝起をなし、忍耐を爲し、希望を生し、練達を生し、彼岸の審美と同化せざれば其樂より離れ難きものなり、浦島太郎の如きは山水の美を求めたるものなり、西行の如きは天地の美に招かれて銀猫を忘れたるものなり、怒聲眉を顰むる不調和の家庭も愛子一笑の美情に困苦を意とせざるものなり、常盤御前の如きは此の美に招れて身を全ふしたるものなり、山水に招かれたるものは山水に終り、天地に招かれたるものは天地に活歩す、情の美に接したるものは情中に理性を全ふするものなり、此喜ひを詩に詠じ、此美情を文に章せば、天地に接り、困難に

進退を辨じ難きもの又能く其機を辨す、其機を識り其情を探りて又完全なる審美に接すれば流れて泉となり、河となり、圓滿喜樂の彼岸に達する難きにあらざるなり。

音樂の文學に關する調和

眼を通して天地の理法を認識する是を觀察と云ひ、其快味なる感情を美と云ひ、耳門を通り音聲となりて認識する是れを音樂と云ふ、風雷海波の怒號、階々たる小鳥の音聲、悲哀なる蟲聲、六律六呂の和聲、皆天音の生命を送るものなり、人を笑はしめ、或は泣かしめ、或は怒らしむ、起坐進退人生を自由に支配する自在力を有するものなり、敦盛をして青羽の笛を死出の遺産に殘さしめ、信玄をして生命を之に奉ずるに至れり、其他蟲聲に風雷に人生のさとりを促かさるゝもの幾人なるかを知らざるなり、之を利用して戰爭に用ひ、祝會に用ひ、

に用ひ、危嶮なる情の發動を理性に調和して人生の識りに媒介せざるものなし、嗚呼音樂の靈能夫れ偉ならずや。

義人血涙の文字に關する調和

出師表を讀んで涙を流さゝるもの其人にあらず、佐倉宗五郎の血涙に望んで節義の情を起さゝるもの人性にあらず、人は學問を修めざるも普通の道理は經驗によりて保つものなり、理性には或は乏しき處あるも節義の血涙に灑かれては濃厚なる情の發動は暗節して理性を完全に敏動せしむるものなり、世には理想を持つもの至て少し、世には學理に通曉したる者又少し、文學の目的は少數の者に道理を識らしむるものにあらず、全社會を平等に導かん職務なり、全人類を道に進めんが爲なり、全人類を敎ゆるには全人類の感し得べき方法を覓むるを要す、近時二三の文學者は義人の血涙を以て理想界を調和せんとせらるゝを

謝す、地方の爲に涙を流したる義人は地方の人に涙を流さしめ、一國の爲に涙を流したる義人は一國民に涙を流さしめ、全宇宙を激動し得べき憤慨なる血涙を絞りたるものは全宇宙の理想を支配するものなり吾人は余が枯死せんとする理想に最氣焔ある血涙を以て生命を與へられんとは希望に堪へざるなり。

宗教の文學に關する調和

前半世は知識を需め後半世は靈魂の安を貪む、是れ性情と歴史の示す通理なり、前半世は破壞的の時代にして後半世は建設の時代なり、此の故に知識の最終は靈界に渡り靈知は流れて事理を建設するものなり最終の知識を講じ建設的の安逸を導く、宗教の勢力ある所以爰に察せらるべきなり、夫れ宗教は事業に失望せるものを勵まし、困難なるものを助け、諸能力の主府なる靈想の苦悶せしものに快樂を與ふるもの

なり、(余の爰に宗教と唱ふるは人情と理性とを兼備せるものにして如何なる社會にも適し得べき天啓の調和力を有するものにより道理と人間と密接せられんことを渴望して調和力の助勢によりて其調和せらるゝ方法に熱望する有志の集合体を云ふ)所によりて志節を養ひ、音樂によりて高雅の美性を養成し、演舌に仍りて人の經驗を示され、失望なく、困苦なく、煩悶なく、愉快のうちに能力を發達するものなり、」文學働きて宗教を起すにあらず宗教反て文學を起すものなり、宗教盛んなれば文學美術盛んに起り、宗教衰頽すれは文學美術隨て廢たる、エヂプト、ギリシヤ、ローマの文學美術、奈良、足利、德川の文學、支那に於ける、印度に於ける、歐洲の文明に於ける、皆宗教の生命に由りて發達せさるものあらさるなり、眞正の美術家、眞正の文學者、眞正の哲學者に宗教の感念なくして發達せしもの一人もあらず、ソク

ラテースの如く、ゲーテーの如く、シルレルの如き、馬琴の如き、紫式部の如き、皆此思想の門戸を經さるもの一人もあらさるなり、田夫無知一介の賤民も之によりて文學者となり預言者となり英傑となりたるもの幾人なるかを知らさるなり、馬太の如きヨハネの如きアンデレの如き王郎の如き皆此思想に浴せしものなり、此の宗教は眞正の學者を起し、貴賤賢愚少も偏するなくして快活のうちに高雅逸美の思想を天外より呼下して人生に階しする調和の生命なり。

美妙後篇終

明治二十九年一月十七日印刷
仝　年一月廿日發行
明治三十二年二月廿八日八版發行
定價金二十錢

著兼發行者　大月隆　東京市神田區錦町一丁目八番地
印刷者　金崎金平　東京市小石川區指ヶ谷町百卅六番地
印刷所　博進社工場　東京市小石川區久堅町百八番地

發兌元　東京市神田區錦町一丁目八番地　文學同志會

版權所有

大賣捌處

東京々橋區弓町　松村三松堂

東京神田區雉子町　岡崎屋

大坂備後町五丁目　盛文館

大賣捌

大賣捌

購讀者　全國最寄各書店に注文を望む

●文學同志會出版書籍目錄●

人間學

定價二十錢
郵稅四錢

世には百科の學藝に長するもの多し然し人間學を脩めたるもの少し凡ての學藝は人間の爲に設けたるものなれば人間の成立目的事情及び如何にして完全なる人間の眞價を保つべきかを研究しつゝ脩めざるべからず若し然らざれば己が習ひ得たる學科の爲に人間は擒にせらるゝに至る本書は此社會の凹所を微か補んが爲に出でたり

美妙

定價二十錢
郵稅二錢

春は花夏は螢秋の虫の聲冬の雪是等を始めとして人生の美貌鳥獸の艶ある事及び音樂より來る美如何に人生に快樂を與ふる賜なるか本書を繙くときは幽谷の鰐魚又飛立の妙美あり

文學の調和

定價二十五錢
郵稅四錢

國異れば各々異りたる所の事情あり異る事情より各々殊別の文學を生む是れ一般の通理なり然し深く探究し來れば皆一に歸するものなり本書は各國文學の異る處を示し長

短の意見を示し如何にして其調和均一の點に達すべきかを詳論せり

人生の目的

定價 二十五錢
郵税 四錢

●第一章緒論●第二章飲食主義●第三章勤勞主義●第四章競爭主義●第五章知識主義●第六章良心主義●第七章忠孝主義●第八章幸福釋義●第九章自愛主義●第十章他愛主義●第十一章兼愛主義●第十二章保存主義●第十三章飲食主義批評●第十四章勤勞主義批評●第十五章競爭主義批評●第十六章知識主義批評●第十七章良心主義批評●第十八章忠孝主義批評●第十九章自愛主義批評●第二十章愛他主義批評●第二十一章兼愛主義批評●第二十二章保存主義批評●第二十三章結論

人生の老旅

定價 二十錢
郵税 四錢

世に不幸の人多しと雖も己のが涙の洩し場なき人ほど苦痛の人はあらざるべし人生の老旅は是等の人の情友となり人なき處に於て深く兄姉の同情を表し其煩悶を慰むべし本書は人生の初旅の後篇なり初旅を讀む人は必す後篇を讀まざるべからず

婦人實務錄

定價 十六錢
郵税 二錢

此書は議論にあらず婦人の實際毎日心得ざるを得ざる教訓心得方針を信切に說き苟も婦人として心得ざるを得ざる案内書也

人生の初旅

定價 二十錢
郵税 四錢

人の一生中には如何なる事が起るか如何に歩まざる可からざるか如何にせば立身すべきか如何なる人が失敗せしか本書は未聞快絕の實行錄なり詩文あり散文あり小說あり議論あり先づ一生涯の漫錄と思ふて可なり

家の寶全

定價 三十錢
郵税 六錢

本書は文學會の方針とする家制部發表の書にして各專門大家の家制意見及び家に起る萬般の事業方法を敎へ其項目にても五百有餘あり廿八年初版を起し今廿三版を重ね部數二十七萬部を出せる書なり手に取りて其價額を知れ始は二冊なりしが今は合本なり

馬琴妙文集

定價 二十錢
郵税 四錢

詩文散文序文末文碑文箴文戲曲坐右銘等馬琴全著述中の粹を集めたるものなり

實業の寶

定價二十錢
郵税二錢

此書は家の寶の兄弟となり得べき書にして家の寶は家の内の事に係り實業の寶は家の外の事に系る恰も車の兩輪の如し書を好むもの丶好侶伴たり

立身事蹟

定價二十錢
郵税四錢

世には失策者を以て充たせり失策せぬ先に失策に陷らざる方法を講ずるは立身の急務なるべく古今の聖賢と坐右に立談し彼等が失策と成効の事蹟を尋ぬ本書を友とするもの立身せざらんと欲するも豈得べけんや

山高水長

定價二十錢
郵税四錢

語らんと欲する事を語らずして人に知らしめ言はんと欲する事を口に明かに言はずして其言聲の美を知らしむ是れ新体詩の殊色なりとす坐ながら天地の快美を味はんと欲するものは山高水長の傍に來れ